

ると醍醐の味あり、虚堂は此魂膽を見抜いて下したる拈評を厄介物の寄合ぢや。

### 五百七十 虚堂結夏小參

舉虚堂結夏小參。旃檀叢林、旃檀圍繞、橋之則片片皆香、荆棘叢林、荆棘圍繞、棟之則枝枝可畏。故我釋迦老子以平等性智攝諸比丘、同入大圓覺海。於二百二十日長期之內、撈捩澄瀉成就慧身。要且不見有禁忌安居之相。今正是時、合作麼生、卓拄杖、竹杖化龍去、痴人屢夜塘、旃檀叢林、接玄妙殊勝學徒、荆棘叢林、惡辣宗匠、接牙如劍、樹口似血盆、底衲子蓋荆棘叢林。所謂不住圓覺伽藍、不守三期禁制、底頭角龍象、昂昂藏藏、故謂可畏。反之、旃檀叢林、講經論祖錄、溫厚篤實之士多。故謂片片皆香。而今結制一百二十日、內撈捩澄瀉成就慧身。令打成一片、故不見有禁忌安居之相。且道、竹杖已化龍去、痴人猶屢夜塘水、天心衲子豈拘束此圓續中哉。姮娥已入月中去、凱郎猶虛守空房、喝即今何處討鬼子。

此の小參は虚堂絶前絶後の妙唱ぢや、虚堂の意は荆棘叢林可畏の衲子を敲き出さんとするが、目的ぢや、故に一百二十日の内、撈捩澄瀉惡辣の鉗鎚を施して慧身の身心を成就せしむ。此種の銅眼鐵額の恐るべき衲子は、安居禁忌の制規に拘泥するものではない。大圓覺海を撈捩し、禁忌安居を勃超する底は、今正に是の時ぢや、怎ういふ時か、早

變りの名人なる虚堂は最早茲に居らぬぢや、はてな怎した。卓拄杖、竹の杖は疾くに龍と成りて、天に上つてしまつた。开れに痴人は、まだ愚圖々々と磯邊に魚蝦を探り廻して居る、咄馬鹿め。

### 五百七十一 永明撲落非他物

舉永明壽禪師在天台韶國師會中、普請次、聞墮薪有聲、豁然大悟、乃云、撲落非他物、縱橫不是塵、山河并大地、全露法王身。虚堂云、壽禪師大似窮儒、登群玉之府、無不稱心滿意。只是中間有一字子未穩。

只是中間有一字子未穩、中間二字、山僧久爲虚堂所欺、瞞即今既已捉敗了也、却笑虚堂一字子未穩矣、咄。

永明投機の偈、虚堂は中間一字子の未穩があると云ふが、山僧ならば、貴きこと金玉の如く賤きこと泥土の如しと云はん、知らず永明當時何を悟つて、此偈を作る。虚堂那處を見て、未穩と云ふ、遲擬すれば、十萬八千。

### 五百七十二 建長獅子吼無畏說



舉建長上堂獅子吼無畏說河沙諸佛同一舌針頭不用重添鐵良久云大小建長弄巧成咄  
大小建長皮下無血久默斯要不說當言何須遮截舌八十翁翁嚼生鐵何似東山大脫空  
證龜剛作鼈

釋迦の説法は獅子吼無畏説ちや釋迦ばかりでは無い大悟の者は皆獅子吼ちや無畏  
説ちや六萬恒沙の諸佛四七二三の諸祖も皆同一舌ちや針頭に鐵を添るに及ばぬが  
驚腹に肉を剉るも亦無益ちや良久して云く大小の建長巧を弄して拙々成す餘り好  
手に過るとつひ遣り過して拙と成る拙と成つたが面白いちや角を矯めんとして牛  
を殺したさア仕損じたぞ後悔臍を噬むも及ぶことでない咄

### 五百七十三 佛光達磨忌拈香

舉佛光達磨忌拈香嗚啾嗚啾對面是誰眼圓齒缺我不識伊無德可報無恩可酬茫茫滄海  
浪打石頭

茫茫滄海浪打石頭咄箇缺齒碧眼我與爾有甚冤讎悲憎會苦也對面拈香三拜聊言  
酬匪報也永以為好也山悠悠水悠悠  
初祖忌拈香佛光彌天の筆を把つて審したぞ嗚啾嗚啾對面是誰ぞ此八字で達磨に

相見せよやれく其方は何者ぢやな此已下は注解ぢや圓い眼玉の齒脱け老爺何處  
の風來ものぢや此方は开んな者に用は無い恩徳を報ゆるの復へすのと云ふことは  
少しもない恩に報するか宛に酬ゆるか佛光餘りである併しながら山の恩海の徳言  
語に絶えて述べ様がない茫茫たる滄海浪石頭を打つ此八字講釋して見よ怎ういふ  
處を云ふたか限りも極もない大海にどうくど白浪が起つて岩を打つ浪が巖を打  
つか岩が浪を打つか我が浪を打たか浪が我を打つか達磨か佛光か爰に至つては五  
千四十餘卷の經でも説盡すことは能さぬぞ

### 五百七十四 大應現成公案

舉大應上堂見成公案迥絕商量渾崙句子未舉全彰直得崇福無開口處諸人合作麼生噫  
切忌妄通消息

圓通大師靈龜曳尾若是崑崙句子三世諸佛亦無開口處崇福雖通消息且得沒交涉  
從上老漢爲此一字子盡力而不得描寫其片影瑞阜一向嚙口非敢不道道則家噉畢竟  
如何久默斯要不務迷説

大應上堂やれく八釜しいことぢや現成公案迥かに商量を絶つともう开んなこと



は休みぬく、大應尊公に聞かずとも解かつて居るよ、渾崙句子未だ擧げざるに、全く彰る已に擧したら猶ほ彰はれぬぞ、崇福口を開く處無いとて已に説了れり、諸人に妄りに消息を通ずなと誠むも、奈何せん靈龜已に尾を曳く、可惜許、慈口蹉過

### 五百七十五 五祖東山入寺

舉五祖東山入寺拈香示衆云、八十翁翁、輾轉遂付維那、宣疏畢、陞座云、三處住持、只這滋味、這回冤家、難爲迴避、白蓮峯鼻孔、海會山出氣、

這回冤家、難爲迴避、道什麼、冤乎難乎、五祖之於黃梅、熟處難忘、雖然不可來償夙債、八十翁翁、輾轉出氣、看看人天、仰瞻放光動地、

五祖海會より黃梅東山に移、極した拈香示衆に云く、不恰好な似合はぬことぢや、八十の翁が、絨だらけの手で、絨毬を輾く、美事なものであらう、五祖箇様ことを云ふから、引き出されますよ、遂に陞座して云く、四面太平、海會の三處に、住持したが、只這の滋味、何處も彼處も同じ様な、藍梅風味ぢや、這回冤家、迴避を爲し難し、今度黃梅に出でられたるのは、冤家ぢや、冤敵に睨まられたで、逃るゝことは、難いとは、是れ什麼、何にか、冤家ぞ、是れが五祖の毒味ぞ、白蓮峯下の鼻孔、海會山に、氣を出す、今茲に居るも、海會で息して居

るぞと、懷州の牛禾を喫すれば、益州の馬腹脹れる。

### 五百七十六 五祖入山祖師塔以此爲驗

舉五祖入院祖師塔、燒香以手指云、當時與麼全身去、今日重來、記得無復云、以何爲驗、以此爲驗、遂禮拜、

祖禰不了、殃及兒孫、東山老師來也、當年錯托生於周氏、爲償夙債、再投冤家、咄、早知今日事、悔不愼當初、

五祖黃梅に入り、忍大師の塔處に香を燒く、手を以て、指して云く、當時與麼に、全身去る、何等の捏怪ぞ、山僧は信せぬ、昔し此通りに寂滅したと、五祖一寸撮まれて居る、今日重ねて出て來たが、記憶して居るや、怎うぢや、復云く、何を以て、驗と爲す、何に其證據ぢや、此が確かなる證據である、と禮拜した、是れ什麼、師の行實に、是より先き、五祖遺記に曰く、吾滅後、眞身を留ひべし、吾が手啓いて、擧れば、吾再び出でん、師住山の時、塑手泥、漆中裂け、相去容る也、衆咸之を異とす、師手を以て、指して云く、當時與麼に、全身去と、是等の因縁に由つて、忍大師の再來と爲すは、古來の説ぢやが、奇怪な捏造は、面白くない、這般の牽強附會、無くとも、五祖は再來に違ひない、五祖の再來は、誰ぢや、機感縁熟したら、







此もない短を較べ長を論ずるに及ばんと云ふか扱て一枚平等の内より跳り出て見れば青山路無き様に見ゆれども矢張堅横十文字に往來が通じてある深夜に狼が人かど間違へて柱に吠えつく權兵衛が平太に報知して石地藏が昨夜出産したとさア佛光何を喋々饒舌する頭も尾もないにと云ふたかと思へば秩序と路がついて人も歩み狗も吠えるそれかど云ふと石牛が子を産だ頓と解らん和尚ちや解らん管ちや拄杖を一畫して云く勞して功無し折角骨折つて生んだ甲斐もなく死んで仕舞つた爰が云ひたい計りぢや併し捕捉どころの無い上堂ぢや向上の調子ぢや人々宗旨を手に入れると斯ういふ場合が我口より出て來る様にならねば飽參とは云へぬぢや

### 五百七十九 虚堂上堂空山無人

舉虚堂上堂云空山無人水流花香鶯子滿慈淚其智辯離婁師曠其聰明何也識法者懼這箇話爭得道得合理何者我自從賢聖法來未嘗殺生滴翠云蔽蒂甘棠勿剪勿伐召伯所委瑞阜云曲終人不見江上數峯青者箇是擬向則背道則瑕生也誰是不觸爺諱者有麼有麼備才開口則瑕生也道道又云再犯不容此上堂すと摺り上つた向山の調子ぢや空山人無くして水流れ花香し此八字で虚

堂を看よ無理に解せ様とすると見えぬぞ境界が爰まで進まぬと此場合が著實ぬぞ講釋したり教へられる者で無い山河は鏡中に在て観ずか往けたら少分の相應あらう鶯子舍利弗の智慧も滿慈富婁那の辯も到底も届かぬ離婁の明師曠の聰も茲に至つては總て失敗ぢやなせか法を識る者は懼る聰明知識で往けるものなら誰でも爲る知らねば滅多に喋々するも法を識つたら容易に口を開いて道へたもので無いぞ

### 五百八十 龐居士下橋遭擲

舉龐居士因賣漚離下橋遭擲女子靈照一見就父身邊臥士云作甚麼女云見爺倒地急來扶起意耕拈云虎憎鷄背聞者畏之後人銜鑑不高喚作二俱弄險龐老父子居常不善父攘羊子證之見爺倒地急來扶起邪法難扶父呪子謂結冤不休這箇之門誰有入者何故一畝之地三蛇九鼠這は是れ龐居士の機鋒を擧たぞ厄介な漢が其上に小娘まで悟り傷つた活用を爲るまア見給へ碌でも無いこと父子同伴で漚離賣は面白いが一時橋を下るとして失脚して顛んだ靈照娘それと一見するや直に父の邊に就て横さまに臥た居士云く是れ娘甚麼を作すかと娘云く爺の地に倒るを見付けたから取る者も取り敢ず死急に扶け



やうとて参りましてムると是れ什麼爰が虚堂も面白ふて堪らんで拈弄した虎は鶏  
拈を憎む聞く者之を畏るとは虎憎鶏拈尖とある筈家相尅歌の語ぢや怎ういふこと  
か虎は鶏拈の尖つたを憎み之を聞さへ怖がることさア居士が靈照の名さへ聞けば怖  
いに自分の傍に臥てけつかる猶ほ身毛悚慄する後人の鑑定は權衡を失ふて只二人  
俱に足踏みもならぬとしたは其當を得ぬと虚堂絶前絶後の拈評ぢやが電の眼を開  
かないと見えぬぞ。

### 五百八十一 虚堂謙和尚遺書至上堂

舉虚堂上堂雪竇謙和尚遺書至敲雲夢破漱玉舟移乘時撥轉虚空大地了無寸土故我妙  
高孤頂大猷老人和猷糲麵起中峯已墜之宗嘆土吹沙瞎松源爲人之眼秤槌兌汗淚出痛  
腸箇般生滅惡冤家萬古千秋終不死。

大猷老人虚堂法叔其死也不死其冤也不滅猛如虎狼如羊貪如狼強不可使者謂之荷  
負大法之師乎今也則亡慟亦不得淚亦不出這般惡冤家死而不吊者矣嗚呼  
雪竇大猷老人は松源に嗣ぐ虚堂の法叔にして惡辣の宗匠である故に遺書至ると同  
時に虚堂も非常に歎惜と見えて此上堂格別に拈弄れた敲雲漱玉は共に雪竇の境致

亭の名ぢや夢破れ舟移る此界縁盡き時節到來虚空を撥轉して寂滅した當體大地に  
土一と嘗もない扱て此妙高孤頂の大猷老人こそ乃公の法叔ぢやが意地の悪い加減  
は怎うぢや羊頭を掛て狗肉を賣る兇獣に和せて精麵を糲る狡猾な手段は中峯已墜  
の宗を振起した土を嘆き沙を吹き獸類の狼藉と同じく惡辣の垂手は松源爲人の眼  
を瞎却した秤槌に汗を搾る様な泣いても笑ても歸らぬ爰んな人はまたと有るまい  
乃公も連枝なれば泣かねばならぬが涙は一通りで無い心腸に痛徹した箇般生滅  
の惡冤家喜怒哀測ること能はず狂漢は悪るしたら千劫萬劫眞個に死に切れまい  
と是れ什麼虚堂讚か毀か讚毀を絶して最早相場の付け様もないと根性の悪るい  
尚ぢや斯ういふ老人でなくては大法を荷擔して佛に代つて化を揚ることは能きぬ  
ぢや。

### 五百八十二 翠巖夏末示衆

舉翠巖靈修禪師示衆云一夏與兄弟東說西話看翠巖眉毛在麼保福云作賊人心虚長慶  
云生也雲門云關虚堂拈云三大老各出隻手要扶樹翠巖門戶以報雪峯爭奈只解同心不  
能同志



翠巖門下三大老。虛堂以爲只解同心。不能同志。瑞阜即不然。這裏何所在。說心說志。保福失鏡。遭罪。長慶失錢。遭罪。雲門失錢。遭罪。翠巖失錢。遭罪。豈啻雪竇。

此虛堂の翠巖眉毛話の拈評は淡泊にして厭味は無い。三大老の翠巖家風を扶樹するの心は同じけれども志は違ふと想ふ。保福は賊と作る人心虚はると云ふたは名語翠巖の布袋腹を看破した長慶は生なりは老師は餘り誹謗して癡病にでもなり眉は落ちたせぬかどの御氣遣ひは御無用御安心なされと慰めた雲門の關字はもう關が鎖した怎んな者でも通さぬと翠巖を前際後斷した是れ其志を同ふせざるなり山僧與麼の妄解は固より本則を扶樹するに足らず要するに虚堂不同其志とは一水四見て天瑠璃人水魚宅鬼火ぢや錯々注脚を下す咄。

### 五百八十三 佛光上堂透得這裏

舉佛光上堂拈拄杖云。透得這裏許。偏出地獄透得那邊許。偏入地獄。其或未然。驢唇先生道底。拈拄杖。一槌在。謝安若不出。奈蒼生何。今蒼生奈卿何。咄。

這裏に透得して地獄を出し去ることは大死一番の上に於て得べし然れども祖庭猶は天涯を隔ることあり那邊に透得せば偏に許す地獄に入ることとを那邊とは是れ什麼大丈夫兒一番子して地獄に入て地獄の親方と爲り活潑々地に衆生を濟度せよ那邊魔界に入て一と跳り跳り出て自由自在に生死界に横行し衆生界盡るも我此願は盡さずの勇猛心なかるべからず若し然らずんば驢唇先生軍書語りの軍談なるのみ佛光の拈拄杖這裏か那邊か咄眼を著て看よ。

### 五百八十四 崇福拈洞山無寸草公案

舉崇福舉洞山萬里無寸草處去公案。師拈云。洞山恁麼指示人。不覺全身入草。石霜只要相見洞山。未免同在草裏。崇福則不然。初秋夏末。兄弟東去西去。各自途中善爲。洞山只見錐頭利。不知盤頭方。石霜削圓方。竹杖鞭却紫茸。既崇福通一線路。各自途中善爲。也是養子之緣。瑞阜也不免下者注脚。從上老漢把不住。只解逐節論時。豈不見乎。各自脚跟下不生草。則何論結與解。從他水邊林下無處而不可。雖然月到中秋滿。風從八月涼。洞山無寸草の處に去れ。石霜亦未だ草裏に在るを免かれず。崇福各自途中善く爲せよ。依然として草裏の漢。三箇の老凍膿。只是れ出草を解して入草を料からず。入廊手を垂



れて救はん。と欲して覺えず。滿身泥水に没して歸り來る。咄。

### 五百八十五 五祖上堂古人道

舉五祖上堂。古人道。夫爲善知識。須是驅耕夫之牛。奪飢人之食。驅耕夫之牛。令他苗稼滋盛。奪飢人之食。令他永絕飢虛。衆中聞學者。多是如風過耳。相似。既驅其牛。爲什麼却得苗稼滋盛。既奪其食。因什麼永絕飢虛。到者裏。須是有驅耕夫之牛。奪飢人之食。底脚手。便與一抄逼。一逼。趕教走到結角處。便好向伊道。福不重受。禍不單行。  
五祖年老心孤。思兒念孫。日夜忡忡。夫奪耕夫之牛。奪飢人之食。即是粥僧家。常茶飯。何足異焉。瑞阜深愛。後語。福不重受。禍不單行。雖然事不可一向。萬般存斯道。一味信前緣。可以當之矣。

箇は是れ五祖劈腹剗心。師家分上の規鑑と爲すべき。垂示ぢや善知識は耕夫の牛を驅り飢人の食を奪ふ。辣手腕なかるべからず。學人の悟處も會處も悉皆奪得するに非ざれば。好い學者は能きぬ。學人の味著耽執する法愛を奪得するに非ざれば。好い弟子は能きぬ。とは古人の道破せられたる語ぢや。それで耕夫の牛を奪へば。他の苗稼を滋盛ならしめ。飢人の食を奪へば。他をして永く飢虚を絶せしむ。乃公が衆中にこれを聞て。

馬耳東風合點の往かぬ者あるは。是れ反對ぢや。承當が能きぬ。牛を奪はるれば。苗稼枯死して。食を奪はるれば。忽ち飢渴に陥る筈ぢや。が學道は爾うではない。耕夫の牛を奪ふて。抄一抄し。飢人の食を奪ふて。逼一逼して。趕て走らしめ。結角の處まで趕詰ると。撥轉始めて息を吐いて蘇生す。そこで乃公が道ふのぢや。福重ねて受けず。禍ひ單行せず。是れ什麼。五祖の老婆か。否々恐しい。寒いぞ。甘い者は二度食へぬ。が災禍は幾回と無く來るぞ。油斷はならぬ。と此語は初心の知ることでない。更に飢鷹爪下に向つて。肉を奪ひ。飢虎口裏に喰を争ふの。手脚ありて。始めて得べし。參。

### 五百八十六 馬大師不安

舉馬大師不安。院主問。和尚近日尊候如何。大師云。日面佛。月面佛。  
日面佛。月面佛。砒。罈。狼。毒。觸。石。石。輒。爛。矣。雪。資。辣。手。馴。伏。毒。牙。而。頌。云。五。帝。三。皇。是。何。物。日。面。歟。月。面。歟。他。曾。投。身。於。蒼。龍。窟。裏。幾。回。干。犯。逆。隣。苦。屈。嘗。酸。自。道。屈。堪。述。可。謂。親。言。出。於。親。口。我。者。裏。見。麼。否。兩。頭。蛇。一。見。即。死。回。  
碧巖の虎狼關とは此の則ぢや。馬大師不安。圓悟は這の漢漏逗。少なからず。別人を帶累したと下語した。向上の大事を洩して。風無さに波を起したぞ。院主問ふ。和尚近日尊候



如何御容體は怎うでござると圓悟の下語に三日の後ち亡僧を送らざれば是れ好手と下の日面佛には多く死人が出来るで用心せよとなり光前絶後の許ぢや大師云く日面佛月面佛是れ什麼是れが法窟の爪牙ぢや講釋はなるものか此箭鋒に立つものが無いぞ學佛若し這般の田地に至つて醍醐を飲む如くなければ往々枯木巖前に蹉跌せん若し落處を知らば使ち大千世界に第二人なく手を掉つて丹霄に獨歩せん這裏に至つて前章に所謂耕夫の牛を驅り飢人の食を奪ふ底の手脚ありて馬大師を見るべし雪竇も此の則を頌する極めて見徹透するが故に淨潔脱洒なり他は直に日面佛月面佛と斬り出した機鋒の鋭きことを看よ口を開けば臆を見るには爰ぢや台頭と見るなら白雲萬里ぢや五帝三皇是れ何物を講釋はならぬ邪加したら神宗と同じく俗解に陥るぞ此二句で本則は頌し盡した已下は雪竇が日面佛月面佛の爲めに三十年來苦勞したことを叙述するぢや其有様は五帝三皇是れ何物の爲めに幾度となく危険を冒かして蒼龍の窟に入つて幾乎のことに命を失ふ處であつた思へば苦屈苦屈身毛悚慄する程ぢや今ま十分に吐出すぞ乃公が其通り苦辛したを輕忽した考へではならぬぞとなり此頌慕向正面より太阿の劍を揮ふが如し繁巖夏末の頌の如く節角語訛は無いが字々句々一々毒蛇の針で刺す底の觀あり本則を徹説したものは直下に醍醐を飲む如きも未透得者は痴人面前に夢を説くと一ぢや日面佛月面佛直下にこゝで馬大師に相見せよ

### 五百八十七 臨濟侍德山

舉臨濟侍德山次山云老僧今日困濟云寐語作什麼山擬拈棒濟掀倒禪牀大應拈云若是崇福當時纔開道老僧今日困便云請和尚喫茶免得彼此干戈相待何故老不筋力爲此崇福以德山臨濟商量底請和尚喫茶免得彼此干戈相待瑞卓即不然德山擬拈棒臨濟掀倒禪牀二大老作略無阻瀟湘景和舟入畫圖這般舉揚彼此一擡一搥勝總勝負總負而賓主歷然畢竟如何美如西施離金闕嬌似楊妃倚玉樓

此の則は師が黃檗の輪下に在りて暫らく行いて德山を見んとした勘辯ぢや其機輪滯はりなき處黃檗童子の縁を見るべし山云く今日困す是れ德山が臨濟の手許如何を試みんとするなり師云く這の老漢寐語して什麼を作す山便ち打つ例の棒が出て來た師繩牀を掀倒す意氣ある時意氣を旺にし一擡に黃鶴樓を拳倒し一躍に鸚鵡洲を躍翻す山便ち休す是れ什麼風流ならざる處ただ風流ぢや此外別に辯の付け様はない大應の請ふ和尚茶を喫せよは面白い然れども德山臨濟の作略を彼此干戈を以



て相待つとは未だ二大老を見盡さるに似たり具眼者深く甄別して看よ

### 五百八十八 佛光上堂道不及處說一句

舉佛光上堂道不及處說一句說了還如不說時氷泮雪銷春色動老梅紅拆去年枝擊拂子下座

大小建長老婆饒舌既是道不及說底亦得不說亦得說不說總不得笑倒西天碧眼胡四十九年五千餘卷舒縱橫權與實圓珠旋轉盤上珠畢竟如何金龍不守於寒潭玉兔豈極於蟾影叫

佛光國師難有垂示也我法は柳の糸の緜れ髪結ふに結れず説くにどかれず言語道斷心行處滅ぢや道ひ及ばざる處に一句を説き説き了て還つて不説の時の如し縱然説き了つたと云ふも四十九年一字不説ぢや説かぬも同じことぢや氷泮け雪消て春色動く老梅紅拆く去年の枝説いたか説かぬか拂子を擧つて下座説かぬか説いたか斯う奇麗さつぱりと切り上げた手際は往けぬぞてて云ふたら三十棒ぢや

### 五百八十九 虛堂中秋上堂

舉虛堂中秋上堂人間無天上有往往無人脫窠臼四海娟娟洗玉魂九野茫茫白兔走寒山子不開口也落馬駒群隊後

一塊游塵麗於中天假日光反射而放輝因甚寒山子開口稱説馬祖父子徒爲衒弄虛堂叟也靈龜曳尾好笑好笑月乎中秋殊爲人所熟讀瑞阜也不得爲不雪其冤如何雪冤中秋月清光圓滿果然落他窠臼破也墮也殺風景耐裏草寫月仙詩一場敗闕是吾家觀月月は中秋を賞翫す其賞翫の模様が各自別々ぢや虚堂は何と云ふ人間は無くして天上は有るそれ故往々に明とか暗とか有とか無とか是非得失の窠臼を脱出するところが能きぬぢや處が妙ぢやそれにも拘はらず月は四海娟娟として何處へ往ても玉魂を洗ひ九野茫茫として東亞も西歐も隔ては無い白兔がぐるぐると走り廻ると此語の練れ鹽梅怎うも云へぬ一轉して月に縁故の深き寒山と馬祖を引き出した寒山も此窠臼を出んとして我心秋月に似たり杯と詩を賦したが詰り馬駒群隊の後に落ちて馬祖父子が追つ驅つ鎬を削りて評判した尻尾に落ちて仕舞ふのぢや虚堂其方も矢張り寒山馬駒の後に附随するぢやないか乃公のみは獨り此覆轍を履ぬと構へても山僧は横に點頭せざるなり



五百九十 徑山法濟和尚因僧問

舉徑山法濟和尚因僧問掩息如灰時如何濟云猶是時人功幹僧云幹後如何濟云耕人田不種僧云畢竟如何濟云禾熟不臨場應庵拈云鳳閣香沈雪巢夜冷半窓明月和氣霽然虛堂云一人要貧貧不得一人要富富不得要知貧富不相當且請各歸本位立

虛堂云要知貧富不相當且請各歸本位立話爲兩概貧富不相常則好歸本位立則莫是坐○在○者○裏○乎○山○僧○即○不○然○素○富○貴○行○乎○富○貴○素○貧○賤○行○乎○貧○賤○夷○狄○患○難○君○子○無○入○而○不○自○得○焉○要○知○端○的○麼○佛○祖○位○中○留○不○住○夜○來○依○舊○宿○蘆○花○

這○是○是○是○虛○堂○古○人○的○行○履○を○舉○て○其○是○非○を○評○判○し○た○の○で○あ○る○先○づ○法○濟○和○尚○は○有○時○僧○あり○掩○息○灰○の○如○き○時○如○何○と○一○念○不○生○萬○緣○休○罷○の○場○合○を○問○ふ○濟○云○く○猶○は○是○れ○時○人○の○功○幹○有○功○能○で○あ○る○僧○又○問○ふ○其○有○功○用○を○了○し○た○時○如○何○と○濟○云○く○農○夫○で○居○な○が○ら○田○を○耕○種○せ○さ○る○様○で○あ○る○僧○又○問○ふ○畢○竟○如○何○し○て○好○い○か○濟○云○く○禾○熟○し○て○場○に○臨○ま○す○是○れ○眞○の○無○功○用○な○り○禾○は○實○が○入○つ○た○れ○ど○も○ま○だ○刈○獲○は○せ○ぬ○次○に○應○庵○は○拈○じ○て○鳳○凰○の○臺○閣○に○香○烟○銷○沈○し○て○野○老○の○破○宅○い○と○い○荒○れ○果○て○た○巢○籠○り○が○夜○半○に○一○層○の○寒○冷○を○催○ふ○し○た○と○は○何○れ○も○正○位○本○分○の○有○様○ぢ○や○半○窓○の○明○月○和○氣○霽○然○は○其○物○凄○し○い○住○居○に○明○月

の窓を照して何となく心ならずも浮き立ちて歌にも連歌にも詠れぬ佛祖も手を挿さむことのなるぬ場合ぢやと其處で虚堂は一人は貧ならんと要めてまた貧のどん底まで落ちぬと正位を指し一人は富を要めて富の場に至らずと偏位を指す开れで貧富相當らざる有功用無功用とも立せざる境界に至らんとせば各々本位に歸りて立せよと箇は兼中至の當體を爰へ將ち來りたる處ぢやが虚堂は本位に歸れと云ふ試みに此本位を正に非ず偏に非ず佛祖も手を挿さむこと能はざる即ち佛祖位中に留むれども住せず夜來舊に依て蘆花に宿るのどすれば兼中至の場に庶幾からんか兔に角修行も摺り上げ向上の一路を辿り了せたる結果は茲に臻らねばならぬぢや

五百九十一 佛光元宵上堂

舉佛光元宵上堂天上月圓人間月半燈明如來和融納款月兮圓乍缺可欺不可誣昏昏明皎皎燈明如來無處藏身

これ○は○元○宵○の○月○ぢ○や○燈○明○の○上○に○雪○上○に○霜○を○加○ふ○る○ぢ○や○暗○夜○に○燈○明○な○ら○ば○好○い○月○夜○に○提○燈○ぢ○や○元○宵○に○燈○明○を○す○ま○ま○し○く○點○す○る○さ○う○ぢ○や○盗○み○物○ぐ○る○み○に○盗○ん○だ○と○云○ふ○に○同○じ○一○寸○此○蠟○燭○は○白○ら○う○人○で○は○解○り○難○い○が○香○參○の○士○は○朝○の○間○の○茶○の○子○ぢ○や○



五百九十二 建長上堂不干山信事

舉建長上堂山信方丈內出諸人僧堂中來坐底自坐立底自立有甚虧缺處若也好肉剗瘡過在諸人不干山信事

點滴不施可以見建長慈悲山僧不忍爾沈焦爛幾回著手了何故若藥不暇眩厥病不瘳我肉より出れば爾外より入り爾坐すれば我立つ絲毫も増損する所なし喫飯著衣厨屎送尿何の虧缺する所かある茲に於て承當せずして枝を引き蔓を生せば皆依草附木の精靈ぢや自からは是れ爾が好肉に瘡を剗るのぢや此方の干與することでないぞ然れども佛光底は佛光底にして山僧は好肉に瘡を剗らすが好きぢや何となれば無事是れ貴人と胡椒丸呑み底にして話頭公案に用は無の經論祖録は甚麼の乾屎概と云ふて善も爲さず惡も造らず白木の儘が好いと増上慢するものがある此病ひ治し難し故に斯かる自然外道の輩には好肉に瘡を剗りさすも一方便ぢや彼一回省悟を待つて將に療治すべし

五百九十三 崇福謝書記乘拂

舉崇福謝書記乘拂上堂碧雲流水明月清風不是禪不是道不是物且道是何章句文彩已彰

碧雲流水明月清風使下座則却較些子崇福重說偈言好肉剗瘡何故丁寧損君德崇福書記の乘拂を謝する上堂老婆親切は至れりと雖も却つて是れ學者の悟門を妨ぐ碧雲流水明月清風賊身已に露はる文彩已に彰はる瑕生せり然れども瑕を道はずんは玳瑁轉すること能はざるが故に崇福舉底饒舌するか山僧は即ち然らず丁寧君德を損す無言却つて功有り然れども事一向なし或説或默或示或不示與奪手に在り一概なる勿れ

五百九十四 趙州至道無難

舉趙州示衆云至道無難唯嫌揀擇有語言是揀擇是明白老僧不在明白裏是汝還護惜也無時有僧問既不在明白裏護惜箇什麼州云我亦不知僧云和尚既不知爲什麼却道不在明白裏州云問事即得禮拜了退

趙州唇皮口吻頭禪他纔開口則見膽至道無難唯嫌揀擇八字拈來擒縱自在老僧不在明白裏是汝還護惜也無又云我亦不知又云問事即得禮拜了退峻機電閃奔雷度及百







五百九十六 五祖二月初五上堂

舉五祖上堂。今朝二月初五。行者先來打鼓。長老肚裏茫然。思量說佛說祖。大地雪深三尺。禽獸喫泥喫土。今年必定豐熟。自然五風十雨。者裏有箇好處。且道有什麼好處。遂作雷聲云。是什麼。復云。雷乃發聲。

雪深三尺。必定豐熟。無雲之地。雷走電激。殷殷轟轟。山響谷。五祖老人。健在萬福。莫道好處。好處。遭撲。幾年。只應。解。下。祝。

是れが五祖下の風采と云ふか。突飛なことを道へば云ふ者ぢや。是れは常識から見れば丸で狂人と云はんのみ。今朝二月初五。行者先づ來つて。上堂ぢやとて。太鼓を打つたが乃公は出來合ひのものも無いで。途方に暮れた。まア祖師禪か。如來禪か。何なりとも。饒舌らねばならぬと思ふて居る。折柄大雪となつた。是れで好い材料が出來た。禽獸は食物が無い故。泥や土を食ふて居る。今年は豊年ぢや。此の大雪が。芽出。良。是。から。五風十雨と。順氣も好いで。稍も穗に穗が開いて。好からう。此の雪降つたに。就て。箇の好い。ことが。能。さ。た。ぞ。ん。な。もの。ぢ。や。雷。ぢ。や。怎。ん。な。雷。ぢ。や。斯。ん。な。雷。ぢ。や。と。自。か。ら。ご。ろ。く。と。云。ふ。て。是。れ。什。麼。の。こ。と。か。引。れ。は。な。ア。雷。乃。ち。聲。を。發。す。と。云。ふ。こ。と。ぢ。や。山。僧。忍。俊。不。

禁高聲に唱へて云く。長老上堂了。大衆退後。

五百九十七 僧問雲門大師初秋夏末

舉僧問雲門大師。初秋夏末。東去西去。前程忽有人問。未審如何。祇對門云。大衆退後。僧云。某甲有什麼過。門云。還我九十日飯錢來。天應拈云。雲門大師。放去收來。如風如電。雖然如是。且無大人相。若有人問。崇福向他道。前三三後三三。待擬如何。藉口便打。

雲門大師與大應國師。太深遠。生。太。孤。危。生。若。有。人。問。瑞。皇。則。向。他。道。兄。弟。家。三。千。里。外。秋。雲。秋。水。有。人。問。如。何。則。莫。錯。舉。何。故。逢。人。且。說。三。分。話。未。可。全。施。一。片。心。

雲門は放去收來。只太だ速かなるを要す。大應は前を顧み後ちを慮はかる。瑞皇は即ち然らず。去る者は追はず。彼に去るに一任して。可なり。溪澗豈能く留れども。住するを得ん。直に大海に歸して。波濤と作る。

五百九十八 五祖結夏上堂

舉五祖結夏上堂云。孟夏漸熱。伏惟首座大衆。尊候萬福。却似夾竹桃花錦上鋪花。徧地莫眼花。每年事例。不用張查。下座人事。巡察喫茶。



莫道每年事例不用張查坦處無神何忙中有好詩走作運奔却是禪僧家活三昧若不爾則獨體滿野何故劔閣路雖以夜行人更多

此上堂五祖時候を叙し役寮大衆の健右萬福にして人々夾竹桃花の麗はしきが錦上に花を鋪くと美め讚したる中に徧地の花眼花するなかれは起居動靜孰れも立派なが眼中に翳を生せぬ様にせよと勸發した毎年御定まりの事例別に彼是れ張查するに及ばぬ御極まりの通り人事問訊巡察喫茶何も變つたことはい無いと何處に上堂の主意がある何にもこれと云ふことはいないが爰に五祖の見道されぬ東山下の暗號令があるこれは人々腕前で見よ

### 五百九十九 建長謝無關至

舉建長上堂東福無關和尚至乃舉云慈明訪神州東福見福山不弄西河獅子哮吼更無兩般盤走珠走盤古今今諸人自看  
無關去來任前在後獅子游行奮迅哮吼玉旋珠走東福與福山相對揚家醜寶中主中寶鼻孔裏翻筋斗  
福山の無關と共に無準の嗣丁度慈明が神鼎を訪ふと匹似す當時神鼎は西河に獅子

ありと云はれた今も同じぢや其獅子が哮吼は昔の慈明今の無關ぢや其活機用は盤に珠が走るか珠に盤が走るか見分けのつかぬ位に眼を剔起すれば則ち見失ふぢや慈明か無關か慈明か秋水長天と共に一色ぢや諸人能く看よ

### 六百 息耕冬至小參

舉息耕冬至小參一氣潛回八角磨盤空裏走六爻纒動無毛獅子貼天飛是他時節因緣不追四時消長禪僧家眼瞋瞋地坐在者裏直饒向鼓灰未動已前會得西川鄧師波東山下左邊底也未是枯木開花底時節何故卓拄杖冬不寒臘後看

禪僧家不逐四時消長直是向一氣未萌已前騰取則好直饒爾得一陽來復底時節子祖庭猶隔天涯且道東山左邊底事作麼生瑞阜試道冰益壯地始圻歇且不鳴虎始爻是れは虎堂冬至の小參に垂手の親切ぢや一氣潛かに回るは一陽來復ぢや禪僧家の一氣潛回は怎うぢや話頭を拈提して單々に進むときは其話頭に和して吾もなくなる理盡き詞窮する是れが陰氣一片なり爰に於て懸崖に手を撒して絶後に再甦すればばばア斯うぢやと自から承當すると同時に八角の磨盤空裏に走る不思議なことは無い即今眼橫鼻直飯を喫し衣を著する者がれが八角の磨盤ぢや六爻纒かに動く



も一陽來復の當體ぢや一寸合點すると無毛の鶴子天に貼して飛ぶ日用行住坐臥行  
かんと要せば行き坐せんと要せば坐し自由に活動す即ち是れ無毛の鶴子天に貼し  
て飛ぶぢや此の稱僧大死一番底の時節因縁は春でも秋でもない地獄でも天堂でも  
無い稱僧家這四時消長を追はざる田地に踏み込で陰陽未判已前に向つて西川の鄧  
師波五祖法演は東山左邊底を會得したとてまだ枯木開花の時節とは云へぬ何せか  
冬暖かいとて油斷するな餘寒が酷烈ぞ佛道無上誓願成ぢや釋迦彌陀も修行最中  
れで終結と云ふことはいないぞ此上堂修行者の一氣回復撥轉の線路を認めても猶ほ  
宛然として衝天の氣ありぢや

### 六百一 古德因僧問冬來事

舉古德因僧問如何是冬來事德云京師出大黃息耕拈云朕聞上古其風朴略王言如絲誰  
敢不聽忽有人問鄒山只向他道風門海口當風抵浪也須是箇人始得

若有人向山僧問冬來事則只向他答雉入大水爲蜃虹藏不見與古德息耕相去多少試  
驗看

古德は疎山匡仁和尙ぢや僧の冬來の事を問ふに答へて京師に大黃を出すぞ云はれ

た冬に爲ると大根賣の聲が市中に喧すしと虛堂拈して云く疎山の頃は開れで好か  
つたが今はそで無い乃公ならば冬來の事を問はれ答へて云はん乃公の處は海邊で  
風が烈しいときは大波が吹き荒んで中々大黃を出すの優なると異なり箇は個の惡  
辣底の人でなくては承當難いぞ山僧は冬が來れば乃公が門前の婆子は燒芋賣りに  
忙がはしいと云はんのみ

### 六百二 長生問靈雲

舉長生問靈雲混沌未分時如何雲云露柱懷胎生云分後如何雲云如片雲點太清生云未  
審太清還受點也無雲不答生云恁麼則舍生不來也雲亦不答生云直得純清絕點時如何  
雲云猶是其常流注生云如何是其常流注雲云似鏡長明生云向上還有事也無雲云有生  
云作麼生是向上事雲云打破鏡來與汝相見虛堂拈云天下具大眼目宗師盡謂打破鏡來  
與汝相見爲之極則殊不知山深水寒客程稍遠要知二老膠漆相投先須會取兩處不答  
混沌未分時如何柳失綠花失紅分後如何山是山水是水未審太清還受點也無雲無心  
而出岫水流而或盈科恁麼則舍生不來也秋天曠野行人絕馬首西來知是誰直得純清  
絕點時如何吾王庫內無如是刀如何是其常流注鏡分金殿燭山答月樓鐘作麼生是向



上事常憶江南三月裏。此處啼處百花香。打破鏡來與汝相見。手把白玉鞭。驅玳瑁。擊碎生靈。二大老對話至此盡矣。虛堂雖實兩處不答。此段大事在打破鏡來與汝相見一句。擊碎擊碎不擊碎則取類生也。東山下左邊底只在此些子。何故近日發戒令警察稍嚴。

這是有名なる問答ぢやが悪くすると取り違へを生ずると先づ長生の所問は、混沌未分とすつと摺り上げた處を將て來た靈雲は露柱懐胎と大黒柱が子を孕んだと箇は別に珍らしいことばない生云く混沌より分れた後は如何ん雲云く片雲の太清に點するが如し生云く未清還つて點を受けるやまた無しや雲答へず生云く恁麼ならは則ち衆生を答ればしませぬ雲云た答へず生云く直に純清絶點を得る時如何ん雲云く猶ほ是れ眞常流注生死流轉の根本ぢやとなり生云く如何か是れ眞常流注雲云く鏡の長く明かなるが如し胡漢身を現じて火暖水寒を避けず生云く向上還つて事ありやまたなしや雲云く有り生云く作麼生か是れ向上の事雲云く鏡を打破し來れ汝と相見せん是れまでは長生を靈雲の問答なり其處で虛堂の語は天下の大眼目を具する宗師は盡く鏡を打破し來れ汝と相見せん云ふを極則と爲せども殊に知らず山深く氷寒くして客程稍遠して云ふは行路難しとなり二老膠漆和投し主客機應するを知らんとせば先づ兩處の不答を會取すべしと這は虛堂の拈弄なれども矢張

り向上の宗旨は鏡を打破し來れと云ふ處に在り東山下の深意を知らんと欲せば一切悟的を打破し來りたる上に於て始めて相語るを得べし絲毫も悟底に滯はるるれば向上と相去ること遠しと謂ふべきなり。

### 六百三 虛堂正旦上堂

舉虛堂正旦上堂時遷物換革故鼎新土膏未動商量打春太公有意垂釣夫子無心獲麟。鶴林云君子思刑小人思惠瑞阜即道人無遠慮必有近憂太公垂釣夫子獲麟有意無心兩彩一賽矣畢竟如何元正慶祚萬物咸新。

虛堂正旦の上堂ぢや世間は儀式通り正月の元旦と時節が遷つて來ると萬物都て換り柳梅春を迎へ淑氣四方に満ると自然と舊物が新物と變じて來る虚堂乃公の門下にも土膏未だ動かす冰雪の未だ消せざる間だには農事の準備も爲すこと能はず然れども豫じめ商量して春を待ち受けて春が來ればとて芽出度と佛法の商量を爲し、袈裟王に朝して度生の事を爲さねばならぬ太公釣を垂るに意あるは全く之が爲めなり去りてて夫子は麟を獲るに心無し西狩に麟を獲たるは春秋に見えてあるが故に孔子は何にも麟を獲やうと心構へしたのではない乃公が門下の弟子も爾うちや



度○生○の○事○も○琛○め○心○構○へ○し○な○く○も○時○節○因○縁○が○熟○す○と○濟○度○衆○生○は○自○然○に○禪○僧○の○本○懷○  
ぢ○や○か○ら○勢○ひ○時○節○が○來○る○と○垂○手○も○せ○ね○ば○な○ら○ぬ○な○り○斯○う○ぢ○や○こ○れ○が○禪○僧○の○正○旦○祝○  
賀○ぢ○や○

### 六百四 建長因虛庵至上堂

舉建長上堂建仁虛庵至舉云賓看主主看賓爾底我不會我底爾不聞一對鐵錘無孔打成  
一合乾坤同倚欄干無一語同看海山生暮雲  
建長乎虛庵平落霞與孤鶩齊飛秋水共長天一色就中最有傳神妙虛庵會底我不識建  
長鼓舌爾便默各各三昧各各不測一合乾坤倚欄觀鷺鷥立雪非同色  
這○是○是○佛○光○知○音○を○待○つ○て○共○に○海○雲○山○月○の○情○を○語○る○向○上○の○調○ぢ○や○賓○主○相○對○し○て○相○  
識○ら○ず○我○會○底○は○爾○識○ら○ず○爾○會○底○は○我○聞○か○ず○面○白○い○こ○と○ぢ○や○此○の○鹽○梅○が○手○に○入○る○と○  
一○對○無○孔○の○鐵○錘○一○合○乾○坤○を○打○成○が○見○え○る○未○段○同○じ○く○欄○干○に○倚○つ○て○一○語○な○し○同○じ○く○  
看○る○海○山○暮○雲○を○生○ず○る○を○と○山○僧○は○下○語○し○て○未○在○更○に○道○へ○と○云○は○ん○斯○う○い○ふ○處○で○遣○  
り○傷○ふ○ぞ○佛○光○に○眼○を○抜○か○れ○ん○様○に○注○意○せ○よ○

### 六百五 佛光東山下事

舉佛光上堂東山下事如節度使信旗相似南來北來只可觀瞻不可犯著犯著則千里橫屍  
靠拄杖下座

詔陽紅旗閃閃燦燦只可觀瞻不可犯著建長會見虛堂而犯著傷手傷脚一味東風到日  
東巨福山中重拈却和默糶麵瞎人眼石蜜糖中置毒藥

此○上○堂○は○別○し○て○難○有○い○東○山○下○の○様○子○を○示○さ○れ○た○何○が○故○に○然○る○や○宗○旨○微○細○の○蘊○奥○を○  
究○め○た○る○は○東○山○下○に○在○れ○ば○な○り○ぢ○や○支○那○に○も○日○本○に○も○禪○道○の○進○步○發○達○し○た○る○は○此○  
東○山○下○の○盛○に○な○り○て○已○來○の○こ○と○ぢ○や○先○づ○其○模○様○は○節○度○使○大○將○の○軍○旗○を○揮○ふ○と○同○じ○  
く○何○處○よ○り○來○て○も○遠○か○ら○只○觀○瞻○す○る○ば○か○り○で○手○を○著○る○こ○と○は○な○ら○ぬ○若○し○一○寸○で○も○  
觸○著○し○た○ら○ば○横○屍○千○里○で○始○末○は○付○か○な○く○な○る○佛○光○も○虛○堂○に○會○て○頌○を○似○し○這○箇○雖○ど○  
差○し○著○け○ら○れ○て○活○き○あ○が○つ○た○夫○れ○か○ら○東○山○下○を○頻○り○に○舉○揚○す○る○様○に○な○つ○た○ぞ○靠○拄○  
杖○下○座○看○よ○看○よ○こ○れ○が○即○ち○東○山○下○ぢ○や○油○斷○す○る○と○箭○既○に○新○羅○を○過○ぐ○

### 六百六 永嘉道亦無人亦無佛



舉永嘉道亦無人亦無佛大千沙界海中演一切賢聖如電拂五祖拈云大衆這裏若不具金剛眼睛便見彌伽野如何即是劍閣路雖險夜行人更多

永嘉三更打午五祖天曉不露明投暗合則非無二師雖然仔細看來元是射梁何故若不游三級浪爭能識禹門高

五祖の上堂に永嘉の語を舉揚せられた此語人多く見認まる金剛眼睛を具する人ならば此證道歌を讀て活用するか初心の者は死人だらけで始末がつかぬ怎したら此を免かる難透難解の語で筋骨を抜くと劍閣は峻岨と雖も命を懸けて行く段には誰でも踰るごとが能ざる五祖牛窓欄干で齋を取られたらはいかな死人も活き上がつて来るぞ左なくば往々壩間の守屍鬼となるぢや

### 六百七 五祖上堂時人住處我不住

舉五祖上堂云時人住處我不住時人行處我不行畢竟作麼生牛角長三寸兔角長八尺四溟東海流般若波羅蜜

五祖一向擔板漢山僧即不然時人住處我亦住時人行處我亦行畢竟要無嫌底法這裏何知細素明看看五祖牛角不短於兔角兔角爭得長於牛角山僧也畫蛇足龜毛拂大千

竹杖敲天月喚

五祖は白雲端禪師の語を將り來りて拈弄ぢや時人の住處住するごと何にかせし時人の行處行くごと亦何を答めん白雲は只人と住し難く不和合を主張するに非ず細素の分明を要すと云へり五祖も亦擔板漢にも非ず牛角三寸兔角八尺四溟東海流摩訶般若波羅蜜此一道の眞言を念することを得べし會すること能はず會するは偏の會に任かすも要且つ之を識らるべし

### 六百八 僧問雲門直截處

舉僧問雲門如何是直截處門云去山後僧云謝師指示門云合取皮袋崇禪拈云雲門大師是即是崇禪即不然忽有人問如何是直截一路便云法堂前待他進謝師指示只向他道禮拜了退

雲門崇禪二大老一人向占波國裏打毬一人向大洋海底算沙只是土曠人稀知音鮮矣瑞阜主山後也不道法堂前也不道若有人道謝師指示即向他道不道非不能道道則觸諱何故說似一物即不中

雲門崇禪二大老の垂示懇切而して雲門は合取皮袋と云ひ崇禪は禮拜了退と云ふ其



間だ相去る。遠しと云は、十萬八千、近しと云は、帶より下らず。雲門是ならば、崇福は非なり。崇福取るべしとせば、雲門は取るべからず。主山の後ち、法堂の前、落節した處か、又奚ぞ害せん。幸ひに兩個老漢、五十歩百歩の差なり。左顧瑕なく、右眈また老ひたり。

### 六百九 崇福拈翠巖夏末話

舉崇福僧問翠巖示衆云、一夏爲兄弟。東語西話、看翠巖眉毛在麼、意在何處。師云、爛泥裏有刺。僧云、保福云、作賊人心虛、如何委悉。師云、賊知、賊僧云、長慶云、生也。又如何。師云、兩重公案。僧云、雲門云、關畢、竟如何。師云、突出、難辨。僧云、只如三古德、扶起翠巖門風、還有優劣也無。師云、同途不同轍。僧云、當時若見翠巖道、看眉毛在麼。未審和尚如何祇對。師云、觀面相瞞。僧云、學人今夜小出大過、便禮拜。

大應國師哉、舉揚翠巖眉毛在麼公案。觀面相瞞、端的看看、眉毛在麼、白拈賊倚天長劍、逼人寒。保福一箭已失的、長慶生也好肉剗。雲門欲進前一步、跛脚踣踣、猶隔關。師去來、今翠巖路、觀面相逢、不相識。誰道握土成金、易變金爲土、却也難。

這の大應拈翠巖夏末話の則は、格別絶唱ぢや。翠巖眉毛在りやを拈して、爛泥裏に刺ありと云ふ、這の刺を爛泥中より、摘み出さば、則ち翠巖を見るのみならず、三大老の爲人も、看破するを得ん。保福の賊と作る人心虚はるを、賊は賊を知ると云ふ、一箭的に中りて、道ひ得て、巖と福の黒星を射落す。長慶の生也を拈して、兩重の公案と云ふ、是れ什麼師に非ざれば、發すること能はず。翠巖眉毛在りやと問ひ、既は是れ一重、今又眉毛在ります。生也と云ふ故に、兩重なり。雲門の關字を拈して云く、突出、難し、嗚呼、好い。大應國師なる哉、爾う出合ひ頭に撞出されては、言ひ様は無いと、僧云く、三古德が翠巖の門風を起すに、優劣ありやと、師云く、途を同ふして、轍を同ふせず。僧云く、當時若し、翠巖眉毛在麼と、道ふを見れば、未審し、和尚如何か、祇待せん。師云く、觀面相瞞すと、頭から向き出しに、人を欺瞞するは、翠巖ぢや、乃公は到底も及ばぬの機を合ひ、師の語言三昧に、自由を得たるは、實に妙ぢや、斯うは云へる者で無いぞ。翠巖眉毛の則ち、此拈語に優れる者あらす。雲門も亦倒退三千ぢや。

### 六百十 五祖上堂無法可說

舉五祖上堂云、無法可說、是名說法。夜月嚴凝、霜天凜冽、池裏烏龜凍得成籠、更說兩句、舌頭成鐵。

山僧即不然、有法可說、無可說法。霜天月落、潭影瀲灩、列直饒香林、證龜作籠、何似這裏、銅鑄。



點鐵。

五祖の說法甚深微妙ちや此上堂無説の説ぢや此場に至れば此も彼も説法ぢや黙つて居ても躍つて居ても全體說法ぢや夜の月が殿庭に霜の夜寒じるに池の氷が凍つて盤ど成つたとさアやれく寒いくもう二た口と云ふたら舌が氷つて鐵の板の様にならう此等は東山下の暗號令ぢや眼を眩すれば則ち蹉過するぞ禪の中興なる哉五祖和尚。

### 六百十一 建長浴佛上堂

舉建長浴佛上堂老胡呱地一聲時開大言牌語甚痴不是年年澆惡水洗他到老不知非卓拄杖下座。

降誕閣浮已失時况乎張吻語何痴者僧懶洗孩兒面一任春風吹是非。

浴佛上堂に妙を得たる佛光國師これはまた一種變つた拈評ぢや轉結を看よ乃公が此通り浴佛は是れ年々惡水を以て頭から浴せ澆ぐばかりではない釋迦が死ぬるまで法華の涅槃の戲語ついな耻を澆いで遣るのぢや要然卓拄杖一下して下座大切な佛を散々に惡う云ふて好いものか那處の事を云たか看よ。

### 六百十二 建長謝頭首秉佛

舉建長謝頭首秉佛上堂落頼家風折脚鐺大家扶豎大家擡老來不似擡家醜管甚眉毛落又生。

這老折脚鐺西拄東撐可愛不可親癡羊掛角入順而出逆建長在焉咄外面如菩薩內心如夜叉。

建長頭首の秉佛を謝する上堂ぢや落頼の家風折脚鐺かく零落した鍋の脚が折れた貧乏世帯ぢや大家皆より合ふて東からも西からも擡木を加へて扶助して呉れる故る安心ぢやもう年が老ると見苦しい風情だが耻かしく思はぬどの様に眉が落ち機が生へ機が一向に構はぬ皆が扶けて呉れるからまア安心ぢや何處に於て佛光を見る貧乏話しに味があるぞ。

### 六百十三 佛光上堂諸佛説不到處

舉建長上堂諸佛説不到處正是藥忌之譚老僧不伴屈抑諸人諸人各各水酒不著藥忌之譚水酒不著古今袈僧無所措脚等閑扶起千錯萬錯。



釋迦も説き到らず三世の諸佛も手を挿さむことの能きぬとは是れ什麼正に是れ樂  
忌の談ぢや毒忌みの話しぢや此の敵藥を佛に中てるも佛界も消える魔界も消える  
晋楚も其富を失し賁育も其勇を失するは此敵藥を其處で佛光乃公は平素人を屈抑  
することばせぬ何となれば諸人各々水洒げども著けず此方から怎んなものをも以て  
往た處が間に合はぬ實に這箇の一物佛も魔も奈何ともすること能はずぢや毒蛇斬  
れども入らずぢや

### 六百十四 虎堂上堂各各本有靈覺

舉虎堂上堂各各本有靈覺妙明真體但以己見所障不能橫戈直造不疑之地蓋由淬勵之  
工不切所以墮在滲漏作廢生得靈覺現前去老僧不惜眉毛與汝諸人去此見障擲下拄杖  
虎堂欲與諸人令去此見障是則是擲下拄杖借問去見障幾許敢保老兄未去又云勘破  
了也

本有靈覺妙明之真體は各々常露目前に現前して居る然れども楞嚴に道ふ知見に見  
を立するは無明の本と己見に障へられて快活自在の地に至ること能はざるは淬勵  
の工切ならざるが故に滲漏に墮在するなり作廢生か靈鑑現前するを得ん乃公も種

種と此見障を去ることに骨を折つて見たと拄杖を擲下す是れで見障が除いたか未  
除か山僧の干かり知る處に非ず

### 六百十五 佛光上下三指彼此七馬

舉佛光上堂骨打骨打如雙如雁上下三指彼此七馬因甚如此可知禮也  
西天人不會唐言鬼殺搗佛跳墻虎堂道底何似建長骨打骨打會麼若不會則朝三暮  
三三

此の上堂頭より尾に至るまで講釋はならぬ骨打骨打何のこつたか知れぬこつた  
雙の如く雁の如しとは何のこつたか上下三指も解らぬ彼此七馬も何に因て其様に解  
らぬこつたばかりを列叙する可知禮也猶ほ解らぬぞ此の解らぬ可知禮也が見えたら  
逆戻りして七つの馬も三つの指も雙も骨打々々も皆解るとさア咄

### 六百十六 佛光謝新舊知事

舉佛光謝新舊知事。上堂秋風涼秋氣清鳥飛兔走斗轉參橫老僧落得展脚睡自有入扶折  
脚鑑



觀音侍左。文殊在右。瞿曇老倒。貪平睡長。

這○是○新○舊○知○事○を○謝○し○た○止○堂○ぢやが、秋○風○秋○氣○涼○清○なるは地○ぢや、烏○兔○飛○び○走○り、斗○轉○じ  
參○横○たふは天○ぢや、日○月○星○の三○光○共○に、歴○々○として居るは面○白○い、老○僧○已○下○は人○ぢや、天  
地○人○三○才○を○貫○いて、高○解○を○胸○々○として、睡○るは、誰○の力○を、跡○は云○はずと、知○れて○あ○る佛○光  
國○師○は、何○如○にも、仕○合○せ○の好○い入○ぢや。

### 六百十七 五祖受郭朝奉請上堂

舉五祖郭朝奉正請上堂。朝奉於法座前燒香云。此一瓣香。願向爐中。爲光明雲。遍滿法界。  
供養我堂頭師兄。禪師伏願於此雲中方廣座上。劈開面門。放出先師形相。與諸人描貌。何以  
如此。白雲巖畔。舊相逢。往日今朝事不同。夜靜水寒魚不食。一爐香散白蓮風。師遂云。巖巖  
相影。鉢囉野。恁麼恁麼。幾度白雲溪。土望黃梅。花向雪中開。不恁麼。不恁麼。嫩柳條。金線。且要  
應時來。不見龐居士。問馬大師。不與高法爲侶者。是什麼人。馬大師曰。待汝一口吸盡西江水。  
卽向汝道。大衆。一口吸盡西江水。萬丈深潭。窮到底。掠約不是。趙州橋。明月清風。安可比。  
朝奉劈開白雲面門。與諸人描貌。寫得若生。山僧深愛朝奉。願中夜深水寒。魚不食。句有象  
中至之境界。卽令白雲面門。如何描貌。有意氣。時添意氣。不風流。處太風流。

郭功甫朝奉正請上堂。五祖同坐。白雲端坐。參差居士。亦が次しく師と邂逅せざり  
しが、今日上堂を請ふに方めて、先づ法座前に於て燒香啓白する。此の腕力を看し、面門  
を劈開して、先師の形相を放出し、諸人が爲めに貌を描けよとは、中々常人の口より  
出る語で無い。して夜靜かに、水寒くして、魚食はず。一爐の香散す。白蓮の風は兼中至兼  
中到の境界あり。以て郭功甫の力を見るべし。五祖應酬の語中、朝奉を龐居士に比した  
るに似たり。然れども、五祖の意、朝奉を美めたり。見たり。沒交涉ぢや。所謂向上人の活計、  
定盤星を認めぬ様にせよ。先づ龐居士が、馬祖に參じたるは、朝奉が白雲に於るが如き  
ぢや。一口に西江水を吸盡するのみならず、萬丈の深潭を窮め、底を盡して、法の淵源に  
達したる眼からは、掠約は趙州の橋のみではなひ、明月清風も、此人の境界に比するこ  
とは、能きぬぞの意ぢや。大分向上の調ぢや。後進の眼には、屈き覺るぞ。

### 六百十八 五祖上堂願視禪牀左右

舉五祖上堂。願視禪牀左右。遂拈拄杖。在手中云。只長一尺。下座。  
拈云。希有事。幾乎將不聞。  
此の上堂。砥礪狼毒。亦や大火聚の如く、熱鐵櫃に似たり。先づ禪牀の左右を願視するの



六。字。で。五。祖。を。見。よ。是。れ。で。本。則。は。盡。る。开。れ。か。ら。拄。杖。を。拈。じ。て。是。れ。見。よ。一。尺。し。か。な。い。  
こ。れ。で。五。祖。を。拜。め。講。釋。は。な。ら。ぬ。此。等。の。向。上。の。調。は。一。寸。で。も。觸。れ。ば。則。ち。喪。身。失。命。す。  
る。ぢ。や。

### 六百十九 崇福拈赤肉團上無位真人

舉崇福上堂僧問臨濟示衆云赤肉團上有一無位真人常在諸人面門出入未證據者看看  
此意如何師云觀面當機更無回互僧云時有僧出問如何是無位真人濟擒住云道道如何  
領略師云迅雷不及掩耳僧云僧擬議濟托開云無位真人是何乾屎橛又如何師云曲不藏  
直僧云巖頭聞得不覺吐舌是何心行師云知音知後更誰知僧云雪峯云臨濟大似白拈賊  
還識得臨濟也未師云早被雪峯覷破僧云畢竟如何是無位真人師云高著眼看僧云與麼  
則粉骨碎身未足酬師云知恩方解報恩僧便禮拜

赤肉團上有一無位真人直看臨濟若下第二頭則遲了八刻矣定上座舉揚此公案巖頭  
聞得吐舌雪峯聞得叫白拈賊獨有欽山扶離摸索却道何不道非無位被定擒住幾乎失  
命蓋他以不能見盡臨濟也圓通國師一代龍門高著眼看四字可謂臨濟千古之下得知  
音矣這般公案擬議則蹉過了也何故般若如火聚近傍燎却面門

圓通國師が臨濟の赤肉團上の則を拈唱して濟の示衆に對して觀面機に當ると云ひ  
又濟擒住して道へ道へ迅雷耳を掩はに及ばすと云ふ此則古人評論尤も寡からず  
して巖頭は定上座の擧するを聞て舌を吐くは大應の迅雷耳を掩ふに及ばすと一機  
に脱出す此場合に至つては言句解知を挾さむこと能はず大應の一々僧に答へて節  
節下語抄著尤も肯綮に中れり此僧一機を含む所問に似たりと雖も固より師と角力  
する程の力を有せず故に問ひ得るは則ち問ひ得たるも活機なし粉骨碎身も未だ酬  
ゆるに足らずと云ひ禮拜し去るも未だ活用し能はず大應何ぞ本分の草料を與へさ  
るが是れ與へざるに非ず與ふるも益なきが故に落草老婆禪を説くのみは殘念と謂  
はんか喝

### 六百二十 五祖上堂世有一物

舉五祖上堂云世有一物亦不屬凡亦不屬聖亦不屬邪亦不屬正萬事臨時自然號令抵死  
要知換却性命

龍牙云雖然舊開闢田地一度贏來方始休五祖云換却性命一機脱出雖然如是識得本  
心本性正是宗門大病畢竟如何但以悟爲則噫蹉口觸諱



此の上堂は、語路の微細なること、精米の如し、此の一則を能く見徹せば、學禪思ひ半に過るぢや、世に一物あり、亦凡にも屬せず、亦聖にも屬せず、邪にも屬せず、正にも屬せず、五祖老師、未だ未だ、在何ぞ其言の險なるや、山僧は即ち然らず、一物あり、是れ凡是れ聖、是れ邪、是れ正、時に應じ處に隨つて、善惡邪正、凡聖迷悟、何れにも應ずべし、萬事機に臨んで、自然に號令、その場その場に、應變の働きありて、號令は各自の手裏に在り、自由自在なり、然れども、此臨機應變の活用を得んとせば、第一に大死一番子して、命掛けに、死に切らねば、其場に到られぬぞ、ア即今如何か、一物を活捉し去る參。

六百二十一 梁武帝問達磨大師

舉梁武帝問達磨大師如何是聖諦第一義、磨云、廓然無聖、帝云、對朕者誰、磨云、不識、帝不契、達磨遂渡江至魏、帝後舉問志公、志公云、陛下還識此人否、帝云、不識、志公云、此是觀音大士、傳佛心印、帝悔遂遣使去、請志公云、莫道陛下發使去取、闍國人去、他亦不回、祖師西來、劈頭接得梁武帝、而帝問聖諦第一義、是甚破草鞋、磨云、廓然無聖、也是拋擲西海、而可矣、帝云、對朕者誰、好一撥、雖然帝錯會無聖、果然摸索不著、磨云、不識、白狼河北音書、絕丹楓城、南秋夜長、吽武帝所問、是則是錯錯爭得、敢於達磨鋒銳、磨也如獅子王、捕象盡

其全力捕兔、亦盡其全力、其點滴不施的、即是靈山拈華以來、一星盡毒子也、惜乎帝不契、達磨遂絕江赴魏、直向少室峯前而坐、也被風吹、別關中、帝後追問志公之言、欲遣使去請、噫、見之、不取、思之、千里、志公云、闍國人去、他亦不回、此語與達磨相對、而不相讓、雪竇頌云、千古萬古空相憶、休相憶、清風匝地有何極、又云、喚來與老僧洗脚、直是惡水、驀頭澆、我這裏不然、達磨志公、雪竇三大老、活理一坑、若不然、則勸渠齊之以禮、這、是、是、是、禪宗の眼目と云ふ則ちや、達磨西來の劈頭斯の如し、當時武帝達磨に問ふ所、佛説至極の聖諦第一義ちや、聖諦第一義と云へば、定めて甚深の極意であらうが、圓悟は是れ甚の繫驢概と下語した、本分から見たらば、如何なる極妙窮玄の處と云ふも、破草鞋にも、價せぬぢや、其處で磨云く、廓然無聖、是れ什麼、德山臨濟も、倒退三千ぢや、此語多少の人、往々錯會す、當機の武帝が、既に會し傷ふて、一枚平等の見解に落ちた故に、朕に對する者は誰と云ふ、廓然無聖ならば、自他平等、彼も此も無い、然るに依然として、朕に對する貴公があるでは無いが、して見れば、廓然無聖とは云へまいと、一撥を與へたが、何分未悟の帝であるから、眉かぬ磨云く、不識、是れ什麼、錯會する者多し、此が見えたら、此則は吾物ぢや、是れ何の繫驢概を、再來半文錢に直せずと、圓悟は下語した、面白い、帝契はず、到底も武帝の見處では、眉かぬは言ふまでもない、其處で達磨も見切つて



遂に暗に江を渡つて魏に到る是れで一段落畢つたが帝如何にも不審に堪へぬで此事を舉して志公に問はれた已下は兩重の公案ぢや志公云く陛下還つて此人を識るや否や咄此志公も國を起出して始めて得ん好し三十棒を與ふるにと圓悟は下語した帝云く不識志公云く此は是れ觀音大士佛心印を傳ふと帝悔いて使を遣はして去て請せしむ志公云く道ふなけれ陛下使ひを發し去つて取らしめんと閩國の人去るも他亦回らじ此志公の語實に達磨と箭鋒相拄ふと謂へし又云く只今唯有西江月會照吳王宮裏人の觀あり此語の熟練したる按排は實に讚歎するに餘りあり達磨武帝の商量は且く置く即今達磨什麼の處にかある蹉過するもまた知らずと圓悟は自慢の名劍を提げ來て揮ふたぞ而して雪竈は聖諦廓然何を當に的を辯すべき朕に對する者は誰ぞ還つて不識と云ふ此願實は多少の工夫を費して筆を下して宛も太阿の劍を揮ふが如し茲に因て暗に江を渡る豈に荆棘を生ずるを免かれんや閩國の人追ども再び來らずと云ひ了りて後ち師左右を顧視して云く這裏還つて祖師ありや自から云く有り喚び來つて老僧の爲めに脚を洗はしめん是れ什麼爰等は最後の句を手に入れた者でない此の毒箭の來鋒が見えぬぞ若し能く此竈の後語を眞實に會し去らば達磨志公と共に手を把つて行くべしぢや

### 六百二十二 佛光冬至小參

舉佛光冬至小參僧問夾山與定山同行定山云生死中有物即不迷生死意旨如何師云鷄銜燈蓋走進云夾山云生死中無物即無生死又作麼生師云土宿騎黃牛進云二人互相不許同往大梅常禪師那箇親那箇疎梅云一親一疎師云鈞在不疑之地進云次日再往問那箇親那箇疎梅云親者不問問者不親此意又且如何師云劍握飯人手僧禮拜  
夾山與定山商量生死中有物即不迷生死兒維未滿夾山云生死中無物即無生死石人耳語同往大梅梅云一親一疎合笑不合哭親者不問問者不親只許老胡知不許老胡會

此冬至小參は佛光大に工夫を費やしたる則ちや夾山と定山の商量を舉揚して定山底を什麼と云ふ生死の中に物あり即ち生死に迷はず此一物本來の面目自己の佛性と云ふ浮つかりする定山の坑に陥るを佛光云く鷄燈蓋を銜んで走る何の用に足らぬ越ることも恚することもならぬ夾山云く生死の中に物なし即ち生死なし師云く土宿黃牛に騎る是れは丑歲の土曜星にあたる凶惡なり命危しとなり互に所執を將て大梅に到る梅云く一親一疎と何處ぢや多少の人夾山の穴に陥るを師云く



鉤は不疑の地に在く二人の手許を大梅見抜き切つた故一親一疎と云ふたど次の日  
再問した那箇か親那箇か疎と梅云く親者は問はず問ふ者は親しからずと前箇は猶  
は輕きも此第二箇は最も深し流石の大梅ぢや其處で佛光は劍は領人の手に握ると  
作家の手に握ると名劍も綾に操りて自由自在に殺活するぢや今夜一陽來復佛光の  
手に翻轉せられされば則ち好し

### 六百二十三 五祖上堂時候季秋

舉五祖上堂云時候季秋霜冷皎潔銀河耿耿松窓一炷爐頗稱吾家好景  
松窓一炷爐頗稱吾家好景驢車去馬事來井觀驢驢井不風流處風流新婦臨嫁治

是れは五祖の寐語か何んぢや追ひく秋も季になりたれば霜も冷かにして皎潔雪  
の降つた様に銀河に澄み亘つて衆星閃々に見える夫れで香でも炷いて嗚呼好い景  
色ぢやと是れが乃公の家風ぢやなんと皆は怎う見るぞと是れ什麼那處にもこれと  
云ふ味はない此味の無い處に無限の趣味津々ど溢れて居るを見なければ東山下の  
風采を咀嚼することが能きぬ此味を知らざるものは丸で馬耳東風ぢや

### 六百二十四 崇福中秋上堂

舉崇福中秋上堂靈山指月曹溪話月當頭未出光影南泉拂袖歸去猶落第二長沙一踏踏  
倒用得一半且道如何是那一半以拂子打圓相云圓圓離海嶠漸漸出雲衢

靈山曹溪未出光影南泉長沙用得半提崇福那一半稍離親猶是向海雲遠去徒貪看天  
上月失却掌中秋瑞卓即不然掬水月在手

崇福の上堂面白い靈山曹溪南泉長沙皆是れ一半を用ひ得たり崇福那の一半は拂子  
を以て圓相を打して云く圓々として海嶠を離れ漸々として雲衢を出づこれは名句  
ぢや斯ういふ句を吐き盡すと最早や後ちに云ふことがなくなるぞ大應國師今少し  
くたしなみなされ左なくは好語説き盡して臍を噬むも及ばぬ悔を遺さん國師の爲  
めに恐るゝぢや

### 六百二十五 須菩提巖中宴坐

舉須菩提巖中宴坐諸天雨華讚歎尊者云空中雨華讚歎復是何人云我是梵天尊者云汝  
云何讚歎天云我重尊者善說般若波羅蜜多尊者云我於般若未曾說一字汝云何讚歎天



云。尊者無說。我乃無聞。無說無聞。是真說。般若波羅蜜多。又復動地。雨華雪寶。云。避喧求靜。處世未有其方。他在殿中宴坐。也被者一隊。漢塗糊。伊更有者。老把不住。問云。空中雨華讚歎。復是何人。早見敗闕了也。我重尊者。善說般若波羅蜜多。恐水蔭頭。潑我於般若。未曾說一字。草裏走尊者。無說。我乃無聞。誠甚麼好惡。總似者。般底何處有今日。復召大衆云。雪寶幸是無事。人爾來者。裏覓箇甚麼。以拄杖一時趁下。虛堂拈云。雪寶雖不善其兵機。要且暗合孫吳。今日柏巖開堂祝聖。因甚無人雨華供養。擊拂子。賊不入。慎家之門。須菩提說般若。諸天雨華讚歎一場。敗闕。雪寶勘破。遂以拄杖一時趁下。以煞斬新。虛堂騎賊馬。趁賊道。吾今日祝聖。因甚無人雨華供養。擊拂子。賊不入。慎家之門。箇二大老一人攻勢進戰。一人防禦退守。雖俱有孫吳之智略。要且不知兵機。故兩兩皆敗矣。須菩提殿中に宴坐す。諸天華を雨らして讚歎す。本分より見れば。一捏を消せず。只此事些の誦訛あり。故に古來評判多少の人錯會す。雪寶云く。喧を避け。靜處を求む。世未だ其方有らず。他は殿中に在て宴坐す。また此の一隊の漢に。脚下を看破せられ。頭から泥を被らせられた。然るに須菩提問て云く。空中華を雨して讚歎す。復是れ何人ぞ。早く敗闕を見了れりと。以下寶の須菩提と天との問答に著語して。活氣を帶しむ。後ちに大衆を召して云く。雪寶幸に是れ無事の人。備者裏に來つて。箇の甚麼をか覓む。拄杖を以て。

一時に趁下らしむ。是れ什麼。雪寶狂せるか。般若か。天花か。怎うした。此等を手に入れぬ。と宗旨の活機が無いぞ。經説は杖に仗りて平坦の路を歩くが如し。祖師門下は嶮崖に手を撒し。蒼龍窟に入て。珠を探り。逆鱗を避けざるが如し。虛堂拈して云く。雪寶兵器を善くせざるも。孫吳に暗合す。乃公の今日は。開堂祝聖に華を雨らして。供養する者も無ければ。復た讚歎する者も無い。寂いものであらう。拂子を撃つて。盜賊は乃公の様な戸締りの好い家には。這入らぬぢや。虛堂の面を看よ。

六百二十六 建長上堂山僧幾日

舉建長上堂。山僧幾日。做得箇上堂。直是玄妙。直是奇特。夜來三更三點。打箇噴嚏。不覺打失了也。不知落在何處。是汝諸人。各各爲老僧尋看。東廊下西廊下。眠單前蒲團上。忽然摸著。却將把來。呈似老僧。良久下座。

建長昨夜和箇噴嚏。而所打失。玄妙奇特。今朝忽然撞著。東司之西。塵芥堆上。拾乎是屎。臭衝鼻。乘乎是雞肋。可惜。因只是一任和尚揀擇焉。

建長上堂の法語折角能きたは能きたが。一夜噴嚏の拍子に。打失した。と。ア。年が老る。と。兎角健忘する。失ふたものは尋ねるに及ばぬ。東廊も西廊も。眠單も蒲團上も。有つた。



も。の。か。和。尚。明。朝。打。鼓。と。共。に。上。堂。何。で。も。好。い。口。か。ら。は。た。出。合。ひ。頭。ら。に。説。破。を。請。ふ。と。云。ふ。是。れ。等。は。佛。光。の。上。堂。に。妙。を。得。た。と。云。ふ。か。此。の。把。放。操。縦。の。自。在。を。手。に。入。れ。た。ら。ば。法。語。は。朝。の。間。の。茶。の。子。を。喫。す。る。如。き。の。み。

### 六百二十七 荷澤到思和尚處

舉。荷。澤。到。思。和。尚。處。思。問。云。何。處。來。澤。云。曹。溪。思。云。曹。溪。意。旨。如。何。澤。振。身。而。立。思。云。猶。帶。瓦。礫。在。澤。云。此。間。莫。有。黃。金。麼。思。云。縱。有。向。甚。處。著。天。應。拈。云。二。老。相。見。賓。主。歷。然。雖。然。未。得。勦。絶。在。若。是。崇。福。待。他。問。此。間。莫。有。黃。金。麼。便。與。一。拳。何。故。黃。金。自。有。黃。金。價。終。不。和。沙。賣。與。人。荷。澤。到。青。原。將。黃。金。被。換。却。一。箇。瓦。礫。而。自。不。知。其。價。遂。累。我。東。海。第。一。祖。使。辯。識。真。價。可。惜。許。國。師。定。真。價。道。終。不。和。沙。而。賣。與。人。雖。然。若。是。真。箇。黃。金。奚。要。論。價。乎。何。故。元。來。無。鐵。崑。崙。觸。著。便。光。輝。咄。

荷澤が青原思和尚の處に到り曹溪の意旨如何を問はれて身を振ふて立つ青原云く猶は瓦礫を帶る有りと如何なるか荷澤の瓦礫を帶ふる處爰を見ねばならぬ青原即是れ若し瑕を道はずんば珠争でか轉ずることを得ん故に此語を發す其實荷澤の樹き美事なり純粹の黄金なるに渠れは可惜許青原に一問せられ直に一鉤に鉤上して此間に黄金あることなしやと思云く縱ひ有るも甚の處に向つて著けん二大老の商賈を大應舉揚し來りて便ち一掌を與ふは則ち好し何故ぞ黄金自から黄金の價あり終に沙に和して人に賣與せずと丁寧は君徳を損す無言却つて有言に勝る國師一掌便ち下り來らば猶は見るべきあらん

### 六百二十八 崇福除夜小參

舉。崇。德。除。夜。小。參。只。這。一。枝。拂。真。樓。欄。鐵。作。骨。自。古。至。今。未。嘗。變。易。年。窮。歲。盡。也。是。鳥。散。散。地。臘。去。春。廻。依。舊。如。前。然。雖。如。是。拈。起。也。天。廻。地。轉。放。下。也。風。行。草。偃。不。拈。不。放。應。時。納。祐。坐。致。太。平。且。道。這。一。枝。拂。子。憑。箇。什。麼。得。恁。麼。奇。特。良。久。云。只。許。老。胡。知。不。許。老。胡。會。

崇德手裏一枝拂子拈起也天廻地轉放下也風行草偃不拈不放應時納祐坐致太平奇特拂子只無一點可容隙全體無瑕之垂示雖然可惜許只是坐在者裏大應受用底一枝の拂手を翻へせば雲と爲り手を覆へば雨と爲る總放總收一擡一搦は則ち國師なきに非ず然り而して只老胡の知を許して老胡の會を許さず瑞卓云く適來の拂子什麼の處に向つて去る喝



六百二十九 五祖上堂頻頻喚汝

舉五祖上堂云頻頻喚汝不歸家。食向門前弄土沙。每到年年三月裏。滿城開盡牡丹花。  
山僧卽和云。還源備莫樂歸家。耳裏埃塵眼裏沙。布袋頭邊垂手化。滿城無處不開花。  
五祖の法華經は斯うぢややれ歸れくと呼び去喚び來るも門前に土沙を弄して會て長者の子たりしを知らざりし咄備等恐圖々々して居りて氣が付かぬか三月になれば何處も彼處も牡丹や櫻で錦なりけり是れを知らぬか咄

六百三十 虛堂開爐上堂

舉虛堂開爐上堂古德道法昌今日開爐行脚僧無一箇唯有十八高人。緘口圍爐打坐。師云。法昌解使不由家富貴。風流豈在著衣多。相巖今日開爐不用聚集泥像。暗地裏勝他一。等何故。版齒生毛。老古錐。夜深聽水爐邊坐。  
法昌與高人圍爐打坐。只是圓貧不圓富。虛堂版齒生毛。爐邊聽水。不風流。處轉風流。瑞阜薄福。開爐無行脚僧也。無泥像。茶煙颯處。靜聽松風。對二大老。慚愧。雖措身無地。不能奈何。遮莫爾爲爾我爲爾。

虛堂の開爐上堂ぢや法昌の十八高人は虚堂の泥像を聚めざるより勝れて虚堂却つて一籌を輸却せざるを得ず何が故ぞ有るは無きに優りて然かも猶ほ且つ十八人の多さあり然れども法昌終に虚堂に勝つを得ず何となれば版齒に毛を生ず老古錐夜深うして水を聽て爐邊に坐す此の老狸は中々人を教壞す十八高人の無心なるも異なれり。

六百三十一 息耕正日上堂

舉息耕正日上堂一年又一年循環數不足本分面上人猶如隔羅縠唯有南極老人扣天鼓  
三下望北闕而祝何故卓拄杖願我王萬福  
這箇頌得字字飛動句句躍如中間有難提掇處指摘將來看  
息耕正旦の上堂ぢや珠の盤上に走るが如く宛轉自在ぢや一年又一年と正旦の初めに無常迅速を持ち出したぞ循環數へ盡すことは能きぬ本分を手に入れた人でも猶ほ羅縠を隔つるが如き中々年月の移換るは目に見えぬぞ唯南極老人のみあり天鼓を扣く三下皆星の名なり正月に至れば南極星も天鼓星も北闕を望んで祝す所謂北辰其位に居て衆星之に拱ふ如くぢや何が故ぞ拄杖を卓して今上陛下萬歲此上堂那



處が主眼ぞ。全篇元旦祝聖の外なきなり。知らざる者は、平凡の觀を爲すも、若し得意の者は、甘露を飲むが如くぢや。

### 六百三十二 宋太宗因僧朝見

舉宋太宗因僧朝見。帝賜坐。問云。卿甚處來。僧奏云。廬山臥雲庵。帝云。臥雲深處。不朝天。因甚到者。真僧無對。後代雪竇代云。難逃至化。息耕拈云。明覺固是。食息不忘。當時若問。臣僧臥雲深處。不朝天。因甚到者。真。翰躬近前奏云。請陛下高垂天鑑。管取皇情大悅。

瑞阜即不然。當時若問。臥雲深處。不朝天。因甚到者。真。翰躬近前云。雲從龍。風從虎。天威逼于咫尺。臣僧恐懼。不知所措。管取皇情大悅。

宋の太宗は佛心天子と稱すべし。明君ぢや。宗旨の事にも、多少心掛が厚かつた故。縁に觸れ機に臨んで、發作する活機は見るべきあるぢや。此僧朝見にも、別段事なきに、帝は平地に波を起し坐を賜ふて、勘驗す面白ことぢや。斯ういふ宗旨に心を用ゆる天子だけありて、治化も能く、率土に普治して、明君と仰がれた臥雲深處。不朝天。此句を引出しての商景。此僧答はなきを、雪竇は惜まれて、至化を逃れ難しと代つた。息耕は請ふ陛下高く天鑑を垂れよと、二老の言、別に奇特なことは無いも、些と活機を逞しうする

が好い。然しながら何を言ふにも、對御の挨拶ぢや。臣僧の禮を失はざるを主とす。此僧無眼子は、惜むべしと雖も、御前に於て對無く、黙つたは、天晴れ大能きだ。却つて雪竇虛堂の代語より、此僧の默對が優れてあるぢや。

### 六百三十三 僧問谷隱如何是道

舉僧問谷隱。慈照禪師。如何是道。照云。臘月三十日。天應拈云。好大衆。一片皓玉無瑕。切忌動著。何故。雕文喪德。

拈云。谷隱臘月三十日。大應見甚麼處。道。一片皓玉無瑕。備若纒開口。則瑕生也。勿擬議。勿動著。國師雕文喪德四字。叮嚀損君德。且道。谷隱道。一月元旦也。得道。七月十五日也。得而但是臘月三十日。何故一字入公門。九牛拽不出。

大應は谷隱の臘月三十日と云ふたを、玉に瑕を著けたと云ふが、臘月三十日面白。那處が面白いと云ふたら、劈面便ち打せん。何が故ぞ。這箇の話は僅かに口を開かんとすれば、則ち瑕だらけとなり、餘を傷け手を犯す。然れども、此語砒礪狼毒ぢや。大應は動著すれば、文を雕り、徳を喪ふと云ふたが、動著しなければ、此の災いなきかと云ふに、爾うぢやない。元來此語出た處。大火聚の如くぢや。近いたら、面門を燒却するぢや。



六百三十四 心隨萬境轉

舉五祖上堂云。心隨萬境轉。轉處實能幽。雲門道。觀世音菩薩。將錢買胡餅。放下手云。却是箇  
傻頭。如此則隨他脚跟轉也。五祖有箇隨流認得性。快樂永無憂。底因緣。舉似大眾。忽然於此  
省去也。不定。良久喚侍者。侍者應諾。師云。我害癡。  
我害癡。舉似大眾。決其疑。頻喚侍者。者應諾。問著元來總不知。咄。黃梅山下。白拈賊。八十餘  
年鐵面皮。

此の上堂は、古人傳法偈を拈評した雲門は、觀世音の脚跟について轉するか、五祖は雲  
門の脚跟下に就て廻はらぬ、後句の流れに隨がひ性を識得すれば喜もなく、亦憂もな  
しの因縁を、大眾に舉似せん、ひよつと茲で悟るかも知れぬ、良久侍者を喚ぶ侍者應諾  
す、師云く、我を馬鹿にするな、乃公は馬鹿では無いぞ、此好きな語を云ふ、五祖全體、何處  
に居るぞ。

六百三十五 北條時宗贈羅漢於佛光拈香

舉佛光國師北條時宗贈十六應真拈香。應供四天下。處處成狼藉。神通妙用。不如魯者。若是

佛法。還老僧始得。不要。偏觀空入定。不要。偏指東說西。不要。偏降龍伏虎。不要。偏騰躡須彌。建  
長寺裏掛塔。且喫老漢竹筴。

羅漢神通妙用。降龍伏虎。吾這裏不要。者般閑技倆。建長云。且喫老僧竹筴。是則是。瑞阜即  
不然。若使他喫竹筴。則出院去。山僧深敬應真。偏既已具神通妙用。護持佛法。能為寶物莊  
嚴寺院。則護法功德。益顯于世。爾夫勉哉。

羅漢の神通妙用は、則ち人の仰瞻する所なり、只是れ小神通龍を降し虎を伏する底に  
して、佛法は未だし、佛光云く、若し是れ佛法ならば、老僧に還して始めて得んぞ、十六羅  
漢の建長寺へ入嫁ぢや、女婿の無學和尚、中々惡辣の手段を以て、新婦に對し、竹筴を喫  
せよと云ふ、开れでは、羅漢も堪へられまい、夫より寶物身を現して、寺院莊嚴を旨とし、  
佛法を護持すべし。

六百三十六 佛光上堂召大眾云

舉佛光上堂召大眾云。赤肉團上。有一無位真人。常在面門出入。未證據者。出來朝打三千。暮  
打八百。因甚如此。良久云。韓信放鐵鎚。

臨濟大師來也。朝打三千。暮打八百。吾這裏老衰。不堪受痛棒。敢請寬恕。且道佛光道底鐵



鶴擊搏幾層鐵圍吾則不然柔亦不茹剛亦不吐一在諸方被罵喚老婆禪。

這佛光が赤肉團上の一無位真人を拈弄するぢやが此未だ證據せざる者出來れ朝打三千暮打八百を見よ若しこれが見えたら韓信鐵鶴を放つも見ゆるや怎うぢや韓信の様な豪傑が鐵鶴を放つた寄り附かれやうか寄り附て見よ。

### 六百三十七 福山上堂小隱居山

舉福山上堂小隱居山大隱居市福山老漢倒泥搗水是汝諸人還救得也無良久擊拂子云三生六十劫。

福山老師赤脚上山滿身帶泥土和盤托出夜明珠赫赫佛光欲就則失錢遭罪乃公が此の通りに泥まぶれに爲つて居るのを手傳ふて呉れるものがあるか怎ぢやと良久して云く三生六十劫ども往けぬ面白い此味を咬占めよ直饒扶けるものが有つたどて矢張り三生六十劫ぢや盤に和して推出す夜光珠とは爰ぢや。

### 六百三十八 五祖拈普化明頭來明頭打

舉五祖上堂普化道明頭來明頭打暗頭來暗頭打虛空裏來虛空裏打四方八面來連枷打

臨濟問得遣僧問云總不恁麼來時如何化云明日大悲院有齋若是五祖即不然有人問總不恁麼來時如何和聲便打是他須道五祖盲枷瞎棒我只要爾恁麼道何故一任舉似諸方

總不與麼時如何普化云明日大悲院裏有齋五祖云和聲便打山僧即不然若有人問總不恁麼來時如何則答道棒頭有眼是他須道今日草草打著一箇連棒打著山僧便道知過必改何故爭之無益。

普化の作賂美事なるのぢや五祖は其上に出でたる一倍の働きぢや何んと出たぞ若し乃公ならば爾うはしない人ありて總に不恁麼に來る時如何と問はハ其聲に和して便ち打せん爾うするど他は必ず五祖盲枷瞎棒と道はん其時乃公は果然其方は恁麼道はるならんぞ豫じめ察せしなり何故にか諸方に恁麼に盲枷瞎棒と云はるゝに一任して敢て申譯もせない向ふが云ふに任かせて置くど斯の五祖の肚を見るべし禪の中興と稱せらるゝも爰ぢや實に驚るゝ入つた挨拶ぢや。

### 六百三十九 崇福結夏上堂

舉崇福結夏上堂靈源不昧舉萬法而全彰妙用繁興稱法界而齊起行一步踏著罌盞眼睛舉一指築著達磨鼻孔恁麼禁足恁麼安居眨眼便過一夏其或未然西天令嚴。



大應國師上堂。幾乎觸諱。且道一步踏著箇什麼。一指築著箇什麼。吾王庫內無如是刀。直饒西天令嚴奈箇不住。圓覺伽藍不守三期。制限底祿。僧何他。是直透萬里關。不住青霄裏。崇福結夏上堂。正位を云は、全體提起。ちや偏位差別の上よりは、河沙の妙用を、興して顯現す。一步を舉れば、瞿曇の眼睛を踏却し、一指を舉れば、達磨の鼻孔を擦振す。斯の如き、禁足安居に、若し警起すれば、一夏立地に過ぎ去る。其或は未だ然らざれば、西天の規矩は、嚴重ながら、油断してはならぬ。那處で大應を見るか、能く甄別せよ。

### 六百四十一 崇德拈臨濟一無位真人

舉崇德上堂。臨濟示衆云。有一無位真人。汝等諸人。面門出入。未證據者。看看。師云。臨濟老漢。未是白拈賊。說甚證據。未證據。直下識取元物。何故。青氈元是我家舊物。臨濟固白拈賊矣。無可識取者。大應道直下識取元物。識取箇什麼。於其不可識取元物。而臨濟證據。雖然此公案。於證據不證據。見臨濟則且得沒交涉。何者。臨濟從頭以不住乎。此也。臨濟住處。認得分明。許爾論證據。未證據。若不然。白雲萬里。何故。鉤在子不疑地。臨濟一無位の真人。大應は道ふ。臨濟未だ白拈賊に非ず。證據未證據を説く。夫れより元物を識取せよと。大應國師好笑々々。元物とは是れ什麼。若し元物の識取すべきものあらば、沒交涉。ちや臨濟は箇の保社に入らず。何の識取すべきものある。山僧は横に點頭せざるなり。

らば、沒交涉。ちや臨濟は箇の保社に入らず。何の識取すべきものある。山僧は横に點頭せざるなり。

### 六百四十一 僧問雪峯古澗寒泉時如何

舉僧問雪峯云。古澗寒泉時如何。峯云。瞪目不見底。僧云。飲者如何。峯云。不從口入。趙州聞得云。不可從鼻孔裏入也。僧却問趙州。古澗寒泉時如何。州云。苦。僧云。飲者如何。州云。死。五祖云。若有人問五祖。古澗寒泉時如何。即向伊道。分水飲者如何。但云。當下止渴。或有箇人出來問道。與曹溪水。是一是。我即向伊道。分枝列派。縱橫自在。低處澆田。高處潑菜。瑞阜拈云。若有人向山僧問。古澗寒泉時如何。即向伊道。滴水滴凍。飲者如何。肚裏膨脹。若有問與曹溪水。是一是。二。即向伊道。澄潭不許蒼龍蟠。畢竟如何。九曲黃河混底濁。這是有名なる古澗寒泉の則ちや。雪峯は瞪目して底を見ず。僧が飲む者如何と問ふた。口より這入らずと云ふ。趙州は之を聞て鼻から猶ほ這入りまいと云ふ。开んなら尊公は怎うでムると問ふたら。苦と云ふ。あア寒い。飲んだら怎でムると問へば。死と云ふた。是等の挨拶は。例の唇皮口吻禪の自由三昧ちや。驚ろき入つた挨拶ちや。其處で五祖は之を水と云ひ。飲む者如何と云ふに。當下に渴を止むと。是れはまだしも。吐くことが能



さるか曹溪の水と、一か二かと云ふに幾つにも枝が派れ派が立つて縦でも横にも自在に流れるぢや低い處は田地の用水に引き、高い處は菜園に派く曹溪の水も東山下に至つては斯くの如く活用するぢや嗚呼面白。

### 六百四十二 佛光除夜小參

舉佛光除夜小參。僧問。瑞巖云。如何是佛巖云。石牛。此意如何。師云。白月。則現。進云。如何是法巖云。石牛兒。此意如何。師云。黑月。則隱。進云。恁麼則不同去也。巖云。合不得。又作麼生。師云。近來者亦進云。因甚麼合不得。巖云。無同。可同。又且如何。師云。近墨者黑。進云。落何階級。巖云。排不出。又且如何。師云。東西南北。進云。因甚排不出。巖云。從前無階級。又作麼生。師云。一二三。進云。未審。居何位次。巖云。不坐。普光殿。此意又且如何。師云。晝夜一百八。瑞阜即不然。如何是佛。雨洗風磨。如何是法。法出姦生。恁麼則不去也。其智可及。因甚麼合不得。其愚不可及。落何階級。天上星。地下水。因甚排不出。三竅俱明。居何位次。晝夜一百八。看來瑞巖與建長。大似鬪將。菜相似。瑞阜宿將。左右從。金銀坐。重圍中。堅固陣壘。以待勅敵。建長縱橫馳突。縱飛車與角。而擡旗。奪鼓。瑞阜從傍觀偵察。行使游擊。儘使點桂馬。京車兵。夫突貴進攻。而佛法城塞。歸於誰手。無勝負處。也風流可見矣。

此除夜小參は佛光は瑞巖より一重超越したる名句を吐いたぞ瑞巖の語是は則ち是と雖も佛光は其上に出て活機あり而して未審何の位次に居す巖云く普光殿に坐せずと面白。悟りに尻を居るは則ち普光殿ぢや此等は瑞巖の答處格別に好いが又佛光は晝夜一百八と切り出した是れ什麼意句俱に到るとは爰ぢや講釋するなら必定墮獄を免かるゝことは能きぬぞ

### 六百四十三 五祖拈趙州道箇栢樹子

舉五祖上堂云。趙州道箇栢樹子。廬陵隨後雪白米。中間有箇白蓮峯。一口吸盡西江水。喜美囉。囉。囉。囉。囉。囉。我自。我。爾。爾。爾。爾。深村有箇白額蟲。吒。嚙。嚙。嚙。九條尾。良久云。唵。好。怕。人。唵。好。怕。人。因。冷。笑。一。聲。急。急。如。律。令。

此上堂面白。いことを云ふたものぢや何せか趙州の箇栢樹子廬陵隨後の雪白米。其中間に箇の白蓮峯あり。一口に西江水を吸盡す喜しい美しい餘り嬉いて躍り出した。此水は何とも云へぬ味がある。我れは我爾は我爾は爾各々自分の樂む處に居るが好い時に彼村に一匹の額の白い虎がある。其勢ひ腮鬚を立て鬚鬚だらけ。尾は九條に分れる。良久して云く。唵やれ笑止しや。好く人を怕れしむいかなものも。此虎に逢ふたら咬み殺



されるぞ、それ恐ろしやと五祖の腸肚を看よ、此活機用を看よ、死戯ごとの様にあるが、扱て生きて見るが如くぢや、斯うも云へんぞ。

### 六百四十四 五祖上堂舉則公案

舉五祖上堂云、舉則公案、事事成辯、向外馳求、痴漢痴漢。

五祖老婆小慈妨大慈、我者裏待伊通身紅爛、而始下手矣。

五祖脱白露上に、枉げ出した、何も箇も丸ごかしぢや、これで見えぬものは見えぬぞ、見ると云ふも見えぬ奴ぢや、咄。

### 六百四十五 崇福上堂一人發真歸源

舉崇德上堂、一人發真歸源、十方虚空悉皆消殞、五祖云、一人發真歸源、十方虚空、築著磕著、崇福則不然、一人發真歸源、十方虚空只在毫端、且道、故人是同是別、大衆試辯看。

瑞阜即不然、一人發真歸源、十方虚空、花笑鳥啼。

一人真を發して源に歸すれば、十方虚空悉皆消殞、下の句面白くない、十方虚空消殞では、死句ぢや、本分から云へば、此通りなれども、衲僧は爰を跳り出ねば、活機が無い、其處

で古人は、築著磕著、崇福は只毫端に在りと云ふ、若し山僧ならば、十方虚空、てつこんせへ、よういとさアと、是れで、好いでもないが、先づ云ふなら、斯うぢや。

### 六百四十六 大應上堂雪上加霜

舉大應上堂、雪上加霜、爲瑞爲祥、妙應無私、不用商量、卓拄杖一下、千古萬古只是者、何必胡僧勸舉揚。

大小大崇福、好笑好笑、瑞阜則不然、千古萬古只是者、以故胡僧出頭、舉揚商量、須七穿八穴、始可矣、若夫坐在無事甲裏、則不是、不是。

此上堂取り違つたれば、死人無數ぢや、雪上に霜を加ふるは、瑞なり、祥なり、妙應私無しは、成る程違ひはないが、商量を用ひずとは、山僧は横に點頭せざるなり、としく、商量するが好い、無事甲裏に坐在しては、圓應無方の本懐に相違するぢや、七穿八穴とこまでも穿鑿するが好い、目的は慈悲濟世の大誓願に在るぢや、努力せよ、努力せよ。

### 六百四十七 崇福虛堂忌拈香

舉崇福虛堂忌拈香、生佛未具以前、早有這箇世界、纒分、便見薰天炙地、崇福一年一度、當陽



拈出。供養。這老和尚。要且不是報恩酬德也。只是借水獻花。

只是借水獻花。大應國師。廣大報恩。雖然且道是報恩乎。報怨乎。東海日多之記。別一人傳。唐高僧傳。實說東話。西喚鐘作。迦證龜作。龜國師。早知有今日。悔不愼當初。山僧也兜樓一炷。薰向爐中。深衝他。透天鼻孔。使噴。一。番。便見快也。

崇福。虛堂忌の拈香來る。歳も同じことをするが。這箇はいつも相變らず。薰天炙地する。報恩に非ず。酬德に非ず。只是れ水を借つて。花を獻するなり。毎年爲さずとも。好いが來る。歳も來る。歳も水を借つて。花を獻す。嗚呼。面白。虛堂和尚喜ぶであらう。大應誰れに。斯ういふことを。教へて。貰ふた。虛堂和尚であらう。左すれば。毎年水と花とは。安。い。報恩ぢや。

### 六百四十八 雪峯領衆到浮江

舉。雪峯領衆到浮江。乃問云。欲寄二百僧。過夏得否。浮江以拄杖畫一畫云。著不得。息耕拈云。奸峭互陳。對面千里。有人寄僧。過夏南山。大開東閣。何故彼此出家兒。

雪峯領衆到浮江。江云。著不得。水洒不著。風吹不入。息耕云。大開東閣。面上夾竹。肚裏荆棘。一人平蕩蕩。一人長戚戚。如何處之得宜。若是瑞阜。君子周急不繼。富又云。有條攀條。無條

### 舉例

雪峯衆を領して。浮江に到る。江の峻拒に逢ふて。歸る。息耕拈じて云。互に奸峭を陳じて。對面しながら。千里の隔てを爲して。折れ合はぬは。面白く無い。乃公なら。开んなことは。爲ぬ。若し夏を南山に過すを。所望と。わらば。方丈書院。何處も箇も。打ち開きて。よ。ア。これへ。御座れ。と。待ち受けて。供養する。何故かと云ふに。彼も此も。立派な。歴々の。辨僧ぢや。危末に。扱ふては。ならぬ。と。此。虛堂の。挨拶に。對して。これは。く。辱けない。恐れ入りまし。て。ム。ると。道つたら。虛堂は。満足する。か。或は。冷笑。一聲する。か。如何であらう。

### 六百四十九 宋太宗入大相國寺見僧看經

舉。宋太宗。因入大相國寺。見僧看經。問曰。卿看甚麼經。對曰。仁王護國經。帝曰。既是寡人。經因甚。在卿手裏。僧鞠躬退身。不對。雪竇曰。皇天無親。惟德是輔。息耕拈云。太宗古鑑高懸。無私不照。者僧鞠躬。不對。經旨。歷然。雪竇道。皇天無親。惟德是輔。又作麼生。卓拄杖。四海盡歸。皇化。三邊誰敢犯封疆。

太宗仁王。雖不持經。護國。其任。叮嚀。損君德者。僧祝聖。誦經。手不釋卷。退身。不對。無言。固有功。既是。細素。歷然。雪竇。虛堂。只管。逆風。吹火。耳。要看。端的。麼。狼烟。一掃。盡。萬里。賀太平。



宋の太宗は機晤宏遠中々活潑な天子ぢや素より宗旨の蘊奥は究めざるも禪機が横溢してゐる此所問答は衲僧面前では朝間の茶の子ぢやが天子としては能く遣つた其處で此僧も中々手に合はぬ鞠躬退身して對へざる處に味あり雪竇の撻處も好いが虚堂が此僧の不對は經旨歷然と云はれたは意句俱到ぢや仁王護國經は般若部に屬して般若は空宗で無言無説を以て主と爲す故と此僧を扶けて云ふたが畢竟此僧今一つ活機が無い爰で一言天聰を傾けさせる名句が欲しい雪竇虚堂を驚かす程の句がないか四海八蠻皇威赫々と云ふては届き兼ねる輔くる維れ辟公天子穆々と山僧はこれで局を結ぶぢや

### 六百五十 六祖風旆話

舉六祖云不是風動不是幡動仁者心動巴陵拈云不是風動不是幡動向什麼處著雪竇云是風是幡甚處著大應拈云二大老同途不同轍崇福不然是風是幡切忌動著何故轉喉觸諱

六祖風幡話諸大老舉揚爾菊擅美圓通國師道轉喉觸諱是則是瑞阜即不然不是風動不是幡動不是心動切忌動著爾若擬如何則七花八裂

六祖風旆の話是れ幡動くに非ず仁者心動くとこれにて見るべし後來諸大老の説ありと雖も山僧は取らず只是れ仁者心動くに於て薦取すべし如何が是れ仁者心動く紅旆閃爍見るべし取るべからず若し之を取らんとすれば則ち鋒を傷つけ手を犯す如何が是れ心動く動著する勿れ動著すれば三十棒ぢや畢竟如何只老胡の知を許して老胡の會を許さず

### 六百五十一 崇福二月上堂

舉崇福二月上堂日暖風和鳥啼花笑不是如來禪亦非西來意且道畢竟如何只許老胡知不許老胡會

瑞阜即不然日暖風和鳥啼花笑即是祖師西來意何故瓠子曲彎彎冬瓜直儻儻老胡の知を許して老胡の會を許さず此語向上の人の活計ぢや初心の者は到底臭も嗅ぐことが能きぬ若し此語を會すれば如來禪も祖師禪も日暖かに風和らぎ花笑ひ鳥啼くも此語に和して一場の活天地を呈し去るも若し然らざれば十萬八千ぢや山僧は瓠子は曲つて彎々冬瓜は直して儻儻と云ふ却つて此語と合するや否や合すと云は朝三暮四合せすと云は朝四暮三急に眼を著て看よ



六百五十二 五祖上堂有物先天地

舉五祖上堂云有物先天地無形本寂寥能爲萬象主不逐四時影古人恁麼道可謂錦上鋪花不妨奇特諸人且作麼生會白蓮今日曲順後機不惜眉毛亦爲顯出中有無中無細中細細中細

五祖倚天長劍寒霜凜凜山僧也注解一逼有無盡細大小權實雨降地濕天晴日出擬議三十棒

五祖上堂傳大士の頰を拈弄して錦上に花を鋪きて麗しいことぢやして云く乃公ならば初心後機の爲めに解し易からしめんとして有中の有無中の無細中の細盡と云はんと流石の五祖ぢやこれならば誰でも解るであらう然れども八成ぢや山僧に今一つ向下に道はしめば奴は婢を見て慙慙

六百五十三 五祖上堂今朝八月二十

舉五祖上堂云今朝八月二十佛法兩字難入深村大小老翁達磨祖師不及瑞阜和云二八四三九十大聲里耳難入釋迦彌勒他奴過也猶如不及

斯ういふことは稍僧朝前の茶飯ぢやが悟りの臭味が抜けぬものは一寸解らぬを在郷の助六爺にも達磨祖師が及ばぬとは什麼事を斯ういふ處が五祖の五祖たる所以ぢや讚歎し及ばぬ貴きこと金玉の如し賤きこと泥土の如し

六百五十四 長生因雪峯問

舉長生因雪峯問光境俱忘時如何生云放皎然過有箇道處峯云放汝過作麼生道生云皎然亦放和尚過峯云放汝二十棒佛光拈云雪峯如獅子教兒踞地翻空瞋眼不得皎然生

長生雪峯下跨窺兒虎生三日有食牛機而雪峯放汝過作麼生道果然落敵術中雖然大小雪峯手脚不忙有巖下風生虎弄兒之機生云皎然亦放和尚過真獅子兒能獅子吼峯云放爾二十棒重賞之下必有勇士建長拈云獅子母教兒踞地翻空獅子兒却能噬母洵

然然而峯放二十棒有擡有弱試辯諸詛看山僧即道盡善矣未盡美矣又云勘破了也這は是れ雪峯下の調ぢや雪峯が光境俱に忘する時如何と此所問で長生の手許を試みんと掛つた流石の雪峯の聲響兒ぢや皎然の過を放さば某甲の不調法を申すを御放しならば申し上げますと箱手を掛て來た峯云く汝の過を放すと能と箱手に乗つ



て掛つて長生を見やうとす。生云く、恁麼ならば某甲も和尚の過ちを放す。獅子兒能く獅子吼す。此力の勝れたる中々の腕前である。峯云く、汝に二十棒を放す。峯は甚だ御意に叶ふたと見えて、此の御機嫌の好さは尋常でない。佛光の拈評は斯うちや。獅子が兒に踞地翻擲の働きを教ゆるには、瞋眼もさせぬ。皎然は流石の獅子兒だけある。沈著して居らぬ。生きく、獅子吼一聲は、動もすれば母を噬むの働きがあると、能く評した。是れが東山下の風采ぢや。宗旨を取り惱む上は、始終此機がなければならぬ。佛光は雪峯、長生の上を働いて居る。此恐しい處を氣を付けて看よ。

### 六百五十五 佛光上堂粒米分明

舉佛光上堂粒米分明。抵粒珠千般痛苦。是田夫盛來滿鉢。都拋擲當念賣身來納租。滿盤粒粒白如珠。辛苦憐他野老夫。今日若無還信。施復身應自納皇租。記取長者八十一。其樹不生耳。臨濟道底。

此上堂は難有い。佛光滴血血地の垂示ぢや。此中に向上の宗旨がある。只是れ農家粒粒辛苦の信施を消費してはならぬと云ふだけではない。盛り来る滿鉢か。無願心の者に食せしむるは、丸で泥溝に抛擲するも同じ。深く觀念して、身を賣り、子を働いで租税を

納めた血液ぢやものをも、更に道へ國師の意何の處に在る。

### 六百五十六 僧問古德如何是法身

舉建長結夏小參。僧問古德如何是清淨法身。德云。山花開似錦。湖水湛如藍。師云。破。破。破。進云。又有一古德云。膿滴滴地。又且如何。師云。九九八十一。進云。今夜問和尚如何是清淨法身。師云。自小爲僧。今六十。不曾擡手。拈公卿。僧禮拜。

大龍玄沙建長皆一騎當千之驍將。而玄沙優於大龍。建長勝於玄沙。將玄沙較建長。則寸却長於尺。更將建長之尺。望於大龍之丈。則丈却如低。譬之宮牆龍之牆也。及肩。窺見室家之好。建長之牆數仞。不得其門而入。不見巨福之富。自小爲僧。今六十。不曾擡手。拈公卿。一箭中的。好語說盡。誰能有後箭。相攝而放乎。雖然。山僧猶是得。臨望獨。

是れは大龍の堅固法身を、僧が問ひたるを拈じたのぢや。が面白い。佛光は鬪體の頭を破す。これに道へる。又玄沙の膿滴滴地も、随分能さるが。佛光の九九八十一は、出ぬ。山花開いて錦に似たりか。眞實に會得能さぬ。ば是れは見えぬ。此僧今夜和尚に清淨法身を問ふたれば、如何と好一拶。師の答を看よ。小より僧と爲る。今六十會て手を擡げて、公卿を拈せずと好句破。天荒ぢや。大展三拜せねばならぬ。もう怎んなことを云ふて



も之に桶付く者はあるまい。開んなら是れに何處が好い分析して見たれば別に變つたことを云ふたので無い。爰にさア、何とも道へぬ味があるは父子不傳ぢや、恚も此輩梅がさア。

### 六百五十七 臨濟到金牛

舉臨濟到金牛。牛見師來。橫按拄杖。當門踞坐。師以手敲拄杖三下。却歸堂中。第一位坐。牛下來見。乃問。夫。實主相見。各具威儀。上座從何而來。太無禮。生師云。老和尚道什麼。牛擬開口。師便打。牛作倒勢。師又打。牛云。今日不著便。馮山問仰山。此二尊宿。還有勝負也。無仰山云。勝。即總勝負。即總負。

拈云。金牛爲臨濟所打。雖居實位。也有陷虎之機。臨濟雖得主位。既落金牛圈。積之內。牛云。今日不著便。一語將臨濟托上梵天。雖然山向岳邊。止水流海上消。此商量是一寸見。たら金牛が負けた様にあるで。後來馮山仰山の間答も出たのぢやが。然しながら仰山の勝つは總に勝ち負るは總に負くと云ふたは面白。是れは實主互換の機ぢや。牛が臨濟の來るを見て。横に拄杖を按して。門に當つて云く。己れと目指すものは何時でも出て來ひの勢ひぢや。主乃ら實を見るのぢや。其處で臨濟又金牛を見

んとて。手を以て。どんくくと三つ拄杖を叩いて。知らぬ顔の半兵衛で堂内の第一位に坐り込で居る。流石の金牛ぢや。人を殺さば。須らく血を見るべし。彌よ火蓋を切つて打ち始めたぞ。夫れ實主の相見は。威儀も有るに上座は何處の馬の骨か。知らぬが。無禮千萬の奴ぢやと。斬り掛けた。臨濟云く。老和尚什麼と道ふぞ。牛口を開かんと擬す。師便ち打す。迅雷耳を掩ふに及ばざる機あり。牛倒る。勢ひを作す。師又打す。是れ誦詠の在る處ぢや。金牛が負けて。臨濟が勝つた様であるか。开で無い牛云く。今日便を著けず。己れは今日始終。勝手が悪るか。つた。是れ負けたのか。一箇狼毒の肝腸煮ても。焼ても。喰へるものでない。此語の寒しいさは。爰等は擇法眼が無いと。謬るぢや。之を要するに。金牛臨濟。仰山の三人は鼎の三足の時つが如くぢや。

### 六百五十八 崇福結夏小參

舉崇福結夏小參。一毫頭上。結制安居。十方虚空。一時逼迫。若聖若凡。情與無情。總在裏許。逃出無門。墮在釋迦。老師影子裏。不拘規矩。不修練行。酒肆茶坊。禁足護生。又落七佛之師。舊時途轍。呼喚不廻。羅籠不住。要行便行。要住則住。活鱖鱖轉。轉轉。正是而今。衲僧用底。未敢相許。且道。畢竟如何。行履良久云。若是鳳凰兒。不向那邊討。



結制安居。規矩準繩。不墮釋迦影子。不落文殊途轍。羅籠不住。呼喚不廻。活潑地底。是衲僧行履樣子。大應因甚。麼不敢相許。這般消息。國師老婆親切。雖然仔細看來。猶是靈龜曳尾。何故此地無金。二兩俗人沽酒三升。

此結夏小參。は大應惡辣の手段ぢや。若しは凡若しは聖情と無情と何にも箇も叩き込で。這裏に入れた無門を逃れ出れば。釋迦の影子裏に墮ち放肆縱任は。文殊の途轍裏に墮つ舊時の途轍呼べども。廻らず籠すれども住せず。勝手氣儘に馳廻るも好いが。今日は開れば許さぬぞ。結夏ぢや。左すれば怎う行履しましやうを。良久して云く。鳳凰兒ならば那邊に向つて討ねすと。大應何處に居るぞ能く看よ。

### 六百五十九 息耕上堂山高水深

舉息耕上堂。山高水深。雲閑風靜。佛法至妙。妙在中和。中和則且置。賓主歷然。又作麼生。卓拄杖。拾薪汲澗煎茶外。倚杖閑看雲去留。

山高水深。雲閑風靜。不是佛法至妙。山僧則不然。耳朶裏打鼓。鼻孔裏燒香。是れは徑山の境致を打して。山高水深。雲閑風靜と云ふたは好い。佛法の妙々は中和に在るも。不是では無いが。虚堂の平生唱道底とは違ふぞ。其處で中和を除いて。賓主歷然

は怎うぢや。薪を拾ひ澗を汲み茶を煮るの外。杖に倚りて雲の去留を看るばかりぢや。あゝ好い境界ぢや。然し虚堂尊公も大分な年を召しましたな。是れが山僧の挨拶ぢや。

### 六百六十 虚堂拈國一與馬祖之因縁

舉虚堂在徑山舉山國一禪師。因馬祖遣僧馳書至。書中作一圓相。國師啓緘見之。遂於圓相中著一點。封回師云。可惜許。當時只好留在案上。一任日炙風吹。非唯坐斷馬祖舌頭。亦使天下衲僧無摸索處。事既往矣。還有爲國師拔本底麼。卓拄杖。

國一禪師著一點。封回是禮虚堂只好留在案上。一任日炙風吹。非禮也。直饒坐斷馬祖舌頭。去爭奈負於宗盟。山僧即不然。當時所送圓相受取。留在案上。別書和尚萬福四字。封回則馬祖亦首肯也。何故禮從宜使從俗。

這の國一禪師が馬祖より到來の一圓相に一點を著て封回したも面白いが。當時山僧ならば圓相の中に馬の字三つを書して封回せば。ひよんなものであらう。馬祖も受取つて驚くであらう。事既往に屬す。虚堂の握り潰しも。一作略なれども。趣味が薄い。矢張り向ふから喧嘩買ひに來たこと故。此方よりも相當相手の作略無ければならぬ。開



れには疑問の材料となるものが好い國師の落節を馬の字で抜本するも一工夫ぢや阿阿々。

### 六百六十一 崇福虚堂忌拈香

舉崇福虚堂忌拈香。世尊三昧。迦葉不知。迦葉三昧。阿難不知。先師三昧。崇福不知。既是彼此不相知。因甚麼。一年一度。炷香作禮。嗚呼。嗚呼。無人知。此意。令我憶南泉。

各各三昧。各各不知。且置崇福。一年一度。炷香作禮。虚堂知麼。不知麼。若不知。用禮爲什麼。畢竟如何。詩向會人吟。酒逢知己飲。

一年一度。相變らす。水を借て。花を獻じ。香を焼て。禮拜を爲す。嗚呼。嗚呼。蒼天一場の敗闕。これ。虚堂和尙の供養になるか。なるともく。一年一度。相變らす。同じことを爲す。路遙かにして。馬力を知る。歳久して。人心を識る。嘆。

### 六百六十二 臨濟遷化

舉臨濟臨遷化時。據坐云。吾滅後。不得滅却。吾正法眼藏。三聖出云。爭敢滅却。和尙正法眼藏。師云。已後有人問汝。向他道什麼。三聖便叫。師云。誰知吾正法眼藏。向這臨濟。遷滅却。言訖。臨濟。

然示寂。

拈云。臨濟。驚群衆。正法眼藏。滅却。密付屬誰人。堂堂去。斂迹。喝臨濟。戰化。宗風不傳。莫道絶消息。三更打午天。

此の臨濟遷化の則は宗門の一大事ぢや。臨濟の如き。大宗匠。祖師でも。斯く後の事を心配するか。能く看よ。臨濟は平素の言行に徹しても。斯かる滅後の事。坏に。彼此苦慮する様な人で。無からうが。此の據坐の垂示は。洵に懸篤と云はねばならぬ。釋尊の入滅も亦然りぢや。此等の縁盡きて。化を他方に遷さんとするぢやもの。此垂示無くては。叶はぬ。師は滅後の事を囑して云く。吾が正法眼藏を滅却することを得されど。正法眼藏野にも山にも。一はい。宇宙に。彌淪して。居る何が故に。斯く云はるや。此語宜しく。咀嚼すべし。時に三聖衆を出て云く。争でか敢て。和尙の正法眼藏を滅却せん。恚して。和尙の正法眼藏を滅却しませうか。和尙の二字。面白。流石の三聖ぢや。師云く。已後人あり。備に問はれ。他に向つて。什麼とか道はん。前箭は猶ほ軽く。後箭は深し。今後兩片皮を鼓して。如何が人の爲めにせん。の意ぢや。三聖便ち喝す。獅子兒。能く獅子吼す。師云く。誰か知らん。吾が正法眼藏。這の臨濟邊に向つて。滅却することを。是れ什麼護國元云く。鯨海水を呑み盡して。珊瑚樹を露す。大燈云く。滅の一字。高く。眼を著けよ。若又會せずんば。臨濟の宗風。豈



今日に到らん。此二尊宿の臨濟を評する能く臨濟の意を會するや否や、具眼の士は、甄別して看よ。正法眼は滅却す。瞎驢邊と之を領會せば、濟北の宗旨手に握るを得べし。至囑々々。

### 六百六十三 建長拈法本法無法

舉建長舉法本法無法無法亦法。今付無法時法何曾法拈云。世尊此偈如黑石蜜中邊皆甜如黃連木根莖皆苦。是汝諸人作麼生吞作麼生吐喝一喝。世尊傳法偈。無縫口則觸諱。放在一邊不舉也。顯新佛性無備插嘴處。只有建長黑石蜜之譬也。較些子。山僧即道。砒毒亦活人。甘露亦殺人。喝。世尊傳法の偈講釋は能きぬでは無いが然れども爲ぬ方が勝れたり。佛光も此偈黑石蜜の中邊皆甜さが如し。黃連木の根莖皆苦さが如しと云ふ。此の甜苦の様子を形容したまでなり。山僧は合頭でも此語を甘瓠は根に連つて甜く苦瓠は蒂に徹して苦と云はん。

### 六百六十四 臨濟示衆學道人要自信

舉臨濟示衆云。如今學道人。且要自信。莫向外覓。總上他閑處境都不辯邪正。祇如有祖有佛。皆是教迹中事。有拈起一句子語。或隱顯中出。便即疑生。照天照地。傍家尋問也太忙然。大丈夫兒莫祇麼論主論賊。論是論非。論色論財。論說閑話過日。山僧此間不論僧俗。但有來者盡識得伊。任伊向甚處出來。但有聲名文句。皆是夢幻。却見乘境底人。是諸佛之玄旨。佛境不能自稱。我是佛境。還是這箇無依道人。乘境出來。若有人出來問我。我求佛。我即應。清淨境出。有人問我。菩薩。我即應。慈悲境出。有人問我。菩提。我即應。淨妙境出。有人問我。涅槃。我即應。寂靜境出。境即萬般差別。人即不別。所以應物現形。如水中月。道流。倘若欲得如法。直須是大丈夫兒始得。若萎萎隨地。則不得也。夫如瓊瓊之器。不堪貯醜醜。如大器者。直要不受人惑。隨處作主。立處皆真。但有來者。皆不得受。備一念疑。即魔入心。如菩薩疑時。生死魔得便。但能息念。更莫外求。物來即照。備但信現今用底。一箇事也。無備一念心生。三界隨緣。被境分爲六塵。備如今應用處。欠少什麼。一刹那間。便入淨入穢。入彌勒樓閣。入三眼國土。處處游履。唯見空名。且要自信。莫向外覓八字。錄中要領。垂示微因。學道人不得真無他。以認他古人閑機。隨處作主。立處皆真。乃從不向外覓來。巖頭云。從自己胸襟流出。蓋天蓋地去。蓋認他閑機。境不辯邪正。論是論非。論色論財。論說閑話之徒。皆是聲名文句。而空華夢幻。何足弄把捉。自信二字。可謂破三關之一鐵也。



道箇の垂示徹困なり。臨濟は學者に勸むる處、只是れ自信を要して外に向つて、覓むるを被斥せられたり。如何が是れ外に向つて、覓むる底、凡そ祖有つて已來、不立文字、教外別傳を唱へて、教迹に追ひ廻はされ、文字言句に附て廻はる者を、痛く排斥せられたるは、他に非ず、自信の徹せざるより、種々と妄想知解に、月日を送り、彼の經此の論と、晝夜に只是れ、依附して、憑據する處を、覓めて、己れが根據と爲さんとするは、學者の病ひにして、若し之を排斥するときは、恰かも官者の杖に離れたるが如く、摸索不著、遂に逆溝に墮するの外なし。故に臨濟は、常に室内で、人を鑄冶するに、他の閑機境の經論言句に、附て廻はるるを、斥ぞけ、論して云く、爾が今境に乘じて、向ふに附て廻はる底のもの、本末孤明、歴々として、何の不具なきに、何に故に、其本を棄て、末に趨り、奔波狼狽するぞ。山僧が人に示すは、別に法あることなし。直に人々をして、人惑を受けずして、隨處に主と作れば、立處皆眞なるを、知らしめんが爲めである。努め、外に覓めてはならぬ。外に向つて、法は無い。开んなら、内に在るか。と云ふに、内も亦不可得ぢや。但、自心を要すれば、外に覓むるものは、絲毫も無い。又如今應用の處に、什麼も欠少したものはない。故に、自心を信せよ。信不及ならば、他の六塵に涉りて、藻掻き廻はるより、外なく、少信根の者は、遂に丁日無いぢやと、是れ臨濟の慈悲老婆ぢや、深く省察せよ。噫、錯つて説き過ぎた人の

爲めに、葛藤す、早く今日を知るあらば、當初を慎まざることを、咄

### 六百六十五 崇福講經上堂

舉崇福因講經上堂。世尊四十九年。橫說豎說。未曾說一字。崇福三十餘日。談玄談妙。未曾談一法。且道。如何是不談底事。卓拄杖一下云。三段不同。收歸上科。

世尊未曾說一字。而五千四十餘卷。充滿龍藏。崇福未曾談一法。而三十餘日。講經談玄。作麼生。是不說不談底事。畢竟如何。欲知無限。傷春意。盡在停針不語時。道ふなかれ。世尊四十九年。一字を説かずと。一大藏教。何れより來たる。道ふなかれ。崇福三十餘日。一法を説かずと。一月間の講經。何の爲めに。する。山僧は説いたものを。不説と道はぬ。談じた者を。不談と道はぬ。既に説き、既に談じて。説かぬと云ひ、談せぬと云ふ。良を壓して。賤と爲し、直を拗して。曲と爲す。君子は欺むくべし。誣ゆべからず。崇福誣ひたり。然れども。綜合し。將ち來りて。之を看れば。矢張り崇福底は。是にして。山僧底は。不是なり。爰に於て。止僧は。兜を脱して。降伏す。

### 六百六十六 僧到鶴林敲門



舉僧到鶴林敲門。林云誰。僧云行脚僧。林云莫謂行脚僧。佛來也。不著。僧云既是佛來。因甚麼不著。林云無汝棲泊處。大應拈云。大小鶴林無佛處。稱尊崇福則不然。既是佛來。因甚麼不著。只向他道。不會作客。勞煩主人。

鶴林道無汝棲泊處。只見錐頭利。不見鑿頭方。大應道。不會作客。勞煩主人。是則是。雖然二大老。共是未見者。僧在從頭拒而不容。太煞缺慈悲。儼然則普門一品。向甚麼處著。瑞阜當時若爲鶴林。則開門而親面接。何故百聞不如一見。

鶴林が僧を接する手段面白い。僧鶴林に到りて門を敲く。林云誰ぞ。僧云く行脚僧。林云く乃公が處へ佛が來たどて寄せ附けぬ。僧云く佛來るに甚に因つて寄せ附けぬ。林云く其方が棲泊する處がない。この僧不作家は且く置く。鶴林の答水洒げども著けざる處は好しと雖も未だ盡さる處あり故に大應は此罅隙を見て挨拶する處大に面白。行脚も旅慣ぬと兎角何處に往いても主人に苦勞を掛けると云ふて見る者の道の僧を接すること能はず。山僧當時若し鶴林たらば門を開き親しく面接せん。何が故ぞ。有時は拖泥帶水。灰頭土面に垂手せざれば他を見盡すこと能はざればなり。

### 六百六十七 徑山上堂佛法在正

舉。徑山上堂。佛法在正。不在乎盛。在正則鬼神莫測。其由在盛則鬼神能妬其福。五峯固是不爲其間。因甚終日區區地。擲子霜葉。岸頭雙扇。玉一聲清響。忽驚飛。

佛法在正。不在乎盛。五峯終日區區地。正乎盛乎。驀然蹉口。道得爺諱。瑞阜無福枯淡。區區役役。日夜走作也。無些子佛法。免得正與盛之間。畢竟如何。樂以忘憂。不知老之將至。這。是。是。是。虛堂親切の垂示。ちや兎角諸方は多衆鬧熱。寺門繁昌を望む。盛は則ち盛なりと雖も却つて眞實の佛法は折脚鉢内に野菜根を煮て喫して。日を過して。專一に己事を究明する底の處に在るなり。所謂依報の盛は正報の盛に及ばぬ。ちや徑山は正と盛の間に非すと云ふか。終日區區地は正に在るなり。并は且く置いて霜葉岸頭。蘆の枯れ葉に泊る。雙扇の露がたりの一。聲にちらりと驚ろき飛たは。正か盛か。這の擲拂子見る者。寡さちや山僧は正も盛も道の保社に入らず。何が故ぞ。趙王劍を好むに因て。閩國の人。刀を帶ふ。喫。

### 六百六十八 紫湖和尚示衆

舉。紫湖和尚示衆云。三十年來住紫湖。二時粥飯氣力粗。無事上山行一轉。借問時人會也無。虛堂拈云。紫湖年老心孤。東行西行。又問人道會不會。徑山崇崗峻嶺。列在面前。又值雪寒。但



未得去待春融也須一兩遭只是不問人會不會何故擊拂子水月以喻兮古來已多我今不  
然兮所陳伊何參

瑞阜也無紫湖氣力不做虛堂脫空奚敢要問人問會不會乎但夏秋之交越溪暴漲流失  
橋梁徒跣亂水深則揭淺則厲回顧同伴而道渡來渡來今也老矣無力于踏波幸免得爲  
黃樂所斬脛擊拂子老不將筋力爲禮咳

這は是れ紫胡と虚堂と角力ぢや紫胡は人に向つて會と不會を問ふも虚堂は然らず  
徑山は紫胡に似ずして崇崗峻嶺面前に列在して殊に大雪寒冷に値ふ八十の老僧經  
行巡遊に堪へず春色暖を催すに及べば紫胡に劣らず行くこと一兩遭すべし乃公は  
復た人の會するか會せざるかを問ふことはせぬ何が故ぞ拂子を撃つて水月の喻は  
佛祖も古來數々演說せられて珍らしくもないもう飽て居る乃公は爾うでない陳る  
所は伊れ何ぞと是れ什麼虚堂の奥の手は爰ぢや怎んなこと陳ふるな陳るものは是  
れ何んであらうか東山下の厝號令ぢや此等は教へることは能きぬ山僧も紫胡虚堂  
の境遇と同じく巖栖溪飲ぢや今は知音も無ければ火爐頭の話もない又鑿頭邊の事  
は圓頭の在るあり別に山に上り下りすることもない梅霖未だ晴を放たず處々の林  
崗子規四五聲を聞くのみ昨夜大雷雨電光閃々暗を照して山上山下の森羅萬象現前  
して明白盡の如し喝

六百六十九 虚堂上堂臨濟栽松

舉虚堂上堂云臨濟栽松老盧踏碓仰山畚粟地藏種田顯一段衲子家風作叢林千古標準  
二林到此因甚頭毛卓豎擊拂子曾經巴峽猿啼處鐵作心肝也斷腸

臨濟一棒一條痕三祖被斷半臂老盧隱于庾嶺百丈一日不作一日不食藥山牛欄裏坐  
禪疎山不免倒屣雲門跛脚也屢空下和泣而淚血碧咄咄愁人莫向愁人說說向愁人  
愁殺人

虚堂の親切はいつも肝に痛徹す此上堂乃ち爾うぢや古尊宿の風采は去れく異な  
れども皆叢林の標準と作りて千古の下人をして仰慕せしむ虚堂此に判つて甚とし  
て頭毛卓豎するぞ拂子を撃つて會て巴峽猿の啼く處を經れば鐵作の心肝もまた斷  
腸これく此句を道ひたさにぢや可嗟頭を縮却して古人樹下の居を歎するも爰ぢ  
やぞ

六百七十 息耕上堂猫有歎血之功



舉息耕上堂。猫有歃血之功。虎有起屍之德。爾衲子得恁麼沒碑記。南山起雲。北山下雨。則且置爲什麼。桃花能紅。李花能白。

古人云。昭王不回。君夫問諸水濱。水濱不答。問諸大塊。大塊不答。問諸造物。造物不道。問諸離休。離休不對。問諸罔象。罔象亦不答。應真無答乎。何故。猫有歃血之功。虎有起屍之德。試下得一轉語。則許。爾七尺單前。忘想。否則。老胡失望。

此上堂何處。が見どころありてか。猫は鼠血を嘸りて。餘瀝を遺さぬ。功を持て居る。虎は伏肉を食はぬ。人を殺すに屍を起して。自から衣を解かしむるの徳を持て居る。獨り衲子は是れと云ふ。記念に遺り。碑記すべきことが無くて。一分の功は立ちまい。南山に雲を起せば。北山は雨降る。這般の見解は。驢鳥の雛僧も知る。何が故ぞ。桃花は紅ひに。李花は白き。三世の諸佛も。亦知らぬ。ちや。知つた。と云ふは。知らぬ。と云ふ。とちや。虚堂和尚は一言申さん。餘り中韋の言を表面に。白濁なさらぬ。が好い。是れが山僧の別語ちや。

### 六百七十一 佛光上堂徧天涯

舉佛光上堂。走徧天涯。無下脚處。圓盡大藏。無開口處。行不及說。不到今年。勝去年。一老一不老。呵呵。呵呵。拍膝云。投子道底。

福山與麼說話。大似挾太山。以踰北海。相似。本來無插手脚處。行不及說。不到。而山僧今年。劣於去年。老年心孤。擇來折脚。踏外別無可取。而時不可失。何故。福不重受。禍不單行。世界中。走り廻りて。一と足も。地を踏まぬ。行不及ちや。一切藏經を。閱盡して。一と口も。開かぬ。說不到ちや。これが承當ならば。別に言ふことはない。時に鳥は甚に。因て。黒く。鷲は甚に。因て。白きを知つたら。今年は。去年より。有卦に入つて。芽出度い。年。老りも。あり。若年もある。面白。い。こと。ちや。何に。故に。面白。い。無學道底。咄々。餘り。秘する。と。嗅ぎ。著けた。がる。ものが。出る。ぞ。

### 六百七十二 南泉賣身

舉南泉示衆云。王老師賣身去也。還有入買麼。僧出云。某甲買泉云。不作貴。不作賤。備作麼。生買。僧無語。趙州云。來年與和尚。做一領布衫。虚堂拈云。南泉被著僧一拶。去死十分。趙州盡力。既無救處。只得助哀。

者箇公案。虚堂獨扶者。僧。而山僧。則憐南泉。泉也。欲賣身。而無買者。僧。欲買。而價未成。趙州布衫。非待來年。則不達。噫。王老師。進退維谷。誰能爲老師。出一臂。而助者。畢竟如何。等閑。扶起。則燎却面門。



南泉身を賣る一場の敗關ぢや、虚堂云く南泉箇の僧に一拶せられて去死十分なり、趙州力を盡せども既に救ふ處なし、只哀を助くるを得たり、是は則ち是なりと雖も可惜、許虚堂箇の僧を具眼者と見るが故に、此評あり、此僧無眼子、南泉何を渠の某甲買はんを、齒牙に掛けんや、但趙州の來年和尚の爲めに、一領の布衫を作らんとは、また些子に較れり、然れども是れも亦南泉の爲めに哀を助くると見なば、没交渉ぢや、山僧は南泉に對して云はん、御身は貴きこと金玉賤きこと泥土、寧ろ賣らざるを以て得策とす、斯の如きの外、多少の阿師種々の妄評、皆當らず、咄々。

### 六百七十三 曹山因僧問

舉曹山因僧問佛未出世時如何、山云、曹山不如僧云、出世後如何、山云、不如曹山、意耕拈云、曹山向針孔裏作活計、見黃面老子未盡、忽有人問育王、只向他道、漆桶少間浴佛、牢把杓子、佛出世不如曹山、黃面老子得曹山而吐生氣、曹山明頭打著、暗頭打不著、虚堂杓柄短不、遂佛頂、瑞阜忍俊不禁、爲老子雪冤、香湯洗佛、勸渠齊之以禮、咄。  
這は虚堂浴佛の上堂に拈せられた則ちや、故に曹山の這の話を引て以て證と爲す、佛未だ出世せざる時は如何、是れ正位に立て問ふ故に、曹山の答も亦然り到底もく曹

山は届くことで、無いの意なり、佛出世の後如何、山云く曹山に如かずと、是れ什麼此語で曹山を見よ、釋迦老子は曹山の憤擲揮擔ぎにも及ばぬと、面白い雲門の一棒打殺に、比すれば、數等下つての寛容ぢや、虚堂は之を見盡さずして、許さぬ畢竟虚堂の意、何れの處に在る、乃公は漆桶で這の赤兒に、熱湯を浴せるのぢや、暫時の間、た牢く杓子を把り離さぬ様にせよと、牢の一字洵に好い。

### 六百七十四 育王上堂纒問著盡道

舉育王上堂纒問著盡道、只是者箇及乎詰其端由、十箇有五雙、不知落處、育王抑下威光、爲備從頭解注、一徧良久云、好語不可說盡。

育王恐人不解、老婆親切、不覺落草、瑞阜即不然、好語可說盡、不說盡、則人疑之、雖然有一件秘密、然嗟口道著、爺諱何故、中華之言不可詳也、所可詳也、言之長也。

箇の上堂語路の練れ、鹽梅格別ぢや、兎角、禪僧は寄ると觸ると、直に云ふ者箇と、扱て其者箇は、怎ぢやと問詰すれば、十人は十人皆落處を知らず、育王は之が爲めに、解注一遍せん、良久して云く、好語說盡すべからずと、虚堂好箇の解注、山僧は其善盡すを知る、未だ美を盡すを知らず、瑞阜も亦道はん得の得は不得、不得の得は得と、解注一遍、虚堂底











か鐵牛が蟲に蛀れたとか咄食ひ抜け天下中駆け廻はつて什麼を爲す是れで佛光を拜め雲門底と見る勿れ。

### 六百八十 佛光初祖忌上堂

舉佛光初祖忌上堂阿師未來時眉毛安眼上阿師既來後鼻孔大頭垂山遙海濶木落霜飛  
鳴啣鳴啣以手搖曳云不許老胡會只許老胡知

佛光嶺新一句不許老胡會只許老胡知山僧即不然不許老胡會不許老胡知何故佛口蛇心

祖師未だ來らざる時天下太平祖師既に來つて後ち四海鼎沸鳴啣々々人の此意を知  
るなし我をして永く南泉を憶はしむる老胡の會を許さず只老胡の會を許すとは面  
白い嶺新の語句ぢや然れども斧鑿の痕を免がれず何が故ぞ猛虎は伏肉を喰はず獅  
子豈に鵬殘を食はんや

### 六百八十一 育王上堂拈杜順偈

舉育王上堂懷州牛喫禾益州馬腹脹天下覺醫人豕猪左膊上杜順和尚鵬臭布衫終竟難

脫育王眉毛觸碎須彌鼻孔飲乾大海更有一件長處逢人只是不說  
逢人只是不說殆乎抓著痒處而可惜許只是坐在乎者裏瑞卓即不然逢人則說不逢人  
則咄好句以不言爲是

道は杜順和尚法身の偈を評したぞ杜順未だ鵬臭布衫を脱せず悟り臭くて嫌ぢや育  
王は眉毛須彌を觸碎し鼻孔大海を飲乾すと杜順に倍蕪の鵬臭布衫臭向けもならぬ  
ぢや然れども更に一件の長處あり人に逢て只是れ説かず何如にも爾うであらう口  
を開かば恁麼なるを得ん虚堂は人に逢ふて説かぬを自慢さうに披露するか是れ至  
當の事なり人に逢はずとも説かれぬ若し説かれるものならば説いて看い

### 六百八十二 虚堂上堂吒吒呀呀如獅王

舉虚堂上堂吒吒呀呀如獅子兒我者裏也須勤備教教宰宰似探竿影草我者裏也須疑備  
雖然菽麥不分爭奈鹽落醬裏

水中鹽味色裏膠背固難相分爭如鹽落醬裏好語只是說盡去若無此語胡菽如缺辣明  
暗雙雙底時節非無虚堂雖然可惜許語忌十成

是れは虚堂學者を接する風采ぢや獅子の如き吼咆する者來たとて備を勘すべし萎

685

684



萎隨々底の埒の開かぬ者來たどて備を勘すべし勘辯するはするも菽麥不分明の者は中々手が著けられぬ何となれば醬油に鹽が落ちた様ぢや醬は鹽味あり其中に鹽が落ちたら怎んものか見分けがたい。

### 六百八十三 崇福結夏小參

舉崇福結夏小參青山綠水明月白雲滿眼滿耳無處迴避不格外玄機亦非世諦流布所以禪僧家意不停玄眼不掛戶潛行密用佛祖不識東倒西播魔外難測入林不動草入水不動波終日談而不說一語終日行而不移寸步如是安居如是禁足始無禁足底事便恁麼去未出常情且道畢竟如何行履雙拂子云不是梧桐樹風風誓不棲

圓通國師結夏垂示禪僧安居禁足底消息殷重盡矣然而若是風風兒不向那邊討文殊三處度夏底且置卽今箇箇掀倒圓覺伽藍趨翻般若稠林底衲子出來也具格外機用而始可得正當恁麼時作麼生接曰殺人劔曰活人刀

崇福結夏の小參老婆親切ぢや禪僧家意に玄を停めず眼を戸に掛けず底は潛行密用佛祖も識らす東倒西播魔外も測り難し然れども崇福面前に於ては猶ほ是れ未だ常情を出ですと崇福以爲らく禪僧行履底は然らず拂子を擊つて云く是れ梧桐樹にあ

らすんば風風は誓つて棲ます山僧は然らず若し眞の風風兒ならば那邊に向つて討ねず縱然ひ梧桐樹と雖も亦誓つて棲ます畢竟如何佛祖位中留ひれども住せず夜來菴に依て蘆花に宿す

### 六百八十四 崇福因雨上堂

舉崇福因雨上堂三日晴一日雨天平地平河滿井滿崇福只得有口喫飯何故如是佛法不

怕爛却 國師與麼語言三昧得入籬入細廡山僧曾有頌佛法不怕爛却雨洗風磨火灼眼裏色耳裏聲端的向那處索無處常逢伊欲擬向則錯錯

崇福は雨に因て上堂三日の晴に一日の雨ならば洵に好し又佛法は爛却を怕れぬと云ふか梅霖三十日雨歇まざるときは如何ん到處濕氣蒸騰して臭氣鼻を衝く佛法も般若も醜だらけで中々始末は付かぬ崇福は佛法の爛却を怕れずと云ふが瑞卓は雨の害甚しきを怕る

### 六百八十五 地藏種田博飯喫



舉地藏和尚問僧甚麼處來僧云南方藏云南方佛法如何僧云商量浩浩地藏云爭似我這裏種田博飯喫僧云爭奈三界何藏云喚什麼作三界大應拈云地藏阿師只解種田博飯喫佛法未夢見在崇福恁麼道意在於何今夜暑氣未退且待來日爲爾諸人說破

地藏和尚只種田博飯喫大應國師今夜暑熱待來日說二大老只解目前一機而佛法未夢見在若有人問向瑞卓佛法如何不是只口門窄滿口說未盡耳何故口是禍門地藏の田を種る飯に博へて喫す固より佛法は夢にも見ざるあり崇福は諸人の爲めに説破すと云ふ是れ即ち知つて故らに犯かす其罪尤も深し二大老漢直を拗して曲と爲し相共に祖田を蹂躪す早く今日あることを知らば何を當初を慎まざる然れども地藏の飯に刺あり崇福の舌に毒あるを知らば則ち一夏功を虚うせずと問ふべし

### 六百八十六 崇福中夏上堂

舉崇福中夏上堂荷葉團團菱角尖尖初僧一見便見一得永得雖然如是猶是半提須知有全提時節何故行到水窮處坐看雲起時

大應國師好笑好笑行到水窮處坐看雲起時猶是半提如何是向上全提時節今日暑熱待來日說

崇福中夏の上堂荷葉團々菱角尖々行ては到る水の窮まる處坐しては看る雲の起る時半提も全提もありはせぬ只是れ一色邊の事に過ぎず向上宗乘に至つては夢にも見ること能はざるべし何が故ぞ妙と説き立を談ず太平の姦賊棒を行し喝を下す亂世の英雄咄

### 六百八十七 育王解夏上堂

舉育王解夏上堂拈拄杖云所修行願所證法門一一具足因甚入夏已來不知米裏有蟲若下一轉語許爾破和合僧出佛身血不然卓拄杖誰知枯朽裏有此勦腸人

息耕老師愛子懸孫婆心忡忡雖然解夏今日人人打開布袋李店了張墩來秋雲秋水是我伴侶這裏誰管米裏有蟲何故焚燬踏鷄門

虛堂此上堂は頗る向上に拈弄したぞ一夏已來の行願法門具足すればそれで足りぬべしまだ意地の悪い例のが出たぞ何と云ふ米裏に蟲あるを知らざると吾這裏は蟲どころか沙までも一處に喫却す山僧は和合僧を破り佛身血を出すを好まず然れども虚堂道底出佛身血破和合僧好し一諾の下に承當して當分山僧關與することゝ爲す何となれば此事に就き大分議論多くして近日大會議を開き世界の輿論に訴へん



意氣卷きしつゝありどかや。

### 六百八十八 息耕上堂盡信書不如無書

舉息耕上堂盡信書不如無書。識得箇字。不如忘却箇字。九經諸子。徒爾藻飾。一大藏教。盡是藥方。分明對物。收稅何用。商量一葉扁舟。載大唐。

既是不立文字。而文字實載道之器也。息耕得語言三昧。而傳東山宗旨者。亦是文身句身也。或曰。會則滅。劫種族矣。

盡とく書を信せば。書無きに如かず。孟軻道底にして。而して息耕は。此に提唱したる者。は。大に仔細ありてなり。何となれば。箇字を識得するは。箇字を忘却するに如かず。書を信せぬでは無い。書に束縛せられざるなり。九經諸子は。九經諸子の精粹あり。一切經大藏も。亦藥方と雖も。之に依て。開悟の良縁を得る者あり。只是れ古人の関機境に。附て廻らざるを主とす。此上堂を見て。祖門の綱格を知るべし。文字を廢するに。非ずして。文字を立せず。教外に別傳の端的は。如何ん一葉の扁舟に。大唐を載す。是れ亦大字に。附て廻らざる様に。注意せよ。若し然らざれば。此句も。亦解會に墮在するぞ。咄。

### 六百八十九 息耕中秋上堂

舉息耕中秋上堂。舉一步則光吞萬象。措一毫則影落千江。爲什麼往往今宵。貪觀天上。擊拂子。只爲分明。極翻令所得。遲。

息耕老子擊拂子。又被風吹。別調中。慈地黑雲捲。疾電雷雨一場。狼藉好中秋。何處著咄。中秋觀月の上堂。息耕の一轉語を看よ。エヘンと云ふても。光り萬象を吞み。一毫を措ても。指かすとも。影千江に落つ。中秋の月有と云ふも。無と云ふも。既に是れ諱に觸る。然れども。往々今宵に至つて。仰いで天上を見るは何ぞや。拂子を擊つて。只是れ分明に。極むるが爲めに。翻つて所得をして。逆からしむ。翻て物は。斯んなものぢや。餘り近きに。過る故を却つて。迷ふ。觀面相對して。別物なし。月を見て。月を賞す。此の月に。彼是れの論を爲す。其の所證をして。遲疑せしむ。月盤貪觀する。と一箭西天を過ぐ。

### 六百九十 佛光無象至上堂

舉佛光上堂。無象西堂至云。白雲庵裏。太白峯前。有一句子。落在偏邊。無學老漢。也是窮曹司。檢舊案。十萬里水面。要尋此句。上窮碧落下黃泉。六七年內。方得見面。見則見了。不可得而。



說不可得而言。只得低頭觀地。仰面看天。冤憎會苦。黑蜜黃連。卓拄杖云。無象無象。尙餘骨面。堪承掌。不用重施肋下拳。

無象無象。今日再會無多子。冤憎會苦。黑蜜黃連。建長辣手。重新山僧。即不然。天外萬里。故人來訪。披瀝胸襟。而話舊情。握手歡晤。胡爲干戈。相酬雖然。詩得會人吟。酒逢知己飲。可惜許。不重施肋下拳。依舊老婆養兒咄。

無象西堂至。會て白雲に。太白に痛拳を喫したが。また其味を忘れぬと見ゆて。又得々東遊して。乃公に。建長に相見す。乃公も貧乏役人。舊臭い法律を流出して。十萬里の水烟を渡り。日本で此師家と仰がれて。此句を尋んとするに。上は三十三天に貫ぬき。下は黄泉に達し。大唐も日本も同じことぢや。今度六七年振り。に再會して。無象の面を見るを得たり。見たときは。了々相見ると然れども。不可得にして。説き不可得にして。言ふ只俯仰此の儘ぢや。乃公も嫌かぬものに出逢ふた。冤憎會苦ぢや。何せか。黑蜜黃連喰はれたもので。無い。卓拄杖。無象々々。尙は骨面を餘して。また乃公が打著するに。堪へたり。併しなから。知音ぢや。最早二度と乃公が肋下の拳を施し。打著すること。は爲さぬ。是れ什麼佛光も無象の再來を痛く喜ばれたぞ。全篇の垂示は。無象の象象にして。無象を顯はす。此様子を手に入れないければ。此上堂は見えぬぞ。

### 六百九十一 崇福解夏上堂

舉崇福解夏上堂。僧問。記得仰山語。香嚴云。如來禪許師兄會。祖師禪未夢見。在此意如何。師云。言中有響。僧云。如何。是如來禪師云。四十餘年。說不到。僧云。如何。是祖師禪師云。九年面壁。覩不破。僧云。如何。是和尙禪。師云。崑崙生鐵。僧便禮拜。

大應國師崑崙生鐵。吾這裏禪則不然。菽乳元來是豆腐。且如如來禪。四十九年說不到。祖師禪。九年面壁。覩不破。瑞阜云。如來禪難解。何者。四十九年。五千四十八卷。祖師禪易解。只是九年面壁。不立文字。且道。仰山以何許。如來禪於香嚴。而不許祖師禪。一人傳虛。萬人傳實。畢竟如何。從面赤不如語直。

如來禪と祖師禪と對照して。仰山は祖師禪を深く讚歎したことを箇の僧持ち出して。大應に尋ぬる。大應は言中に響ありと。如來禪祖師禪の事は。由來言説に出て。其中に響ある面白ことぢや。然りと雖も。乃公が眼から見ると。一字不説の如來禪と。九年面壁。穴覗きも能きぬ。祖師禪と別に大した相違はない。若し夫れ乃公の禪ならば。崑崙生鐵を嘯む。是れ什麼。是れに袴しを著けらるゝものか。講釋の限りではない。爰が傳來の些字ぢや。祖師禪如來禪の糟粕を嘗めて。居る者には。齒も立つまい。一回此鐵崑崙を咀嚼



して見よ

### 六百九十二 大應解夏上堂

舉大應解夏上堂云。杲杲明如日。漫漫黑似漆。夜半甚分明。天曉還不露。衲僧一夏聚頭接耳。東觀西觀。不透橫咬。豎咬。咬不破。忽然自恣。日到來。諸人合作麼。生崇福。未免重下注脚去。豎起拂子云。看看杲杲明。如日漫漫黑。如漆。

崇福與麼告報。大似將魚目作明珠。將橋皮作猛火。看來勞而無功。山僧也下注脚去。明暗雙雙底之句。只是諸人咬不破。忽然撞著初秋夏末。爲諸人如何賞勞。從前汗馬無人識。只

要重論蓋代功。是れは明暗雙々底の句子ぢや。杲々として明かなる日の如きかと思へば。漫々として黒きこと漆の如し。是れ什麼夜半の黒暗に甚だ分明天曉けて明かなる筈なるに還つて露はれぬ。是れ什麼正偏回互の様子が手に入らねば。領會することには能きぬぞ。解夏前も解夏後も自恣の日も同じことぢや。幾度繰り返へしても。杲々明日の如く。漫々黒漆の如し。擬議すれば。喪身失命するぢや。山僧は一句底いて歌はん。暗裏に火を失却し。天明けて牛を失却す。

### 六百九十三 佛光成道忌上堂

舉佛光成道忌上堂。老瞿曇何不撒指空說空。半生半滅。福山雖是兒孫。活計與他各別。鐵船打就。泛滄溟。麥浪堆中釣魚鼈。卓拄杖下座。

建長活計與瞿曇別。徒說麥浪堆中釣魚鼈。猶是瞿曇兒孫。山僧不使爺錢行舟上山。暗中藏燈。正眼看來。瞿曇說麤說細。太過豐富。福山至貧。至約。儉生不孝。瑞阜要致中和。何故禮之用和爲貴。

瞿曇の不撒なる空を將て空を説き。半生半滅は面白くない。素より成道と云ふ間違ひは。知れ切つたことぢや。佛光重ねて間違ひを生ず。滄溟に鐵船を泛べ。魚鼈を麥浪に釣る。別に變つた活計でもない。斯かる見易きことを大層に生活別ぢや。とは何事を。只是れ卓拄杖下座は。美事な。稍些子に較れり。是は瞿曇も見ることも能はざるべし。佛光も亦見ること能きぬ。山僧も不識ぢや。

### 六百九十四 大應建長入寺

舉大應建長入寺。祖師堂諸祖三昧。山僧不知。山僧三昧。諸祖不知。既是不相知。因甚特地灶。



香作禮。彼此出家兒。

既是各自不相識。炷香作禮。勞而無功。雖然。莫道不爲何用。有水皆含。月無山不帶雲。大應入寺上堂。諸祖の三昧。山僧知らず。爾うぢや。山僧の三昧。諸祖知らず。洵に然り。既に是れ相知らざるに。甚に因て。禮を用ひて。何の益ぞ。山僧は道はん。既に是れ相知らざる。が故に。特地に炷香作禮するぢや。若し相知つたならば。直饒ひ。彼此出家兒なるも。炷香作禮は無用ぢや。知らぬが好い。知つて堪つたものか。勞して功なきこと。を幾回繰り返へす處に。甘味があるぢや。是れは冷暖自知ぢや。云ふて聽かすことは。能きぬぞ。

### 六百九十五 大應涅槃忌上堂

舉。大應涅槃忌上堂。僧問。記得世尊臨入涅槃。以手摩胸。普告大衆云。汝等諦觀吾紫磨金色之身。瞻仰取足。莫令後悔。意旨如何。師云。未後慙。僧云。世尊又云。若謂吾滅度非吾弟子。若謂吾不滅度。亦非吾弟子。畢竟如何。委悉。師云。平生肝膽。向人傾。僧云。飲光來時。更出雙趺。是何心行。師云。恩大難酬。僧云。爭奈至今。骨節連皮。瘡暴露。春風百草頭。師云。狼藉不少。僧云。和尚如何。蓋覆伊。師云。一口吞却。乾坤向甚麼處。摸索。僧云。莫有別報恩底句麼。師云。報恩了也。僧便禮拜。師乃云。日暖風和。萬葉敗榮。釋迦老子。於此時節。百花發裏。藏得渾身。雖然如是。不

覺脚踏直至如今。收不得。惱亂春風。未休。

汝等比丘。諦觀吾紫磨金色之身。觀面相欺。謂吾滅度。非我弟子。吾不滅度。亦非我弟子。依稀松屈曲。彷彿石爛斑。飲光來時。更出雙趺。面皮厚三寸。爭奈至今。骨節連皮。瘡暴露。春風百草頭。花簇簇。錦簇簇。和尚如何。蓋覆伊。若不同牀臥。爭知被底穿。釋迦老子。靈龜曳尾。大應國師。藏頭露脚。兩個老漢。直到如今。收不得。擬欲遮滅。沒處安。年年二月六。不收。

世尊滅度の時。普く大衆に告げ。諦かに吾紫磨金色の身を觀て。瞻仰足るを取り。後悔せしむることなかれど。何を其言の懇重なる。然れども。此語言中に響あり。未後の毒氣。容易に扶起すべからず。了得の大應ぢや。看破して。未後慙。と云ふ。面白。若し吾が滅度と謂は。吾が弟子に非ず。大應は平生の肝膽。人に向つて傾むくと。更に至切なり。飲光來る時。雙趺を出すを。恩大にして。酬ひ難し。と山僧ならば。怪力亂神と云は。ん。爭奈骨節皮瘡。天に連るを。大應は狼藉。少なからずと云ふ。山僧ならば。虎は死して。皮を留むと云は。ん。畢竟世尊入滅。百花叢裏に。渾身を藏し得ず。又しても。豈に雷に。衆芳落盡するのみならん。庭樹今に至るまで。綠陰多し。擬藏せんと欲すれば。彌よ露はる。咄。

### 六百九十六 大應解夏上堂



舉大應解夏上堂三月安居。羶羊掛角。九夏自恣。猛虎出林。要行便行。凜凜神威。迥絕羅籠。要往則住。壁立千仞。誰敢近傍。雖然如是。以手拍禪牀云。總不出者裏。

拍禪牀云。因甚總不出者裏。果然雖然。可憐許。慈然。嗟口。觸忤爺。諱莫道。不出箇裏。老僧拂子。勃跳上三十三天。衝帝釋鼻孔。雖然一句作麼生道。不信請看。八月九月好風景。一聲兩聲。鴈聲清。

大應結夏の上堂ぢや。結は則ち官には針を容れず。解は則ち私しに車馬を通ず。解結は且らく置く。手を以て禪牀を拍つて云く。總に者裏を出せずと。是は則ち是と雖も。猶ほ是れ結底刀斬れども。入らざる的一句如何か。之を通せん。山僧は便ち道はん。信せずんば。只看よ。八九月紛々たる黄葉山川に満つ。

### 六百九十七 建長佛光忌上堂

舉建長佛光忌拈香云。提起破沙盆。滅却正法眼。踏翻真如境。抹過圓覺海。拶到巨福峯。頂直得白浪滔天。佛祖迴避無路。衲僧卒難近傍。莫謂而今。韶光晦跡。諱日斯臨。面目全露。堅起香云。見麼。見麼。燒一炷香。重他鼻孔。佛光禪師。真怪觸骨。

密庵破沙盆。傳于東海。佛光赫奕。大應派脈。雖異其臭味。一也。齊唱東山下。暗號令宗。風振興。佛光面目看香。一瓣炷香。熏不徹。莫道韶光晦跡。老僧舍利包天地。莫向空山拾死灰。這箇の佛光老把不住にして。到る處。狼藉少ならず。白雲影裏。母を養ふて。共住し。眞如の名刹。折脚錫を搥へ。太白に首座と爲りて。怪石を喝破し。巨福に席を董して。時宗を掉發して。胡軍を塵殺せしむ。其止まるや。佛祖も窺ふこと能はず。其行くや。鬼神も避るに路なし。大應他の韶光晦跡を。ふて。一炷他の鼻孔を。薰徹す。争余せん。涅にすれども。細ます。磨すれども。磨がす。這般の瞎禿。天上人間人の。憎みを受く。然れども。恩冤一炷の烟と爲りて。空山一時に。緑を染む。咄。

### 六百九十八 大應十一月半上堂

舉大應十一月半上堂。歸宗和尚時有僧辭。宗云。時寒途中。善爲拈云。歸宗年老。心孤。感懃送行。建長即不然。若有僧辭。只向他道去也。何故。家家門首透長安。

歸宗與建長同途。不同轍。若瑞阜。則道三又路口。逢風雪。錯會莫墮。龐老機。歸宗のは。且らく置き。建長は。苦舌親切。譬へば。杖に倚りて。馬に騎るが如し。顛蹶の處なしと雖も。傍觀の者。醜さを免かれず。山僧は。只是れ一隅を示す。若し三隅を以て。反ふせ。



さるものは、則ち一棒院を趁出さんのみ。

### 六百九十九 息耕除夜小參

舉息耕除夜小參。僧問禪和窮鬼子。朝思暮想得。得到結交頭。北禪烹露地白牛。雙林將何分。師云。金圈栗蓬。僧云。勝他北禪家風多矣。師云。作麼生吞。僧云。百難碎。師云。再犯不容。僧云。法昌又道。臘雪連天白。春風逼戶寒。師云。也在北禪背後。又手。僧云。和尚出他北禪一句子看。師云。黃金自有黃金價。僧云。也是買帽相頭。師云。備驗得恰好。

除夜依舊窮鬼子。朝思暮想。北禪烹牛事。既落風運矣。法昌臘雪春風。不直半文錢。虛堂胡說亂道。何等臭皮襪。看來既是臘月裏。扇子若有人問。斬新句子。作麼生於山僧。則不知所。以答。摩頂一回。自羞發絲霜。新喝一喝。一年又一年。

虛堂除夜の。小參に僧問ふ。北禪は露地の白牛を烹る。和尚何を分。師云。金剛。圓栗蓬。ちや。僧云。それならば。北禪より大分甘味で。ると。箇の僧無眼子では無い。一機を持って来た。然れども。虚堂に作麼生か。吞まんと。拶せられて。百難碎と云ふ。的に。逃れては。居らぬが。合頭語ちや。活機がない。其處で。師云。再犯容さす。もう承知能さぬ。箇の僧一と足踏み直した心算で。出たが。怎もならぬ。師に矢張り北禪の背後に附て。廻る。

と云はれた。僧又附て廻つて。和尚他の北禪の一句子を出て。看よ。師も好い。加減に。黄金は。自から黄金の價あり。北禪の價金とは。違ふぞ。僧云。亦是れ帽を買ふに。頭を相す。箇の僧。开りや。合頭では。ないかと。伶俐めかした。師云。虚堂も氣の長い。疾くに。棒の出る。處ちや。が。備驗し得て。恰かも好しと。まア其處らで。置くが。好い。善く。遣た。と。這箇の。語話。虚堂も。拖泥帶水。ちや。何を。本分の。草料を。與へ。さる。正眼に。看來れば。之乎者也。半文錢にも。直せず。山僧は。這の。保社に入らず。濁酒一杯。聊か。爰に。年を送る。ちや。

### 七百 臨濟五無間業

臨濟因僧問。如何是五無間業。師云。殺父害母。出佛身血。破和合僧。焚燒經像等。此是五無間業。云。如何是父。師云。無明是父。備一念心。求起滅。處不得。如響。應空。隨處。無事。名爲。殺父。云。如何是母。師云。貪愛爲母。備一念心。入欲界中。求其貪愛。唯見。諸法。空相。處處。無著名。爲。害母。云。如何是出佛身血。師云。備向。清淨法界中。無一念心。生解。便處。黑暗。是。出佛身血。云。如何是破和合僧。師云。備一念心。正。達。煩惱。結使。如空。無所。依。是。破和合僧。云。如何是焚燒經像。師云。見。因緣。空。心。空。法。空。一念。決定。斷。迥。然。無事。便是。焚燒。經像。大德。若。如是。達。得。免。被。他。凡。聖。名。礙。



評云。五無間業。出于楞伽經。臨濟拈出來。拔概抽釘。使人直入解脫大海。說去說來。一一分明。要但斥彼他。凡聖名礙。我是凡夫。他是聖人。自甘下劣。向空拳指上。生實解者。後面復云。道流莫取山僧說處。一期間。圖畫虚空。如彩畫像等。一齊掃蕩了無餘。備看千經萬論解得。他亦不取國王大臣。他亦不取。聰明智慧。他亦不取。唯要真正見解。正眼看來。金屑雖貴。入眼成翳。

是れは臨濟楞伽經の五無間業を假借して見性の當體を顯はす親切の垂詢なり無明を父とし貪愛を母とし無始以來展轉相續して來る一旦に大死一番して生死起滅の處を求むるに得ざるは是れ殺父又一念心の欲界の外境に於て貪愛を求むるに目一杯見ながら目に遮る者はない諸法の空相を見て處々に無著なるは是れ害母と名く此二を盡すと清淨法界の中に於て一念心の解を生ずるなく便ち處々黑暗なるを佛身血を出すど名く是れは向上の人の境界ぢや佛見も法見も盡し切つた當體ぢや一念心の解を生ずる無しとは無了知ぢや此無了知に於て眞實を辯せざる當體は大圓鏡智ぢや大圓鏡は明かるいと云ふに黒うして漆の如しぢや處々黑暗ぢや爰まで進まぬと見性も確かに無いぢや破和合偈は怎うぢや煩惱の結使とは五鈍使五利使ぢや是れが結合して心性を惱ます今其煩惱結使の寄合を破つて一枚の法華と爲

す能く結使を盡せば無間業なり之を破和合偈と名く焚燒經像は因縁空。心空。法空ぢや。因縁は掛り合で出來る本來空なり。我心空なるが故に法も亦空なり。佛見法見の二を立せざる。脱然として無事なるを之を名けて焚燒經像と云ふ。此五無間業を盡して法に達せるときは凡聖の名に碍へられざるを之を臨濟の五無間業と名く。此の如く達得すれば始めて看經の眼を具すと云ふぢや。然らざれば教迹に滯はりて永く出期あること無けん。教者猶ほ之を盡す。矧んや衲僧に於てをや。

### 七百一 息耕佛生日上堂

舉。息耕佛生日上堂。二千年前。天下太平。二千年後。風波競起。雲門雖有殺活之機。要且斷他命根不得。今朝佛法付在育王。未審如何施設。師云。惡水劈頭潑。僧云。何異諸方。師云。今日失利。僧云。只如目顧四方。意作麼生。師云。已落然燈後。僧云。怎麼則黃面老子。背地叫屈。師云。作麼。僧云。氣急殺人。師乃云。七步周行。猶勞髣髴。指天指地。不分明。是非既落傍人耳。洗到臘年也。不清。

雲門痛棒。要且斷他命根不得。息耕佛湯。要且不異于潑水於蛙面。從上諸祖。盡失利。瑞阜也。不免。漚沐恭敬。齊之以禮。要之斷不得。何故。野火燒不盡。春風吹又生。



息耕佛生會の上堂ぢや、雲門も能く遣つたが、要且つ他の命根を斷せぬ、それ故佛法乃公の手に付して、拂柄を乗る、乃公は怎するか見よ、小便を沸煎させて、頭上から浴せかけると、僧云く、開は諸方でも能くする、箇の僧の一搵も好いが、息耕云く、今日失利、是れ什麼、あゝ大に無調法しました、箇は容易に出る語ではない、面白い、且らく道へ四方を自願するを、息耕は然燈の後に落ちたと云ふ、何處を道ふたぞ、箇の僧それは餘り酷い、釋迦も陰で迷惑がらうと、師云く、作廢ぢや、僧云く、人を責殺す様な、虚堂ぢや、其結末は如何、七步周行も天を指し、地を指すも、共に是れ不是ぢや、最早や胡亂の評判は、末ゑの世まで、擲さ波つて、怎れ程清めても、取り戻すことは能きぬと、虚堂を見よ、釋迦様も斯う云はれては、價値も何にも有つたものか、然しながら、此處能く見徹せぬと、没交渉ぢや。

### 七百二 古德云五蘊山頭一段空

舉古德云、五蘊山頭一段空、同門出入不相逢、無量劫來賃屋住、到頭不識主人翁、佛光拈云、建長則不然、五蘊山頭一段空、同門出入不相逢、無量劫來賃屋住、回頭撞倒破燈籠、豈不見道、龍樓吹鳳曲、不示刈茅童、草拄杖下座。

東山下左邊底消息、佛光舉揚、斬新絕瑞、阜也、倣翠打二頌、五蘊山頭空、不空、日常瞑喜、互相逢、無量劫來賃屋住、暮四朝三、叱狙公。

古德の頌、是は則ち是と雖も、掉尾振はぬ、故に佛光指點して、別に製した、後ろへふり向いたれば、破れ燈籠を突き倒した、是れで東山下の宗旨が活きて來る、都て此東山下は、古來の法身邊在に、偏するを、活かし來て、事上に取扱ふ、風采が肝要ぢや、五祖始めて之を見出して、専ら此曲調を唱ふ、實に龍樓に、鳳曲を吹く、草刈の童子に示さず、縦ひ示した處が、解らぬ、それで向上の宗旨は、東山下で無ければ、盡さぬこと、知るべし。

### 七百三 馬祖即心即佛

舉僧問馬祖、如何是佛、祖云、即心是、虚堂云、馬大師一隻透心箭子、中者絕消息、今日看看、鋒稜盡矣。

馬祖即心是佛、一隻透心箭子、虚堂以爲鋒稜盡矣、殊不知鈍刀斬骨、勝於利刃、即心即佛の一箭實に鋒銳中るべからず、若し中つたならば、佛に成るか、地獄に墮るか、其消息はない、今日看看、鋒銳盡くと、虚堂の鋒稜は、今日山僧の手に盡きたり、高聲に唱へて云く、即心即佛。



七百四 佛光正旦上堂

舉佛光正旦上堂。獅子吼無畏說。衆魔不能壞真說。凍拆黃河九地裂。優曇華放千林雪。卓拄杖下座。

大小大建長。可惜許。若真說。直饒三面六臂也。摸索不著。三世諸佛。歷代列祖。亦倒退三千。

凍拆地裂。優曇華放也。何論那箇是真說。近日王令稍嚴。這箇的話。向上末後的話。盡したる者。で無くば容易に手に入らぬぞ。獅子吼無畏說。とは什麼衆魔。什麼として。真說を壞すること能はざる。這裏に至つて。一隻眼を具する者に。非ざれば。中々届かぬぞ。三四の凍黃河に拆きて。九地裂け。優曇華放く。千林の雪と。一應字面は見えるが。扱て之を講釋したら。何の屁でもないことぢや。斯かる真味を咀嚼して。語路の通ひ。按排を知るに。非ざれば。微細は知れぬぞ。

七百五 佛光上堂獨對春風

舉佛光上堂。獨對春風。立片時。闌干不覺晝陰移。東山下事堪惆悵。點點楊花作雪飛。

佛光國師起春風。承無常轉及東山下事。結楊花作雪飛。頌中有難提。掇句子。若見得透。則

許備罷參。雖然至東山下事。則山僧不識。聞梨何得會。

東山下の事。佛光も痛慮せらるゝが如何にも。此道今人棄て土の如しぢや。先づ此頌。一は春風に對して景色を詠めて居ること。片時爾うすると。徐々日影が闌干に上りて來るを見るに付ても。東山下の事が氣に掛る片々と。楊花の散りて雪の飛ぶ如くぢやと。至篇光陰の移りて。景物の變するに就て。惆悵の意を寫したか。中間一字子の穩かならざるあり。之を見付け出したらば。東山下の兒孫と稱するを得べし。何處に在るか能く看よ。

七百六 息耕上堂僧問玄沙

舉息耕上堂。僧問玄沙。因甚不出嶺。師云。認賊爲子。僧云。保壽因甚不渡河。師云。人離鄉賤。僧云。玄沙保壽千里同風。和尚爲甚肯一人不肯一人。師云。胡人飲乳。僧云。某甲今日自納敗闕。師云。魚腮鳥嘴。僧云。虛堂也須腦門著地。師云。老僧修行無力。師乃云。佛法混濫。無甚今日尋常苦口。只要諸人不受謾。萬一在罽毘裏。卒難得出。二林與麼告報。口是禍門。

者僧背脊後。鐵鏈橫提來。一齊欲粉碎。虛堂却逢道老僧。修行無力。果然納敗闕。虛堂亦莫道。口是禍門。招禍底告報。在那裏不見道麼。相罵饒。饒接嘴。相唾饒。饒潑水。



箇の問話底の僧妨げず奇特なることを然れども、虚堂を奈何すること能はず、虚堂袖裏の金鏈、箇僧の痛處を打破して、動著すること能はざらしめたり。玄沙の嶺を出でざる保壽の河を渡らざる箇の僧、他に思ふ處ありて、問ふものなるべし。然れども、箇の僧敗闕を納ると、自首する處、中々喰へぬ坊主ぢや、故に虚堂は魚腮鳥背と云はれたが、箇の僧、虚堂も亦面を上げさせぬと、鐵鏈を頭上より提げ放つたか、老僧修行力無しの一旬は、箇僧の犢鼻褌で奪得したり。嗚呼、面白、箇の僧、隨分の腕力ぢやが、尊に逢ふては、卑し、第二箭を放つを得ざるは、可惜、許後面、虚堂の提綱、惡知識を痛罵して遣さず、萬が一、邪師の説を受け、耳に入りたらば、永劫にも脱出を得難し、二林與廐の告報口は、是れ禍門と、是れ什麼、虚堂和尚の毒舌ぢや、只差し出口は、邪師の嫉忌を受ると見ば、没交渉斯ういふ場合に、虚堂の妙あり、倒れても沙を掘んで起つと云ふ、該ざあり、虚堂の用處不用意の處に在りて、刀を抜かずして、人を戶外に殺すの作あり。

### 七百七 息耕上堂有緊要

舉息耕上堂有緊要、儘儘颯在背脊後、無緊要時時拈在獨體前、如今合而爲一、謂之混融、無際且恁麼看、不然滴水寸絲酬債有日。

問王面前被乞飯錢、有日在焉、如今混融無際之徒、猶稻麻竹蕈、如油入麵、一回欲脫却、則請高著眼看、從於面赤、不如語直。

緊要事は高閣に置いて問はず、不緊要事は時々死人の穴へ押し込む、如今合して、一と爲す之を混融無際と謂ふ、混融無際、恁麼に見去らば、滴水寸絲も償ひ酬ゆるに足らず、故に緊要事は時々刻々、究め来り、究め去りて、須らく省發すべし、然らざれば、棺木裏に墮眼して、了期あること無けん、此輩身を復ふして、信施を償はざるべからずぢや。

### 七百八 佛光浴佛上堂

舉佛光浴佛上堂、毘藍園裏、尼連河畔、雖然洗得毛草、要且痒處、不曾抓著、不肯孫只拊背一下、待他轉腦回頭、却與連腮兩掌、更若如何、若何便與屏水便潑、卓拄杖云、狗不厭家貧、子不嫌母醜、

狗不擇家貧、子不嫌母醜、老瞿曇二千年後、逢著知音、雖然山僧、則不與建長、何故居下流、而訕上者、訶以爲直者、皆君子之所惡也。毘藍園は佛の生處ぢや、尼連河畔は佛の入滅處ぢや、生處も死處も、曾て頭から湯で洗ひ得と雖も、痒い處に手が抓著せぬぢや、其處で及ばずながら、乃公も釋迦の法孫ぢや。



で其背を拵つこと一下釋迦が回頭轉腦を待て却て腮を連け打ちに兩掌せん其上に如何々々と躊躇せば便ち水を屏て潑著せん卓拄杖云く其んな無作法なる人を敵いたり水を潑いだりするものが何に故狗は食ひさへすれば好い家の貧富には關せぬぢや子は乳さへ飲めば好い母の醜好に關せぬぢや唾呆され果てたる佛光かな驚るき入つた語ぢや是れでも圓覺開山時宗も厄介な人を日本に擔ぎ込だ哩

七百九 佛光結夏小參

舉佛光結夏小參圓覺伽藍前三後三平等性智開口取氣今日晴明日雨花自笑鳥自啼村南村北野水橫流谿東谿西雲烟出沒無知老翁也無煩惱可斷也無實相可證只是飽喫了飯伸脚打一覺睡起來摩挲兩眼脚道太虛與古鏡交參法身與草木齊長無適無莫樓頭浪宕苦不在地獄樂不在天上有時拊背乞錢有時伸手搔痒阿呵呵拍膝云誌公不是閑和尚建長結夏小參圓覺伽藍七通八達平等性智三面六臂奢儉相持把得住放行過而云誌公不是閑和尚五祖云我害痴山僧唯恐建長不閑和尚何故劉項元來不讀書佛光國師の結夏に就ての寐語ぢや能くも斯う唸つたものぢや圓覺伽藍は前三々後三々平等性智は口を開いて氣を取る咄何の事か解からん今日は晴明日は兩國師は

だ目が覺ぬ花は自から笑ひ鳥は啼く侍者よ盥に水を屏て和尚に進め村南村北野水横に流れ谿東谿西雲烟出沒あり好い景色ぢや醜茶一杯まいれ無智の老翁煩惱の斷すべき實相の證すべき無しはてな山僧は將に謂へり和尚は煩惱を斷じ實相を證すと只是れ飽まで飯を喫了し庫下が給せまい脚を伸して一覺睡を打す時々起て戲言を吐く起來兩眼を摩挲して却つて道ふ太虛と古鏡と交參し可愛一念と憎いと交參した法身と草木と齊長す釋迦と草木と身丈を比較す面白い適もなく莫もなし自然外道の類ぢや樓頭も浪宕庫裏も廊下も支離狼藉たり斯う爲つたら怖畏すべきものは無い地獄の苦も天上の樂も乃公には關せぬ或時は背を拵で錢を乞ひ伊勢乞食ぢや或時は手を伸して痒を搔く御勝手次第ぢや阿呵々膝を拍つて云く誌公は是れ閑和尚に非ず戲談ばかり吐く和尚かな斯く虚言を吐くも乃公も馬鹿では無いぢや是れ什麼佛光國師法螺を吹くを好い加減に止めさつしやれ圓覺寺を趁出されませど

七百十 南泉斬貓兒

舉大燈拈南泉斬貓兒頌云兩堂爭處南泉斷王老放時趙老收頭上草鞋多少重白雲流水



共悠悠

瑞阜試和云貓兒已死南泉手趙老歸來不易收爭奈草鞋頭上躍春風春水意悠悠  
南泉斬貓を龍寶國師頌出せられた珍らしい拈評ちや一二は兩堂の争を南泉が斷じ  
南泉が放つたを趙州が收めた此取捨の手段痛快ちや三四は南泉が趙州の歸りて草  
鞋を戴く處を白雲流水共に悠悠と頌して本則の大意を結ばれた雪竈が草鞋頭戴無  
人會歸到家山即便休と同工異曲ちや却つて國師の居る處を看るや否や參

七百十一 龍寶拈翠巖眉毛

舉龍寶拈翠巖眉毛頌云偷眼才開先下手眉毛生也月方明雲門關子萬重鎖直至如今絕  
夜行。

看○看○眉○毛○餘○幾○翠○巖○作○賊○太○分○明○雲○關○不○許○鷄○鳴○過○函○谷○霜○寒○絕○夜○行○  
偷眼才かに開いて先づ手を下すは保福の作賊人心虚を頌せられたぞ翠巖が眉毛在  
麼を拈じた當體を見て見ぬ顔して手を下して道ふた長慶の眉毛生なりとは八月十  
五夜蟲の行くさへ見えるより明かなと云ふことちや雲門の關字は一たび下したら  
萬重の鎖ちや中々開くものでない今日に至るまでも開かぬから夜行脱け路が能き

ぬ人跡が絶えてしまつた國師は關字に力を得たる故に自由なものちやこれ程にま  
で頌したものは寡ないぞ

七百十二 趙州大死底人

舉趙州問投子大死底人却活時如何子云不許夜行投明須到州云我早侯白渠更侯白佛  
光拈云投子老人外面如可觀光其中猶缺一著趙州老漢所得不償所失福山恁麼批判還  
有救處也無良久云波斯喫胡椒

從趙州問處觀則投子答處不奇以投子答處觀趙州猶缺一著在投我以木華則報之以  
瓊瑤非投永以爲好也一條拄杖子兩人扶而踴頭不免傍觀者醜瑞阜不做者般伎倆若

有人問大死底人却活時如何則答道瞎却與趙州投子有相見分麼看  
箇の趙州大死底の則是投子の答へ光前絶後ちや何處の奴ちや人の門内を夜行は許  
さぬ晝歩るけど云ふ趙州八尺を行すれば投子は其倍働らく其處で州云く我早く侯  
白盜みをすると思ふたれば備は更に其上の大盜侯黒ちやと是れまでは本則ちや佛  
光の批判を聞け投子は外面美事ちやがまだ届かぬ一と手があゝ趙州老漢勝つた様  
ちやが實は負けた取り戻しが能きぬ良久して云く波斯胡椒を喫す監五郎が款冬花



味○喰○を○食○た○と○是○れ○什○麼○此○等○の○則○は○洵○に○祇○子○の○命○根○を○奪○ふ○的○の○難○關○ぢ○や○要○は○趙○州○の○  
大○死○底○の○人○活○す○る○時○如○何○の○句○に○在○る○ぞ○爰○を○能○く○究○め○ざ○れ○ば○投○子○の○句○も○佛○光○の○批○判○  
も○見○えぬぞ。

### 七百十三 佛光爲北條貞時

舉佛光國師弘安八年六月廿四日北條貞時請讀龍祈雨讀後雷鳴雨至三日連注師讀云  
偉哉戴角擊頭觸處崩崖裂石蒼生久矣焦枯快奮一聲霹靂讀罷即時雷聲震地大雨隨至  
一連三日天下普潤和尚法力可謂過於古人耶師云痴人面前不可說夢進云龍是泥瓦合  
成龍是水墨畫底且道靈從何來聖從何起師云三祇大劫修無此閑消息進云某甲亦隨待  
和尚大地蒙恩某甲未沾法雨願師慈悲乞垂方便師云莫妄想僧禮拜

佛光國師威神力感於降雨連注之瑞者僧作家大似欲以隻手揮江河相似國師自點胸  
云痴人面前不可說夢又云三祇大劫修無此閑消息又云莫妄想果然失錢遭罪瑞阜也  
解注一返國師國師好語說得太妙驗他則得爭奈者僧何故龍蛇易辯祇子難瞞  
佛光國師祈雨水墨の畫龍に讀し罷で即時に雷聲地に震ひ大雨三日連注して天下普  
ぬく潤ふ僧あり問ふて云く和尚の法力古人に過れたりと謂ふべしと箇の僧箱手を

打ち掛け佛光を脇下に挟んで抛げ出す所存ぢやか然るに佛光は其手に落ちぬ敵一  
倍の働らきを以てして云く痴人面前夢を説くべからず已奴が様なる馬鹿物の前で  
は夢の話もならぬ雨も夢風も夢ぢや僧乃ち第二箭を放ち進で云く龍は是れ泥瓦合  
成龍は是れ水墨畫底且らく道へ靈何れより來り聖何れより起る師云く三祇大劫よ  
り修するも此閑消息なし其方の様な馬鹿を道ふ者は三祇百劫修行するもないぞと  
噫好い佛光國師ぢや東山下の向上宗旨を擧揚したるは爰ぢや第二人はあるまい是  
れに突衝ものはあるまい僧進で云く某甲未だ法雨に沾はず願くは慈悲方便を垂れ  
よ第三箭も亦在り然れども掉尾太はだ力なし惜い哉師云く莫妄想是れ什麼はてな  
是れでは牛の糞も成佛するぢや僧禮拜中々好い爰で愚圖々々道ふたら味喰つげる  
佛光も遷化前の答話光前絶後ぢや箇様の言句は實に龍も雨を降らさずには置けまい  
草木國土悉皆成佛するぢや師命頂禮すべきは圓覺開山國師ぢや

### 七百十四 虛堂拈德托鉢

舉虛堂上堂僧問德山托鉢歸方丈意旨云何師云貴賤賤僧云巖頭道者老漢未會未後  
句在又且如何師云關市裏打淨槌僧云德山問巖頭汝不肯老僧那頭密啓其意又作麼生



師云鬼搗穀佛跳墻僧云德山次日陞堂果與尋常不同頭撫掌云且喜老漢會末後句又作  
麼生師云刀瘡易沒惡語難消僧云作麼生是末後句師云備勘辯巖頭勤辯老僧僧云義烏  
紙貴一狀領過師云怪力亂神師乃云雕沙鏤金截鐵斬釘點向冷地裏臥何故太平時代不  
得鼓籠人家男女

德山托鉢歸方丈人從陳州來却往許州去巖頭道者老漢未會末後句在項王叱咤萬兵  
避走頭密啓其意讓讓藏身吞炭且喜老漢會末後句一人傳虛萬人傳實作麼生是末後  
句獅子身中蟲自食獅子肉這箇公案諸方商量活活地碧落碑多臆本明月夜光多逢接  
劍虛堂也拾鈴爲銀展轉東語西話信口亂道咄將此渾身生入黃泉

德山末後の句を虚堂は屢々拈評するが這般の批判格別面白い德山托鉢して方丈に  
歸るを貴く買て賤く買ると嗚呼好い堪らん味がする德山を見透した者で無くては  
出ぬ語ちや巖頭云く者の老漢未だ末後の句を會せずと云ふを開市裏に静槌を打す  
と甚だ不相應なることぢや末後の句這般の事かな是れ大に仔細あつてなるべし容  
易の看を爲してはならぬを巖頭密に其意を啓す師云く鬼搗穀佛跳墻と捏怪甚だし  
きを云ふ德山翌日上堂果して尋常と同じからず巖頭大笑して道く且喜すらくは老  
漢末後の句を會するを師云く刀瘡は沒し易く惡語は消し難しと名句ちや面白い巖

頭が老漢末後の句を會すと手を拍つて喜んだるを虚堂は惡語消し難しと云ふ何處  
を見て惡語となすか斯の鹽梅は自知せねば嬉しくない僧また作麼生か是れ末後の  
句と問ふたに師云く備巖頭を勘辯するか老僧を勘辯するかと愈よ出て愈よ奇なり  
斯んなことは五年十年の修行では到底臭ひも嗅げぬを僧云く義烏紙貴し一狀に領  
過す箇の僧爰で兜を脱いで降参した師云く怪力亂神と君子の語らざる所ぢやとな  
り此上堂頗る面白いが師の意を眞個に會する者に非ざれば解からんぞ

### 七百十五 息耕佛生日上堂

舉息耕佛生日上堂云黃面老子每日與諸人挨肩接踵未嘗少間何謂今辰入滅備若見得  
分曉恩歸有由不然佛殿裏自起自倒

從來共住不知名任運相將只麼行若謂今辰入滅則非吾弟子若道不入滅則彌天罪過  
畢竟如何我常住於此爲衆常說法

是れは涅槃忌の上堂ぢや世尊毎日諸人と影の相離れざるが如し觸向對面釋迦たら  
けぢや殊更に今辰入滅と謂はせぬ然れども世尊既に入滅せり爰に於て見得分明な  
らば報恩分あり若し然らざれば佛殿中で起つたり坐つたりするのと異ならず爰に



於て佛見法見を脱して、摩醯頂門の眼を具するに非ざれば、世尊を見ること能はざるなり。

### 七百十六 瑯琊和尚示衆

舉瑯琊和尚示衆云。有時一棒作漫天網。打俊鷹快鷄。有時一棒作布絲網。擺蝦蟇。有時一棒作金毛獅子。有時一棒作蝦蟆。蚯蚓。有僧問佛光此意如何。師云。赤脚毘絳。進云。敢問和尚如何。是一棒作漫天網。師云。我不可答者。話不得。進云。如何是一棒作布絲網。師云。且道與。備說答。備話。進云。如何是一棒作金毛獅子。師云。備不得。謗老僧。進云。如何是一棒作蝦蟆。蚯蚓。師云。添得一場愁。進云。此四棒中。那一棒最親。師云。高聲問。進云。和尚尋常。竹篋頭下。是打俊鷹快鷄。是擺蝦蟇。蝦蟆。師云。老僧不敢。辜負。闍梨。進云。今日長期已滿。鷹鷄。蝦蟆。如何。縑素師云。燈籠沿壁上天台。僧禮拜。

拈云。瑯琊四棒。最玄。最妙。佛光答話。逸出極奇。且道。是答四棒乎。抑亦拈却四棒也。這箇語話。所謂雲門曲調。而東山下。左邊底。擬向。則背。建長新定之機。有妙處焉。然而山僧沒伎倆。只是平常底。拾新汲。湖煎茶外。倚杖閑看雲去留。何故嗜異味者。必受異病。咄。

此解夏小參。是東山下。向上の曲調。ぢや。佛光語言三昧を得たる所より。自由に宗旨を拈

弄する働きを看よ。電閃星飛も亦雷ならず。僧が瑯琊の四棒を問ふたに。佛光は答へた。のか説いたのか。丸で瓢箪で鉢を抑へる様な處に。妙趣あり。僧問ふ如何か。一棒漫天の網と作す。師云く。我れ者の話に答へ得ずんば。あるべからず。是が漫天の網か。斯ういふ奇妙不思議。捏怪極まれる語は。誰から國師は傳へたぞ。説も毀も提掇することが能きぬ。僧一棒布絲の網と作すを問ふ。師云く。且く道へ。備が爲めに。説かんか。備が話に答へんか。と。愈よ出て。愈よ怪ぢや。僧又一棒。金毛の獅子と作すを問ふ。師云く。咄。己奴め。老僧を馬鹿にするなど。これが一棒。金毛の獅子か。へい。僧又蝦蟆。蚯蚓と作を問ふ。師云く。我不可答者。話不得の處で。既に了つたに。又乃公に。一場の愁ひを添え累ひを増さしむ。一回舉著すれば。一回新たに。愈よ出て。愈よ端倪すべからず。僧又四棒の中。那の一棒最も親しき。師云く。高聲に問へ。乃公は耳か。雙た馬鹿めもつと。聲を張り上げよ。と。呆れ果てた。驚ろき入つた。語ぢや。挨拶の仕様が無い箇の和尚様には。僧又問ふ。和尚竹篋下で。俊鷹快鷄を打つか。蝦を撫するか。蝦を撈するか。師云く。老僧敢て。闍梨に。辜負せず。是れも面白。乃公は問へば。答へる。問はねば。黙る。少しも其方に。逆らはぬ。と。此小參を見て。佛光の自由自在なる答話を。手に入れよ。大宗匠とは。外に無い。佛光圓滿常照國師ぢや。



七百十七 西天胡子沒鬚髭

舉佛光上堂。西天胡子沒鬚髭。楚鷄不是丹山鳳。會則聖毛刺海。不會則當處生芽。摘楊華摘楊華。卓拄杖云。釣絲絞水。熨斗煎茶。

胡子最。美鬚。趙州牌掛葫蘆。可憐船上謝老釣了。終不見魚。西天の胡子何が故ぞ鬚髭なき佛光語を著けて云く楚鷄は是れ丹山の鳳ならず胡子無鬚に此語怎して當たる下の語を見よ會すれば此處も彼處も一家ぢや會せざれば則ち到る處草だらけぢや摘楊華々々々歸去來もう用事は濟んだ愈よ用事が濟んだか卓拄杖云く釣絲で水を絞り熨斗で茶を煎すまだ箇様の用事がある是れが能さるか不能ことを無理にするが禪ぢやと會せざる者には幾回云ふても解らぬさらばさらば

七百十八 虛堂謝執事上堂

舉息耕謝執事上堂。僧問。東邊也有人。西邊也有人。中間作麼生。師云。一點黑如漆。僧云。且喜虛堂領話。師云。老僧從來柳下惠。僧云。忽有箇東西不辨南北不分底。還用他也無。師云。安得

不用僧云。用他作什麼。師云。拆東離補西障。僧云。可謂是了事。僧云。儼不得。插嘴。師乃云。阿逸多行道之日。他方化佛。悉來聚會。虛堂薄緣。道不及古。自吹自拍。隨分過時。所過從者皆非良輔。列文殊目。折普賢脛。碎維摩座。焚迦葉衣。如是流輩。難以親近。何也。只知克己。從人。不覺唇寒齒冷。

觀音在東邊。文殊侍西邊。瞿曇老倒打午眠。虛堂和尚有此福分。何憂唇寒齒冷。雖然拆東離補西障。區區役役。擲去拄來。不在那邊。而在今日。臨濟得普化。屋財蕩盡。南泉得趙州家。酬外揚。咄。風流不在著衣多。

虛堂執事を謝す。上堂ぢや。僧問。東西兩邊に人あり。中間は作麼生と箇の僧少しく機を合みて。虚堂を逼迫し來る。師云く。一點黑して漆の如し。是れ什麼。僧云く。嬉いことには虚堂も解かつたらしいと翻弄す。師云く。老僧從來柳下惠。乃公は好いにも。惡いにも。腹を立てぬ箇の布袋腹の太いこと見るべし。僧云く。忽ち東西南北分たざる底の僧來らば。如何と師云く。それは用ゆるとも。开んもの。を此方は望んで居る。僧云く。他を用ひて。什麼の用に御使ひになるな。師云く。左ればにや。東離を拆いて。西障を補ふ。袈裟を破つて。草履に作る。僧又托上して。貴方は了事の袈僧で。御座ると。師云く。勿論の事ぢや。其方等の拈しを挿さむことには無い。其處で云く。開山善慧行道の日に。他方の化佛來聚



したと云ふか、乃公は徳が無い故に謠ふも舞ふも自から吹き、自から拍つて時日を過す、併ながら乃公に従游する者は皆會中の良輔に非ず、文殊の目を刺り抜き、普賢の脛を折却し、維摩の座を破碎し、迦葉の衣を焚毀す中々手が付けられぬ、开れと云ふも乃公は己れに克ち人に従がふことを知つて、圖らざりき唇る寒く齒冷きを致したか、今は執を得た故る其憂はないとなり、這般の說話は、虚堂の風采ぢや、何處に本題があるか認められぬが問へば答へ問はざれば自から吹嘘して此自在なること盤上に珠を旋らすが如しぢや、嗚呼貴い垂示ぢや。

### 七百十九 虚堂佛涅槃上堂

舉虚堂佛涅槃上堂、靈鷲山頽、昆嵐風起、善類撫膺、出涕、魔軍頓足、歡喜愛之、欲其生惡之、欲其死、豈止乎二千年前而已、野外春風、花正都黃、爲枝上分明語。  
瞿曇當年把不住、徒使入天垂泣、魔軍歡喜、自點胸道、謂我滅度、非我弟子、謂我不滅度、又非我弟子、道什麼、是非已落傍人耳、洗到驢年、也不清誰道、究竟雙林側臥而死去、佛今在什麼處、看看十洲春盡、花凋殘、珊瑚枝、枝日杲杲。  
虚堂佛涅槃會の上堂ぢや、昆嵐の大風起ると須彌も碎けて、腐草の如くに飛ぶ、靈山釋

尊の入滅は、一切世間を破碎する如くぢや、之を愛する人、天善類は、怎うぞ世尊の在世を希むも、魔軍波旬は、足を頓て、釋迦の入滅を歡喜した、人情は今も古も同じことぢや、春風に花の美麗なるは、魔軍の喜ぶが如く、爲の枝に、嘲するは、人天の悲みに似たり、何處が涅槃の當體ぢや、智慧ある者は、來年知るべし。

### 七百二十 佛光開爐上堂

舉佛光開爐上堂、孤迥迥、峭巍、堂下草深一丈、灼然到者、方知霜空月冷、霜白、星稀、釣魚船上客、携手不同歸。  
瑞阜即不然、相逢上樓、携手共歸、同中無異、其中有同、孤迥迥、峭巍、鳥龜、何須剛證、作龍此の開爐上堂は、十分向上に拈せられたぞ、孤迥々、峭巍々、眼が霞む程高い、宗旨は高いが、貴い箇の氣高い、宗風を真正に舉揚すれば、法堂前草深き一丈ぢや、若し向下に舉揚し去らば、山門頭草生せざるも、然しながら、宗旨は高いが、好い其故は、到る者は皆知る、霜空しく、月冷かに、露白く、星稀れる、好い景色、知つた同士は、互に涼しいして、釣漁船上の漁人は、怎うするか、互に手を把り合ふて、同じ處へ歸らぬと、さア、怎うしたとぢや、折角同伴したに、同じく歸らずとは、何事ぢや、これが見えたらば、孤迥々、峭巍々は、掌



を。観。る。が。如。く。ち。や。大。抵。は。此。味。を。知。る。ま。い。

### 七百二十一 建長達磨忌上堂

舉建長達磨忌上堂霜飛大野黃葉窮邊大法所傳天無私蓋二千年事病在今朝願視大衆良久云欲報師恩以悟爲則

佛光老師亦病矣今朝疾革鳥之將死其鳴也悲人之將死其言也善欲報師恩以悟爲則道什麼此病何直止於毘耶離城老維摩耶瑞阜也有些子聊具蘋蘩之奠以薦祖翁與世禮毫末異是報恩乎酬怨乎苦瓠連根苦

此達磨忌上堂は二千年前病ひ今朝に在りと云ふが字眼ちや病氣やみは今朝の達磨に在るとさア達磨大師什麼の病か時は是れ十月の初五霜大野に飛び彼處も此處も木の葉片々これ達磨を見よ大法の所傳は私蓋なし廓然枉げ出してある往昔釋迦より始まつた病ひは傳へて今日の達磨に在るちや大衆を願視して良久して云く師恩を報せんと欲せば悟を以て則と爲せ佛光を見んと欲せば此語を玩味せよ悟を以て則とは何ぞや無字や隻手の語頭で換骨脱體して出て來れ若し然らざれば劍去りて入し

### 七百二十二 佛光上堂法身有病光

舉佛光上堂法身有三種病二種光一一透得許爾歸家穩坐召大衆云黃葉與赤葉齊飛萬木與崖石俱露無學老漢一場出醜爾等諸人作麼生與我相見良久卓拄杖云仁義盡從貧處斷世情多向有錢家

落葉隕霜枯木頽石無學老漢眼上添眉瑞阜之醜則異於是看看爪長指無力齒亡唇深

三種の病ひ二種の光り面白く乾峯では無い自家に透得して自家に穩坐せよ其處で佛光は什麼と道ふぞ大衆を召して看よく黄葉と赤葉と混交して片々と飛び木葉の散るに随つて崖も石も露はるゝ無學老漢いとい見苦しい醜體を其儘枉げ出した面白くことぢや其方等は乃公に何處で相見するを三種の病ひが二種の光りか斯ういふ向上の調は容易に見えぬが骨折りて境界が熟すれば自然に浮き出て來るを夫から佛光の轉變自在の妙は良久卓拄杖に在る什麼と道ふぞ貧乏なれば義理人情も絶えて無くなる富貴な處には兎角人が媚び諛らふて機嫌を取る面白くことぢや本則何處か肝腎ぢや一向取り留めのない様なが具眼者は一見雀躍して醍醐を飲む如



くちやそこまで漕ぎ著けよ。

七百二十三 息耕達磨忌拈香

舉息耕圓覺大師忌日拈香。渡江風倚。蘆梢碧。夜深金殿人相憶。此土西天。實不行。千古萬古。成狼藉。當良月。數五葉之辰。孰謂。韶其光。晦其跡。薰爐茗碗。想遺音。分明對面。不相識。熏爐茗碗。想遺音。分明對面。不相識。不相識。子細看。版齒生毛。眼不碧。來年又有新條在。莫道百花成。狼藉。熊耳埋骨。猶未冷。西歸失却一隻屐。武帝を接して機契はず。暗に江を渡りて蘆梢の碧を撼かす。夜深うして梁苑君王の相憶ふあり。事既に後れたり。然れども東土西天共に道行なはれずして。千歳の後ちに至るまで坐禪の辨道のと。狼藉を爲して。大に兒孫を累はす。加之ならず。毎年十月の五日に當りて。韶光晦跡の達磨翁は。燒香獻茶のと。重ねくの。厄介を掛けて。其遺蹤の音容を慕ひ。想はしむ。乃公も箇の翁の子孫ぢや。か今日分明に對面して。相識らず。咄箇什麼爰に於て。虛堂を看よ。不識の二字。眼ぢや。

七百二十四 佛光拈南泉一株花

舉陸亘大夫問南泉。豈法師也。奇怪解道。天地與我同根。萬物與我一體。泉召大夫云。時人見此一株花。如夢相似。佛光拈云。陸大夫有舒卷天地之手。爭奈活葬牡丹花。下南泉透出聲色之外。無奈被人按劍。

陸亘大夫。稱載而往。南泉垂藥而歸。昆弟各逞功能。而獨有家兄。徹骨寒泉也。中矣。何故紅粉易妝。端正女。無錢難作好兒郎。南泉一株花の評。殊に面白。斯う拈弄しなくて。は宗旨は活て來ぬ。陸亘大夫。大悟の功勳は。天地を舒卷する。手脚あるも。南泉に牡丹の花下に。活葬せられて。頭を出すこと。能はざらしむ。南泉聲色の外に。超出する。無功用の手段は。美事なれども。賞翫する者が。ない。簾外劍を按して。立つ所の知音が無いと。嗚呼。面白い。斯ういふ批判は。古今無類ぢや。佛光の擇法眼の高き。驚ろき入つたものぢや。

七百二十五 佛光臘八拈香

舉佛光臘八拈香。三祇路遠。萬德功沈。六年冷坐。海底摸針。借我手臂。拈香借備鼻孔。出氣。瞎驢滅却。正法眼。灼然不受。當來記。老胡多劫修行。積功累德。遂歸無功去。却出不孝子。生五逆孫。破家散宅。剛道不受。記別離。



然佛光。縱令手臂長。不能出老子圖。內何故法華經。佛授學無學人記。咄。  
三祇路遠。萬德功沈。沈沈。一字佛光。能拈。六年冷坐。大海の底に針一本を投じ  
て。探る様など。釋尊の修行は。涓滴の功も無い。と面白。いこと。ぢや。夫れで佛光の手臂を  
借つて。瞿曇の氣を吐かしむる。兒孫に臨濟の様なる。瞎驢が出て。正法眼を滅却した。故  
ろ。當來の授記。坏は無功。たよ。怎樣に。入釜しく。云ふても。开んな。虚妄の記。別は。此方は。御  
免を蒙むる。哩と。佛光を。爰で。看よ。

### 七百二十六 建長上堂普天匝地

舉建長上堂。普天匝地。凍雲交九。九陽生第一。交十二曲。關屏半掩。且看金風宿龍巢。  
瑞阜和云。閑窓睡起。看雲交占。夢由來不用交也。太奇。今谷。呱呱。鵲巢。被奪。作鳩巢。  
建長冬至の上堂ぢや。此處も彼處も。どんやりした。凍雲が封じて。一陽來復した。が何と  
なく。乃公は。曲り繞つた。屏風を。晝日中に。建て廻はし。沈と。屏風の繪に。鳳凰が。龍巢に。棲  
で。居るを。詠めて。居る。哩と。何處が。冬至。昔雲の。氣色ぢや。此等は。向上の。人の。境界ぢや。兼  
中。至を見ねば。爰處の様子は。手に入らぬぞ。

### 七百二十七 建長二月朔上堂

舉建長二月朔上堂。一月去了。又一月。杏花開後。梨花開。只知事。逐眼前。過不覺。老從頭上來。  
離四句絕百非。誰有餘。誰不足。莫把閑錢。補策。離風光。只在闌干曲。

風光如此。人不醉。參差。辜負。東園花。這箇唐人句。豈不見乎。句裏呈二機。吾者裏。倒行逆施。  
貪程。走作。何暇。復及乎。無常觀。二在業。風吹去。雖然。逢景。傷心。何故。向道。莫行。山下路。果然  
猿叫。斷腸聲。

年去り月來り。花開き花謝し。驢事未だ去らざるに。馬事到り。到頭白髮の翁となりた。四  
句を離るとか。百非を絶すとか。餘あるとか。不足するとか。省敷錢で。策離を。補ふ。龍居士  
の如き。貧乏世帯を。爲すとも。好い。其様に。狼狽して。閑機境に。攀ち。登らすとも。障子を。推  
せば。闌干の。側に。風景は。満ちて。在ると。是れ。什麼。建長の。十八番ぢや。斯ういふ處で。手を  
傷け。鋒を。犯さぬ。様に。せよ。

### 七百二十八 虚堂源長老至上堂

舉虚堂泉州崇福源長老到上堂。楊岐和尚道。縮却項暗嗟。吁。白雲則曰。大似臨嫁。醫瀝卒著。



手脚不辨五祖又道行不成步語低聲鼻孔依然空突兀以致圓悟虎丘應庵密庵松源連庵皆愛玉鏗金擅此家法莫有踏得此脈底卓拄杖龍蛇易辨衲子難瞞

楊岐縮却項暗嗟吁五祖鼻孔依然空突兀白雲臨嫁醫聖著手脚不辨踏得此脈底有麼圓悟以下諸祖擅此家法且道如何是東山下家法遠磨西歸失隻履鯉也死有棺無柳

泉州晉芝妙源長老は虚堂の嗣にして崇福に新命と爲る故に古人の事跡を引て獎勵せられた難有い上堂ちや楊岐の乍住は大破の上に七年も單丁で居た瓦破れ屋漏り寒中には牀の上に雪か眞珠を散す様に吹込て項を縮めて小さくなりて暗かに嗟呼せられしか翻然良久して云く不足は云へぬ古人は樹下に居つた又白雲乍住の砌りには丁度新婦の嫁に臨んで顔の癢を療治する様な手も脚も著けること能きぬ却つて其儘が好かつたに云ふ程の事であつた五祖も貧乏で其上病みつゝ歩行も能きぬ語も低聲鼻ばかりが突兀と高いと是れ皆古聖乍住の榜標ちや此様の忍び難き苦勞をした故る兒孫が孰れも愛玉鏗金の立派なものが出たぞ此楊岐已來省數の家法を踏得するものは妙源長老ちやぞ龍蛇は辯じ易い衲子は瞞し難しと是れ什麼此卓拄杖の一語容易に見えぬ妙源に云ふたか但しは虚堂自からが云ふたか參三十年

せよ

### 七百二十九 虚堂上堂朝朝相似

虚堂上堂朝朝相似日日一般見成受用千難萬難因思臨濟堂黄葉何似華亭把釣竿息耕老師塌薩阿勞我者裏則不然有路可登高也攀現成受用幾千難年年老大渾無力偷得忙中些子閑

此上堂何處が眼目か來る日もく朝な夕な同じことをして相變らず著衣喫飯見成受用千難萬難と何れが難い難い處は無いらしなから油断ならぬことあり因て思ふ臨濟が黄葉を掌したフーハ衲子が華亭で釣竿を把つたどさアブーム何處ちやく何處に虚堂は居るぞ參

### 七百三十 佛光法光寺殿三年忌上堂

舉佛光法光寺殿三年忌上堂人生七十者稀法光寺殿齒不滿四十成就功業却在七十歲人之上看他治國平定天下不見喜怒之色不見有誇街耀氣象此天下之人傑也自如弘安四年傍兵百萬在博多略不經意但每月請老僧與諸僧下語以法喜禪悅自樂後果佛天



響應家國貼然奇哉有此力量此亦佛法中再來人也佛說菩薩進修梵行復有菩薩或爲妻

子眷屬種種成就菩薩修諸梵行令其圓滿  
國師燦迦羅眼照四天下而爛爛光餘萬丈氣魄嶽嶽有須彌數百由旬之勢弘安中胡元  
方寇法光寺殿運籌於帷幄而坐定天下拔山扛鼎之力前後無比嗚呼人傑哉國師以爲  
菩薩愛國濟世成就佛事者誠哉佛光巍巍法光赫赫畢竟如何我之塔廟爲聽是故涌現  
其前爲作證明

此上堂實に佛光國師光前絶後の垂示ぢや講釋も何にも要ぬ立言浩蕩大海紫瀾の如  
し唯聖克く聖を知るはこれぢや國師曾て時宗と千佛會中に在りて共に種々梵行  
を修し主伴互に扶け今再來して吾が帝國に復た共に菩薩行を修す是れ希有の事ぢ  
や且く道へ弘安の役に時宗兵馬の大權を握り蓋世の大功を奏したり當時蒙古入寇  
百萬の虎狼博多に攻め來るも鼠一頭出たとも思はぬ洵に天下の人傑に非ざれば爲  
す能はざる所なり加之ならず毎月佛光を請じて諸僧と共に下詔し法喜禪悅を以て  
自から樂しむは孔明が軍中離樓に琴を彈する度胸と匹似して其豪雄なるは尋常に  
非ず伊勢の神風も吹き起りて敵艦を覆へし佛天の加護響應して國家を富岳の安さ  
に置く奇なる哉此大力量あるは佛法中再來の人なること明かなりと佛説を引て證

するは覺山大師時宗の未亡人乎華嚴經を書寫して三年忌の追薦を爲す上堂なるが  
故に將ち來りたるなり宛に角國師の力を用ひたる上堂にして與禪護國茲に於て其  
功を見るべし

### 七百三十一 虎堂謝瑞巖上堂

舉虎堂謝瑞巖和尚上堂有意待不來無心忽會面頂髮垂絲眼光如電說盡湖海風波論量  
柴米貴賤更有一處少人知擊拂子也是重安眼上眉

瑞巖來也元是家裏人相逢莫逆洞房深處頻說私情一處少人知借問虎堂眼上眉毛有  
幾莖麼

瑞巖は虎堂の知音ぢやそれ故に語味和らかなる綿の如し待てども光來が無か  
つたが心構へも浮かどして居つたら忽ち會面す此の二句で虎堂を看よ情緒の濃や  
かなる處を寫し得て觀るが如し扱て瑞巖和尚年齒も長邁て頂髮は絲を垂れて居る  
が相變はらず眼光は電の如く閃々と耀く邂逅の對面で世間時事の四方山の話も出  
世間寺院柴米の貴賤を論量するこれは知音同士は格別の者ぢや更に一處あり人の  
知ること少れなり中葺の言は詳かにすべからず詳かにすべき處なれども言の長け



ればなり。拂子を撃つてまた重ねて眼上の眉を安す。これ丈けが八重になると。是れ什麼。舊説に瑞巖來也か重ねて眼上の眉を安すと云ふも、山僧は取らず爰が虚堂の十八番ぢや。人々腕前で看よ。

### 七百三十二 虚堂冬夜小參

舉。虚堂冬夜小參。群陰剝盡一陽生。又見東山水上行。冷笑雲門多口老。却來日午打三更。若恁麼見得。皓老布衲不是不洗。無得替換。鏡清臥單不是不展。無者閑工夫。看古人九九百艱難難。難成得什麼。面背卓拄杖。一東二冬。又手當胸。

古人無閑工夫。至於身邊。皓老布衲。赫赤鏡清臥單。不展雖然。莫道皓老無得替換。鏡清不是不展。無者閑工夫。虚堂何迂也。眠食不是閑工夫。耶。坐作進退。不是閑工夫。耶。看來一東二冬。又手當胸。也是閑工夫。只有一處不閑工夫者。待香雲後二百十日。爲備道破去。

此上堂諸說大に見難し。然れども。要は卓拄杖一東二冬。又手當胸に在り。前面多少の工夫。古人の機縁を引證するも。只此末句に歸するのみ。冬至に群陰剝盡して。一陽生するに就て。因みに思ひ出されたるは。東山水上行の話ぢやが。やれ笑止しや。雲門多口の阿師。却來して見れば。日中に夜分の事を爲すと。若し恁麼に見得したられば。下面の皓老鏡

清の機縁も亦解し得べし。皓老の布衲は洗はぬでは無い。只一箇のみで掛け換へ無いからである。鏡清の臥單も展ぬでは無い。五月蠅からぢやして見れば。古人千辛萬苦して箇の什麼の面背を成し得たる。何を仕出したるぞ。一東二冬。又手當胸。是れ什麼。十一月の寒さは。手を出すことは能さぬ。ア爐火にでも對して助熱へい。

### 七百三十三 建長佛鑑忌拈香

舉。建長佛鑑禪師忌日拈香。師之禪我參不得。師之道我學不得。師之峻機我湊泊不得。良久擘胸云。一棒一條痕。一擲一掌血。一度思量一度愁。一回飲水一回噫。今朝遠忌。斯臨畢竟將何爲報。拈起香云。慈此一瓣兜樓也。有甜也有苦。有恩也有怨。屈屈先師靈骨。只者是不須重入蒼龍窟。

參佛鑑而不會禪。一棒一條痕。一擲一掌血。可惜許。遲八刻。一瓣兜樓。有苦有甜。怨恩雙薰。則且置。先師靈骨在什麼處。試拾一片來。畢竟如何。月高城影盡。霜重柳條疎。咳。無準の忌日。燒香ぢや。佛光も先師の恩を思ひ出しての格別骨を折つて拈弄せられたのぢや。佛鑑の眞蹟としても好い。佛鑑に參して參し得ず。佛鑑を學んで學び得ず。とは是れ什麼。師の峻機。我れ湊泊することを得ず。もう是れで好いに良久して胸を擘して



云く一棒一條の痕一掴一掌の血能くく佛鑑の氣に入つたと思へる一度思量一度愁ふ嬉しからう一回水を飲で一回噎ふ悲しからう今朝遠忌斯に臨む報恩の一瓣香何にも箇も封じ込めてある甜あり苦ありへい恩あり怨ありへい思へば苦々しい屈々先師の靈骨外に無い即ち是れぢや什麼ぞ怎か靈骨ぢやもう濟んだ未だある須かす重ねて蒼龍窟に入るを御丁寧な然れども今日建長の此香佛光の手を借りて佛鑑の鼻孔に氣を出さしめたり能くも焼いた此香

### 七百三十四 佛光結夏小參

舉佛光結夏小參云佛滅二千年比丘少慚愧箇箇說圓覺伽藍人人道平等性智大似望梅林止渴福山雖無長處不教諸人踏古人脚跡只要備得一寸破一寸得一尺破一尺鄭旗推倒張旗東壁打翻西壁蒜拈拄杖云有功無功莫使腹空蛇吞龜鼻虎咬大蟲會麼卓拄杖一下云髮從今日白華似去年紅  
臥龍不鑑死水有處無風浪起福山長處得寸破寸得尺破尺使人脫窠窟這裏何說長之與短棒打石人頭剝論實事畢竟如何處理有功無功都來是錯何故堂堂意氣走雷雲凜凜威風掬霜雪

佛在世は斯うでも無つたが滅後二千年末法の比丘は慚愧を知らぬ圓覺伽藍平等性智を説き二乘小果の窠窟に庇を居るて死水裏に枯寂を守る大に梅林を望んで渴を止むるに似たり乃公は何にも長處と云ふはない慙ういふ古人の窠窟に死在する者を救はんと欲するが能ぢや其處で一寸悟つたと云ふは一寸を破り一尺を會したと道は一尺を破らしむ是が乃公の功ぢや其處で菩薩の悲願を長養して從前の資惜せし悟を碎かしむるは乃公の長處ぢや鄭旗張旗を推倒するは上求菩提下化衆生の旗を立て向ふの自了聲聞の轍を踏碎くぢや都べて得たり顔して甘んじて死水裏に活計を營むものは打碎するぢや備が有功も無功も無い少しでも悟つたと云ふ空腹高心のもを此方は悉皆取り上げ奪ひ去りて毫も立てさせぬぢや蛇が龜鼻を呑み虎が大蟲を咬むとは是れ什麼講釋することは能きぬ愚圖々々すると月日の立つは早い花は去年と同一紅なるも人は今日髮は白くなつたさアく急げ油断大敵ぢや

### 七百三十五 黃檗斫羅漢脛

舉斷際禪師嘗與異僧游天台行數日值江漲不能濟植杖久之異僧以笠當舟登之浮去斷



際曰我早知汝定捶折汝脛乃快也異僧歎曰道人猛利非我所及虛堂拈云道人猛利難親近深笠中流險作家憶昔高人何處去夜深和月過平沙

斷際云我早知汝定捶折汝脛乃快也堪對暮雲歸未合遠山無限碧層層異僧歎曰道人猛利非我所及白雲鎖斷巖前石掛角羚羊不見蹤乃打一偈曰斷際吹毛鋒銳利高人履水如平地相呼相罵立烟沙深笠雲重無限量

道は面白機縁ぢや黄葉の機鋒峭峻を見るべし異僧笠を以て舟に當て之に登りて浮び去る黄葉云く我早く汝が與麼に捏怪なるを知らば必定汝が脛を捶折りて痛快を取りしならんにと是れ什麼恁麼云ふ處に妙味の有るを知らねばならぬ其處で異僧歎じて云く道人猛利なり我が及ぶ所に非すと了得に異僧も一見處あり爰が虚堂の賞翫する處ぢや道人猛利にして親近し難し其様は笠を滔々たる中流に深はして作家の黄葉を驗す憶ふ昔し高人何處に去る夜深ふして月に和して平沙を過ぐ此三四は又風に別調の中に吹かるぢや憶へば昔日の羅漢は何處に行かれたか定めて月夜に遙々と平沙を渡られたのであらうか扱ても懐かしい高人なる哉の意ぢや虚堂の廣大なる供養ぢや此の風流掬すべしぢや

### 七百三十六 息耕佛生日上堂

舉息耕佛生日上堂世尊初生下時分手指天地道天上天下唯我獨尊也是半夜拾得錫後來雲門大師道我當時若見一棒打殺與狗子喫貴圖天下太平獻佛不假香多南山今日要與黃面老子出氣卓拄杖云鳩羽落水魚鼈死

瑞阜即不然天上天下唯我獨尊咄吾王庫內無如是刀雲門道我當時若見一棒打殺與狗子喫貴圖天下太平劍刀雖利不斬無罪人息耕老師卓拄杖云鳩羽落水魚鼈死却是欲扶世尊失錢遭罪多少人逢著推不去挽不來何故生靈終不改鍊

佛生會の上堂は天上天下唯我獨尊が持ち切りの様ぢやが箇は虚堂の名劔を綾に操つて揮はれたるぞ其處でれう世尊は暗夜に金を拾ふたと思ふたに錫であつたさア何處を見て斯ういふたぞ獨り歡喜して人の證明を與ふるなし杯と云ふ邪解では屆かぬ又雲門の一棒打殺を虚堂は佛に獻するに香の多きを假らすと云ふ面白いてどぢや雲門の手許を見透かした處から出た語ぢや箇の鹽梅云ふに云へぬ場がある今日乃公が世尊の爲めに屈を雪ぎ氣を出さしめんと卓拄杖云く鳩羽水に落ちて魚鼈死す講釋はならぬ世尊の毒氣ぢやのと邪解す皆不可ぬ开んなことで怎うして虚



堂を看ることが能き様ぞ。

### 七百三十七 息耕中夏上堂

舉息耕中夏上堂。卓拄杖。盤底沙。魁足七日。尙自不知。四祖大師六十年。脇不著席。何曾會去。見前龍象。前四十五日。既已放過。後四十五日。又作麼生。忽有箇眼。皮綻底出來。道乞師賞勞。只向他道。三貫視錢。三味食。相招。携手上高臺。

前四十五日。打著。後四十五日。打不著。中間今日。底如何。息耕老人。賞勞視錢。相携上臺。無限供養。若有人向山僧問。後四十五日。賞勞。則答道。先封雍齒。

此中夏上堂は。初めの卓拄杖を篤と眼を著けよ。此から皆出て来る。底沙佛を識して。七日足を翹つるも。尙は自から知らず。何せ知らぬか。四祖の六十年。脇に著けざるも。何ぞ曾て會し去らん。何せ會せぬか。尙自不知。何曾會去の八字。眼を著けよ。山僧は毘婆尸佛。久しく心を留む。今に至るまで。妙を得ずと。下語せん。不得妙の三字は。悟後益す。究めて。益す。參せよ。斯ういふ處に。宗旨の甘味は。あるを。爾うして。虎堂秘奥の手は。三貫の襪。錢三味の食。相招いて。手を携へて。高臺に上る。呼々好い景色。ぢや。まア一杯と云ふ處ぢや。此味を咀嚼せねばならぬ。山僧は。苦茶一杯。聊か九夏の賞勞に。充つと云はん。

### 七百三十八 五祖皮栲栳禪

舉五祖演和尚道。我者裏是皮栲栳。從虚空撲下來也。跳幾跳。不比諸方。琉璃毘子。禪。息耕拈云。五祖老手。舊乾膊。淨慈鷄皮鼓子。不勞重擊。有般漢。便道。虎堂年老。心孤。殊不知。富嫌。口少。貧恨。一身多。

臨濟之禪。迄至五祖。用韶陽之機。而宗風復新。謂之東山下。左邊底。如皮可漏子。撲將下來。不破壞。息耕亦用此機。暗號。令符使人看。焉。晴。乾。開。雨。路。無事。設。曹。司。者。矣。

是れ東山下の宗風ぢや。五祖の禪は。活潑にして。手堅い。柳行李の様など。中に物を納れて。高山の上より。撲ち下し来るに。幾回跳りても。破壊せぬ。諸方の禪は。琉璃瓶裏に。糍糕を搗くと相似たり。動轉觸著すれば。則ち破る。皮栲栳の禪が好いか。琉璃瓶の禪が好いか。息耕の拈弄を見よ。五祖は。老手事々に。經て。練熟。舊乾膊は。手丈夫。堅固の事ぢや。乃公は。鷄皮鼓子の見榮は。好いが。二度と撃つことが。能きぬ。夫れで。諸方の評は。虎堂も。年老ひて。根性が。僻んで。來たと云ふが。爾うで。無い。富貴の時。は。千人暮しても。まだ。少ないが。貧乏になると。吾身一つが。持ち兼ねる。是れ。什麼。皮栲栳か。琉璃瓶か。甄別して。看よ。



父の秘訣や爺の頭を打つ拳が緊い兒でなくては役に立たぬ然れども佛光云く雪峯玄沙を見た眼で乃公を見んと要せば猶は十萬億土の隔てがあるど佛光の面を見よこれこそ時宗の歸依僧ぢや

七百四十一 圓覺臘八上堂

舉圓覺臘八上堂。老瞿曇見地不親却道。觀明星悟道正是人貧智短馬瘦毛長兔頭截角龜背刮毛累及後代兒孫出頭不得山悠悠水悠悠冤深難報恩大難酬未上輪他這一等擲下拄杖。

圓覺老師一半報恩一半酬冤却較些子未上輪他這一等可惜許賊過後張弓若是眼卓朔耳卓朔底漢不喫此餓飯何故獅子不食鷓鴣殘快鷹不打死兔

また出た佛光打爺の拳ぢや什麼と道ふぞ老瞿曇見地親しからず眞實に悟つて無い左るにも拘はらず却つて明星を觀て悟道とは什麼事ぞ丁度人が貧乏すると好い智慧は出て來ぬ六年も雪山で一麻一麥苦勞したから瘦馬の毛ばかり長い様で見苦し開れに馬鹿な兎の角を截うとしたり龜の背に無いもせぬ毛を刮らうとする悟りが眞實で無いからぢや加之後人の兒孫まで厄介を掛けて累はす乃公も浦耻かしく

て世間へ面出しも能さぬ何と云ふても今は及ばぬ山見ても水見てもいつまで限りは無い此悪い老爺の共に天を戴かぬ程の怨讎をまた報せぬ此大悲海山の御恩は涓滴も酬ひぬ夫れも其管ぢや證文の出し遅れぢや乃公が惜いこと當時其處に居らなんだから末上の一箒を遣したは殘念ぢやが詮方無い呼々拄杖を擲下してゑゑい。是れ什麼面白上堂ぢやいかな虛堂も之を見たら舌卷くであらう。

七百四十二 圓覺上堂三世諸佛

舉圓覺上堂三世諸佛弄眞成假六代祖師變賊考賊賊天上無彌勒地下無彌勒卓拄杖。圓覺老師與麼告報是則是雖然吾這裏窮陰切迫直饒彌勒來也苦茶亦不令喫何故頭上雖知老將至目前奈此事多何

三世諸佛は本と一法の説へき無きに頓漸秘密半滿權實のと眞物を衒弄して眞物を製造した六代の祖師は賊を變じて賊を打すまだ是れでは足らぬ有り切り出せくど人々の惡想妄想を奪去り悟りを奪ひ迷ひを奪ふ佛と云ひ祖と云ひ賊々天上に彌勒なく地下に彌勒なし卓拄杖是れ什麼爰で佛光を拜せよ斯ういふ處に於ていつも佛光の爲人慈悲が格別に厚い他師の及ぶ處で無い此等の上堂を講釋聞かねばなら



七百三十九 建長中夏上堂

舉建長中夏上堂無量劫來頑惡牛。一般頭角實難收。諸人等是施功力。收取難收這一頭。此牛獲得始奇哉。鐵壁銀山盡觸開。更參無學玄玄路。別有癡癡待汝來。春野意悠哉。天門虛豁開。不須教喫草。行樂獨還來。又云。一頭頑惡牛。牧去意寧謐。物我共相忘。動容毋固必。

建長中夏上堂。牧牛二首。是進修の階級を叙したる。上の尤韻の一首は頑牛を牧せんとするに功を施し力を用ゆるも中々容易に馴養すること難いと次の灰韻は既に此牛を獲得して見た當體は奇妙なものぢや如何なる鐵壁銀山も千百億の須彌山も盡とく觸開す是れで見牛の一段は手に入つたがまだ最後向上の一路がある。開は乃公が東山下の暗號令の宗旨に參せねばならぬ。左すれば癡癡香ばしき草を食はして汝を待ち受るを此香草は山僧の手にもある。然しながら食ひに来る牛が無いで牧場の埒も關して舍くぞ。

七百四十 雪峯上堂要會此事

舉雪峯上堂云要會此事。如古鏡當臺。胡來胡現。漢來漢現。玄沙云。明鏡來時如何。峯云。胡漢俱隱。沙云。這老漢脚跟未點地。在。福山拈云。曾郎向古鏡裏。藏身。謝郎向明鏡外。出手。父有迷子之訣。子有打爺之拳。雖然要見。福山猶隔關在。

只是一面古鏡。峯云。胡漢俱隱。沙云。這老漢脚跟未點地。在。更至福山道猶隔關在。好笑。笑三人證。鳥龜剛作籠。只務滅却雪峯門。風而日亦爲不足。咄。瑞阜不忍助。桀爲虐。切齒扼腕。意馳氣旺。欲著手而不能。何故轉急轉遲。

此の一則是實に難透ぢや。是は雪峯下の風采ぢや。爰等を取り憚む手腕が無いと滅胡種族ぢや。先づ雪峯の初問に參せよ。此事は古鏡の臺に當つて。胡漢來り現するが如く。十界六道皆面を現込む。玄沙云く。開んなら。明鏡に逢ふた時は。怎うして。ムる峯云く。胡漢俱に隠れて。影像も現せぬと。此場が大事ぢや。胡漢來現の處が俱隱とは。怎うぢや。沙云く。這の老漢脚跟未だ地に點せざるあり。此の老爺まだ脚跟浮いて。地に付かぬと。是れ什麼師家に對して。毀つた様ぢやが。此語が見えぬと。峯の語も合點往かぬぞ。其處で佛光拈じて云く。曾郎。雪峯は古鏡裏に向つて。身を現するぢやない。身を藏すとは。怎うぢや。謝郎。玄沙は明鏡中に。手を下すと云ひさうな處が。明鏡外に向つて。手を出すとは。怎うぢや。恁麼處で。少しでも國諱に觸れたら。手を傷くぞ。兒を迷はして。狼狽させるは。



父の秘訣や爺の頭を打つ拳が緊い兒でなくは役に立たぬ然れども佛光云く雪峯玄沙を見たり眼で乃公を見んと要せば猶ほ十萬億土の隔てがある佛光の面を見よこれこそ時宗の歸依僧ぢや

七百四十一 圓覺臘八上堂

舉圓覺臘八上堂老瞿曇見地不親却道親明星悟道正是人貧智短馬瘦毛長兔頭截角龜背刮毛累及後代兒孫出頭不得山悠悠水悠悠冤深難報恩大難酬末上輸他這一籌擲下拄杖

圓覺老師一半報恩一半酬冤却較些子末上輸他這一籌可惜許賊過後張弓若是眼卓湖耳卓湖底淡不喫此餛飩飯何故獅子不浴鴈殘快鷹不打死兔

また出た佛光打爺の拳ぢや什麼と道ふぞ老瞿曇見地親しからず眞實に悟つて無い左るにも拘はらず却つて明星を親て悟道とは什麼事ぞ下度人が貧乏するど好い智慧は出て來ぬ六年も雪山で一麻一麥苦勞したから瘦馬の毛ばかり長い様で見苦しう開れに馬鹿な兎の角を截うとしたり龜の背に無いもせぬ毛を刮らうとする悟りが眞實で無いからぢや加之後人の兒孫まで厄介を掛けて累はす乃公も浦耻かしく

て世間へ面出しも能さぬ何と云ふても今は及ばぬ山見ても水見てもいつまで限りは無い此悪い老爺の共に天を戴かぬ程の怨讎をまだ報せぬ此大慈悲海山の御恩は涓滴も酬ひぬ夫れも其筈ぢや證文の出し遅れぢや乃公が惜いこと當時其處に居らなんだから末上の一籌を遣したは残念ぢやが詮方無い呼々拄杖を擲下してゑゑい是れ什麼面白の上堂ぢやいかな虚堂も之を見たら舌巻くであらう

七百四十二 圓覺上堂三世諸佛

舉圓覺上堂三世諸佛弄眞成假六代祖師變賊考賊賊賊天上無彌勒地下無彌勒卓拄杖圓覺老師與麼告報是則是雖然吾這裏窮陰切迫直饒彌勒來也苦茶亦不令喫何故頭上雖知老將至目前奈此事多何

三世諸佛は本と一法の説へき無さに頓秘密半滿權實のど眞物を弄弄して眞物を製造した六代の祖師は賊を變じて賊を打すまだ是れでは足らぬ有り切り出せど人々の惡想妄想を奪去り悟りを奪ひ迷ひを奪ふ佛と云ひ祖と云ひ賊々天上に彌勒なく地下に彌勒なし卓拄杖是れ什麼爰で佛光を拜せよ斯ういふ處に於ていつも佛光の爲人慈悲が格別に厚い他師の及ぶ處で無い此等の上堂を講釋聞かねばなら



ぬ様では無功々々、講釋した處が解りませぬ。

### 七百四十三 佛光上堂一是一二是一

舉。圓覺上堂。一是一。二是二。公案甚分明。衲子無慚愧。良久云。獼猴食毛蟲。波斯入鬧市。圓覺老婆親切。我者裏無這般閑消息。只要打算合帳。雖然何故。一道一二呼。二。一を二と云ふものも無ければ。天は天地は地で。本來分明して居る。开れに解らぬ。見えぬ。洵に馬鹿々々しい。無慚愧。漢ちや良久して云く。獼猴毛蟲を食ひ。波斯鬧市に入る。面白い。斯ういふ處が手に入らぬ。上の文は見えぬ。ちや。猿に栗ならば喜ぶが。毛蟲を口に。入れたらば。怎んな顔するか。日本語を解せざる。毛唐人が。日本橋の真中で。迷ひ子に爲つたら。怎うするか。兩耳。雙の如く。口。腔の如く。ちや。學道一回。此場を踏み。拔ぬ。と。嶮に手を撒して。絶後に。甦へるで。なくては。一は何故に。二と云ひ。二は何故に。二と云ふこと。分明に行けぬぞ。

### 七百四十四 南山上堂丁寧損君德

舉。南山上堂。丁寧損君德。無言真。有功。任從滄海變。終不爲君通。好笑。好笑。得恁麼。入泥入水。

南山口似椀盤。諸人也須薦取。

南山口似椀盤。諸人也須薦取。默然勝有言。雷門誇布鼓。何及李將軍。藍田射石虎。

此の上堂。古人の尙頌を拈じたぞ。虚堂の意は。黙つた處で。薦取せよと云ふこと。らししが。全體。丁寧は。悪いでは無いが。好語。説き盡すと。人に。輕侮を受る。無言ばかりでは。行けぬ。言ふべきは。言ふが可い。直饒。ひ。滄田。海と爲る。變が有つても。君が爲めに。消息を通せぬ。點滴も。施さぬと云ふは。古人の意。ちや。虚堂は。之を以て。やれ。好笑。や。古德。餘りに。泥水に入り。過る。穢い。乃公は。口椀盤に似て。黙つて。居る。此處で。諸人。薦取せよと。口椀盤に似て。黙つた處。容易に。扶起すること。は。ならぬ。觸著すれば。火星。飛ぶ。ちや。這箇の。語。話。等閑に。扶起せんとすれば。失錢。遭罪。ちや。山僧は。諸人。須らく。薦取せよの。句に。依て。頌し出した。また。別に。見る所。ありて。ちや。都て。宗旨の。要領は。皆人々の。力に。應じて。大小。其。譽を。異にする。ちや。具眼の。士は。輕忽にする。勿れ。

### 七百四十五 虚堂至節小參

舉。虚堂至節小參。今年寒勝似去年寒。去年無冰。去年寒勝似今年寒。今年有雪。去年寒十一月十二日。是書雲之日。今年寒十一月二十四日。是至節之朝。候候不相。讀物。物遠對。偶。衲僧。



家有有不被二十四氣之所推遷者水邊林底捫虱負喧有不被二十四氣之所管帶者拋

家失業久歷風埃還有不關造化底麼擊拂子陽氣未回吹律管野梅先發向南枝

入息不居繚界出息不涉萬緣常轉如是經不關造化底是衲僧家常茶飯豈不道乎空劫

威音王外別有盡中天

此の小參は虚堂室内に於て造化に關からざる底の衲子ありや否を驗するぢや之が  
主要と爲りて前文に去年と今年の相違を述べ二十四氣の推遷を被らざる者と二十  
四氣の管帶を被らざる者とを述べ去るも皆是れ枕詞ぢや要は造化に關からざる底  
の一句子にあるぢや如何か是れ造化に關せざる底の消息なる野梅先發く向南の枝

### 七百四十六 洞山路逢白兔

舉洞山與密師伯路逢白兔密云大似白衣拜相洞山積代管纓暫時落魄圓覺拈云密師伯  
從貧入富老洞山從富入貧總是依草附木若是山僧則不然豈不見道如蓮華不著水清淨  
過於彼咄說得道理好歸依佛法僧

圓覺老師云如蓮華不著水說得大好山僧則不然叱叱這畜生備有手不能採備有脚不  
能立備兩耳長而不堪翻筋斗咄這畜生發菩提心

此小參は佛光超然として古人の上に出づ密師伯と洞山と道ひ得るは則ち道ひ得た  
り而して要するに二師の所見皆白兔に附て廻はる佛光蓮華の喩へは即せざるが如  
くにして而して離れず雜と見たらば此の微細は知れぬぞ清淨なること彼に過ぎた  
り胸中一絲を掛けざれば皆此の通りぢや而して山僧は如是畜生發菩提心と云ふ知  
らず從上古人の所説と相去ること幾許を試みに甄別して看よ

### 七百四十七 鹿山上堂老牛挽車行

舉鹿山上堂老牛挽車行小牛隨後棒喝忽交馳各各競頭走拈華微笑鉢水投針總成刺  
法

圓覺老師老牛挽車譬喩是則是矣而此五祖牛過窓橋則輸却一籌何者五祖底有尾巴  
而圓覺底無尾巴拈華微笑鉢水投針固屬刺法而鹿山者話亦刺法狂狗逐塊瞎瞞趁隊  
瑞阜妄斷罪過彌天眉鬚墮落固甘其分自以手撫摩一下云猶是有些子咄

此上堂一部の傳燈錄ぢや達磨西來の祖意も此にて盡くせり佛光好い處を見付けて  
頷せられた目前の些子を露はして電拂に如同すとはこれぢや老牛車を挽いて喘ぎ  
喘ぎ行く後ろに小牛が隨がふて離れぬ叱々ど撻たり敲いたりすれば母も子も推排



競ふて走る其處から見れば釋迦の拈華微笑も龍樹の鉢水投針も刹法ぢや故さらには別傳して論ずるにも及ばぬ程の事ぢやと是れが眞實に手に入れば一代藏經も農夫が牛を驅る中に在るを宗旨は斯う近い處で活かして使はねば嬉しく無

### 七百四十八 淨慈臘八上堂

舉淨慈臘八上堂。乘萬乘尊榮。受六年饑凍。不離草座。成等正覺。美則美矣。無端道於臘月八夜。忽觀明星。豁然大悟。致令後代兒孫。東卜西卜。淨慈與麼告報。還與黃面老子。有相見分麼。卓拄杖。晴乾開雨路。無事設曹司。

臘月八夜。忽觀明星。豁然大悟。剗肉作瘡。頭上安頭。後代兒孫。八花七裂。早知今日。悔不愼當初。咄。

此の臘八上堂は、筈手ぢや浮かど乗ると踏み逃すぞ、世尊入山六年苦行成等正覺美は則ち美なりこれに置けば好いに靈龜尾を曳き端なく臘月八夜忽ち明星を觀て豁然として大悟すと道ふ不用ことを云ふた爲めに後の世までも兒孫に東に卜し西に卜し種々に義解卜度せしむ乃公が上の通りに道ふたは何んと黃面老子に相見することを得るであらうか爰で虛堂に瞞せられな目先きを利かせ卓拄杖晴乾に雨路を開

き無事に曹司を設く、虛堂和尚尊公は能く人を瞞却なさる之を道ひたさの前口上でしやう某甲も覺えず牛に牽かれて善光寺へ参りました哩。

### 七百四十九 梁山因園頭僧問

舉梁山因園頭僧問家賊難防時如何山云識得不爲冤僧云識得後如何山云眩向無生國裏僧云莫是他安身立命處麼山云死水不藏龍僧云如何是活水裏龍山云興波不作浪僧云忽然傾湫倒嶽來時如何梁山下座握僧手云莫教濕却老僧袈裟角虛堂拈云來爲先鋒去爲殿後不因令出重圍爭見草賊大敗雖然且道者僧還甘也無擊拂子。

者僧能知洞下宗意向梁山而挑戰幾乎打破蔡州城擒得吳元濟而梁山下座輪却一著逸於梁山矣者僧若方梁山下座進前問訊還道觸忤和尚庶幾慈悲禮拜退了則梁山也無容身處惜哉。

這は是れ梁山觀緣は同安志に嗣ぐ洞下の宗匠ぢや洞下の風采は亦別なり箇の園頭の僧亦妨たけず奇特なることを家賊防ぎ難き時如何と妄想思慮紛起を謂ふなり山云く能く盜賊の面を見よ僧云く識得の後ち如何山云く無生國裏に眩向す一念不生の地なり僧云く便ち是れ和尚の寢處でゐるな山云く死水龍を藏さず否や开ん死



んだ水には龍は居らぬぞ。僧云く、開んなら、活水裏の龍を見せ、貰ひたい、山云く、風も無きに、白浪滔天なるも、而かも大浪を作さず、回互の様子なり。僧云く、忽然として、傾瀉倒嶽、山も崩れんとする時は、如何ん、梁山下座して、老僧の袈裟を、濕はす莫れど、已上の問答を、虚堂は拈弄して云く、來るに先鋒となり、去るに殿後と爲る。八識心田を謂ふなり。如是、八識は、いつも先後して離れぬ。此八識の中に、坐して修しては、脱洒は能きぬ。一回、八識田に、一刀を下して、大死一番するに、非ずんば、家賊の大敗を見ること、は能きぬ。箇の僧、梁山をして、下座せしめ、た働らきは、立派なが、箇の僧還つて、梁山を甘諾するや、また肯諾せざるや、爰が見どころぢや。

### 七百五十 虚堂拈永嘉數句

舉。虚堂上堂。永嘉道一切數句。非數句。與吾靈覺何交涉。靈覺妙明。豈不是數句。色聲香味觸。豈不是數句。每日山鳴谷應。風起水湧。豈不是數句。雖然如是。永嘉真覺大師在何處。卓拄杖。唇上畢。斑斑豹刹。舌頭當的。帝都丁。

永嘉曾見六祖。透禪牀三匝。振錫一下。是數句乎。非數句乎。欲得不招無間業。莫謗如來正法輪。一人傳虚。萬人傳實。虚堂饒舌。瑞卓雪上加霜。齒上嘉幾。苦計古看看。版齒生毛。有幾。

莖。

這は是れ、永嘉大師の語を、虚堂拈弄したど、一切の數句とは、一切諸法なり。此諸法は、非數句で、空理なり。吾が靈妙の覺體と、何を交渉せんと、虚堂拈して云く、靈覺妙明か、是れ豈に數句に非ざらんや、色聲香味觸法も、山鳴り谷應へ、風起り水湧く、皆是れ數句に非ざらんや、然れども、箇は且らく置て論せず。永嘉大師は、何處に在るか、拄杖を卓して、唇上ハヒフヘホ、舌頭マツテト、是れ什麼數句乎、非數句乎、驗し看よ。

### 七百五十一 圓覺上堂祖師無妙訣

舉。圓覺上堂。祖師無妙訣。諸人警不警。白旆樹頭魚散子。急水灘頭鳥作窠。阿呵呵。我王庫內無如是刀。

圓覺老師好笑好笑。山僧即不然。祖師有妙訣。一任諸人看。且道是何訣。圓覺道無瑞卓。即有其間。相去多少。若道得分明。許個兔頭。截角龜背。刮毛。若也不然。則德山木上座。臨濟金剛王。

圓覺上堂。祖師に妙訣なし。一法の人に興ふるなし。秘すも藏されるも無い。諸人警不警。氣が付か付かまいが、開んなことに、頓著は無、枯れ木の上で、魚が子を生み、急流の湍。



で鳥が巢を作る面白い阿呵々は、我が王の庫内に、如是刀なしと、是れは容易に出る語で無いが、爰では名實相當で的確と能く辨つた斯ういふ語は國師でなくては吐く考はあらず。

### 七百五十二 雲門示衆大用現前不存規則

舉。雲門示衆云。大用現前。不存規則。有僧即問。如何。是大用現前。門拈拄杖。高聲云。釋迦老子。來也。圓覺拈云。雲門老子。有些好處。雖然。吾愛其長。不愛其短。是汝諸人作麼生。

圓覺老師。愛雲門長處。不愛其短。山僧即不然。短亦愛。長亦捨。長短取捨。事無一向。隨時制宜。何故。牛飲水成乳。蛇飲水成毒。

大用現前規則を存せず。既に是れ大活現前する時には何の規範法則に拘泥せん。大行は細瑣を顧みず。ちや然れども。無眼子の前には此語還つて是れ害と爲る。箇の僧大用現前の様子を雲門に問ふ。門拄杖を拈して。高聲に云く。釋迦老子來也。釋迦が御出でや。退後々々。是れが大用現前か。貴き金玉の如く。賤しき泥土に似たり。而して佛光は拈弄して。吾は其長を愛して。其短を愛せず。と呼々面白い。雲門何處に長ありて何處に短あるぞ。爰等の鹽梅は言語に盡されぬ處ぢや。是れが短ぢや。是れが長ぢや。と。爾才かに。

口を出せば。則ち地獄に入る。こと。箭の如し。然らば佛光は。只是れ虚を受け響を接するのみか。咄哉。拙郎君。爾が眼裏に。梁木の横たはるを見ざるか。

### 七百五十三 圓覺佛成道上堂

舉。圓覺佛成道上堂。王宮不肯居。六年空妄想。深雪凍不死。一場沒伎倆。賊入空屋。犬吠荒村。一天星月白。以拄杖畫一畫云。與爾平分。願視大衆云。汝諸人不得眼熱。卓拄杖下座。

老子當年把不住。辭富入貧。甘受苦楚。六年修行。全沒伎倆。圓覺云。與爾平分。山僧亦請與一分。敢問見取麼否。

佛成道ぢやと云ふて。騒ぎ廻はるが。全體理の解らぬ。氣儘な老漢ぢや。王宮の富貴に肯へて居らずに。山籠りして。六年も妄想ばかり。頭出頭沒した。深雪の裏に凍死も爲なんだが。何にも能きた。伎倆はない。丁度盜賊が空屋に入つた様な。取る物の無いのに。犬に吠えられた箇の語の練れたを。能く看よ。一天星月白の五字は。釋迦の眞識ぢや。面白い。拄杖を以て。畫一畫して云く。其方等にも。半分遣らう。爰で佛光を拜め。大衆を願視して云く。爾諸人眼熱し。少ないで不足であらうか。腹を立てるな。卓拄杖下座。光前絶後の上堂ぢや。是れが見えたら。臘八接心も少しは所得があらう。



七百五十四 長慶示衆淨潔打疊了也

舉長慶示衆云淨潔打疊了也近前來我劈脊與汝一棒有一棒與汝須無慚愧無一棒與爾作麼生會圓覺拈云長慶向者裏厨老僧不道無也較他三步五步有人爲長慶作主底出來與老僧相見喝一喝

長慶圓覺俱出醜自厨不覺臭山僧亦兼在中畢竟如何偷佛錢買佛香此長慶の示衆は向上に摺り上げた則ちや最後の何を手に入れた者で無くば合點往くまい淨潔打疊了也とは何にも角も片付け済んだと云ふものは出て來れ乃公が劈脊びつしやりと胴骨へ掛けて一棒打はし遣らうと云ふ爰等は既に是れ大活現前什麼としてか未徹在なる則を透らねば一寸見えまいぞ一棒汝に與ふるあらば須らく慚愧を生ずべし一棒汝に與ふるなくんば作麼生か會せん怎う片付るぞ已下佛光の評を看よ師拈して云く三百年前に死んだ長慶めが乃公の處に來つて奇麗なる坐敷に厨屎垂れ散らした老僧も亦垂れて遣らう併しながら長慶に比較すれば劣つた三分一か五分位ちや若し人ありて長慶の爲めに此の厨は己が施主であるぞ云ふことを申し出るものあらば乃公も逢ふて遣らう喝一喝此等の些子を手に入れねば罰子ではない佛祖の命脈歷代遞傳も只此の些子にあるちや

七百五十五 鹿山歲旦上堂

舉鹿山歲旦上堂昨夜思量今日禪一半是新一半舊今朝對衆抖擻看零零落落趁風走勢飛去年梅依稀今歲柳雨過雲山片段青學翁面目俱出醜是汝諸人有爲吾蓋覆者麼咄我行荒草裏汝又入深村

昨日思量今日禪新舊交互有花有月學翁面目任從出醜爾爲爾我爲我雖然昨日底即今日底打成一片共祝聖明以答昭代共同唱太平春

這箇の上堂は東山下の風采ちや昨日の思量今日の禪一半は則ち新にして一半は舊ちや偏正回互し明暗交迭したが折角苦勞した昨日の禪は今朝取り出して大衆に供養せんと藻掻き廻はすも零々落落々風を趁ふて走り一つもない咄い去りながら去年の梅今年の柳は勢飛依稀と見えるのみか雨後の雲山も片段は青いは乃公の面目其儘に醜態を露はす此の醜るしい姿たを蓋覆する者はないか無ければ好い貴様は深村に入れ我れは荒草に行く面々思ひくにするが好いと是れ什麼學翁も大分年を取られた氣儘が出て來たぞ然しながら恁麼の禪は中々老手ぢやなくては能きぬ



七百五十六 淨慈結夏小參

舉淨慈結夏小參。僧問西天舊令東土共遵。諸方依舊畫葫蘆。淨慈因甚不入者。保社師云。若不同牀睡。焉知被底穿。僧云。西天以臘人為驗。東土以何為驗。師云。漆桶為驗。僧云。如何以漆桶為驗。師云。漆桶盛得飯。與人喫。僧云。恁麼則三十三天撲帝鐘。師云。老僧關輪不嚴。僧禮拜。淨慈老手。何處覓漆桶。盛飯與人喫。誰知關鎖也。不嚴。烏律律。眼掛空壁。三十三天撲帝鐘。稱絲孔中吹鐵笛。會麼。若也不會。善射者不當的。

是れば結夏十五日の前晩に當つての小參ぢや。僧問ふ西天の舊令東土も遵がひ。諸方に依て葫蘆を畫く淨慈甚に因て者の保社に入らざる師云く乃公が懐ろを知つた者で無ければ乃公の我儘を己奴らは知つたことでない者の僧中々の腕扼ぢや。左様ならば西天には臘人を以て驗とし其勤惰を試験しますが此方は恚でムる師云くフーン漆桶大死一番底に届いた無分曉の場を以て驗とす僧云く开れば恚うでムるな師云く漆桶に飯を盛り上げて人に喫せしむるのぢや解つたか。是れ等は盤に和して托出したぞ。僧云く恁麼ならば三十三天に帝鐘を撲ど。是れは西天の論議の戦勝に。

鐘を撲つは故事ぢや。非出度ことでムると師云く乃公は關鎖不嚴から兎角銜け込れる。是れは何ぞ。是れは何ぞ。老僧住持事繁と一様に脱出か。此等は鍛ひ上げた虎堂の辣腕ぢや。斯ういふ處で宗旨の仔細を知れ。

七百五十七 乾峯和尚示衆

舉乾峯和尚示衆。法身有三種病。二種光。須是一一透得。始解穩坐。雲門出衆云。庵内人為甚。麼。不知庵外事。乾峯呵呵大笑。雲門云。猶是學人疑處。峯云。子是什麼心行。門云。也要和尚委。悉。雲堂拈云。甕拍版無孔笛。雖然韻出青霄。其奈音節失音。會得一夏容易得過。不然夜來請首座為衆拈出。

法身有三種病。二種光。將謂黃連甜似蜜。誰知蜜苦似黃連。雲門出衆云。庵内人為甚麼。不知庵外事。騎賊馬。趁賊乾峯呵呵大笑。愁人莫向愁人說。說向愁人愁。殺人。雲門云。猶是學人疑處。作賊人心。虎峯云。子是什麼心行。殺人。須見血。門云。也要和尚委。悉。丁寧損君德。無言真有功。峯云。與麼始解穩坐。賊是主人。乾峯示衆。法身道什麼。再犯不容。早是平地起毒波。淵肚裏種荆棘。雲門中毒。而解道。庵内人為甚麼。不知庵外事。咄。庵内爭不知。庵外事。曉天窓紙旭光上。推戶始知楓葉紅。又云。勘破了也。



乾峯示衆の三種病法身ぢや先づ初句に於て乾峯を看よ病と光と三つの二のど妄想  
したら驢年に到るも乾峯の意は見えぬを流石の雲門ぢや一箭を放つて黒星を射た  
什麼と道ふ庵内の人甚麼として庵外の事を知らざると箇事の取捌きの標本ぢやと  
古人も云ふてある然し雲門の意が見えるか怎ぢや乾峯呵々大笑峯甚に因て呵々笑  
ふぞ若し頻りに涙だを涙がしめば滄海も亦乾かすべし是れは山僧の下語ぢや門云  
く猶是れ學人の疑處前箭は猶は軽く後箭は深し峯云く子是れ什麼の心行ぞ獅子王  
獅子兒に哮咆を教ゆ門云くまた和尚の委悉を要す峯云く與麼ならば始めて穩坐を  
解せん父に迷子の訣あり子に打爺の拳あり是等一々臍落ちせぬと此の則の取捌き  
は能きぬぞ夫れで虚堂の拈評は豈拍板無孔笛此笛の音韻は青霄の上に出て何にと  
も道への響ちやが怎も音節を失ない拍子が遠ふてあると是れ什麼何處が音節旨を  
失したる處ぞ爰等を穿鑿して當を得ば一夏功を虚うせずぢやな一に首座を請じて  
來夜の拈出を待たぬぞ

### 七百五十八 淨慈謝秉拂

舉淨慈謝秉拂夏齋上堂寧可熱鐵纏身不受信心人衣寧可洋銅灌口不受信心人食上座

若能如是攬長河爲酥酪變大地作黃金供養上座未爲分外只是不受衣不受食焉有許多  
殊勝忽若有人修法供養又作麼生卓拄杖生心受施淨名所呵

息耕老人劈腹腕心廣大供養瑞卓老來懶眠坐受檀越信施使十方檀那隨分植福何故  
細雨濕衣看不見閑花落地聽有聲

是れ秉拂の謝齋に示衆ぢや熱鐵身に纏ひ洋銅口に灌ぐ信心の人の衣食を受ず上座  
若し此意を吞込んだら日に萬兩の黄金を消するに堪ゆべし若し衣食を受けずんば  
許多殊勝の事あらん秉拂の功も無きなり其處で今秉拂の首座あり法供養を修す此  
端的如何卓拄杖心を生じて施を受るは淨名の呵する處ぢや此首座は本分の人ぢや  
人天の供養に當るに足るとなり

### 七百五十九 虚堂拈九峯慈惠禪師

舉虚堂上堂九峯慈惠禪師因瀉山示衆云汝等諸人只得大機不得大用慈惠抽身出去瀉  
山招之更不回頭瀉山云此子堪爲法器虚堂拈云九峯易見瀉山難見若是淨慈則不然待  
他喚不回頭急送官楮一千與之何故助他買草鞋行脚

淨慈老師待慈惠不回頭急送官楮一千爲行脚資賊過後張弓瀉山早既知彼中路必回



便道此子堪爲法器。果然慈慧却回。遂嗣瀉山淨慈。擇法眼明。而偶錯誤。古人云。清明之下。有暗者。誠哉。

瀉山が慈慧の身を抽んで出で去るを招けども回らざるを見て、此子法器と爲るに堪へたりとは父能く子を知るの明なりと謂つべし。虚堂拈して云く、九峯は見易く、瀉山は見難しと、何處を見て瀉山見難きぞして淨慈ならば草鞋資一千官楮を與へて、今少しく行脚せしめんと是れ又面白いが然しながら瀉山は先きに慈慧必ず中途却回の事を見抜て居る故に、此子法器に堪へたりと云ふたぞ。瀉山全く慈慧を知らざりせば、此言を發せず所謂慈慧の抽身出去は大用なり、果然九峯却回して瀉山に法を嗣ぐ、虚堂の批判山僧は横に點頭せざるなり。

### 七百六十 淨慈拈藏頭白海頭黑

舉淨慈上堂拈藏頭白海頭黑云。盡謂者僧被馬大師父子穿却鼻孔。殊不知馬大師父子鼻孔被者僧穿却。會得藏頭白海頭黑優劣已分。不然易分霜裏粉難辨雪中梅。南院云。問在答處。答在問處。欲見馬大師藏頭白海頭黑須見者僧問處者僧暗中射的將其音響致於馬師。馬師見兔放鷹。道得藏頭白海頭黑。且道馬大師父子鼻孔被者僧穿却。

者僧穿却他家父子鼻孔。要識藏頭白海頭黑麼。繡出鴛鴦呈似了。金針密插錦香囊。咄。藏頭白海頭黑。いつ聞いても面白。向上宗旨の曲調は別なものぢや。古今の批判孰れも蘭菊美を揔まゝにして優劣はない。而して虚堂の評論又特別ぢや。然れども馬師父子の鼻孔者の僧に穿却せられたりとは山僧は取らず。那箇か是れ箇の僧か。馬大師父子の鼻孔を穿却したる處ぞ。他は馬師海兄智藏に歴訊した處は箇の僧却つて是れ三師の鼻孔を穿却するなり。藏頭白海頭黑を會得せば優劣既に分るとは是れ什麼の優劣ぞ。馬師父子優にして者の僧劣か。者の僧優にして馬師父子劣か。此諸訛分ち難いは霜裏の粉雪中の梅に似て相似たり。然れども藏頭白海頭黑は決して這箇の一色邊に非ず。若し是れ鳳凰兒ならば這般に向つて討ねずぢや。咄。

### 七百六十一 圓覺上堂只是一句

舉圓覺上堂。山僧尋常說法。只是一句。一半留與汝看。一半付與汝參。參得透。許備會主中主。看得破。許汝會實中主。諸人且作麼生會。良久云。打刺還他。秋土麥唱歌。須是帝鄉人。卓拄杖下座。

瑞卓一句無人參得透。看得破。自吹自拍。有時作主中賓。有時作實中主。要只自問自答。有。



入問則答來者不拒去者不逐畢竟如何只有受璧之意全無割城之心

東山下の大脱空ぢや尋常說法只是れ一句とそれは多きに過る半句で可いして其一半は汝に留與して看せしめ一半は汝に付與して看せしむると佛光此割出しは怎うぢや一半と一半と成る程二つで一句ぢやこれは讀めたか留と付と相去る多少ぞして又參得透と看得破と主中の主とも爲りませう賓中の主も亦何ぞ妨げん諸人且つ作廢生か會せんと云ふか怎しても和尚の言は會得能きまつせん只解得底は下の良久に在りいかにも打劫は信濃蕎麥より善きはない唱歌は東京の人に限る萬物は出處の好きに如かずぢや卓拄杖下座これで先づ一句も濟んで仕舞ふた然しながら圓覺の大脱空を見ては沒交渉ぢや

### 七百六十二 鹿山佛涅槃上堂

舉鹿山佛涅槃上堂今朝二月半罽曇供死款雙林俱變白百華紅爛熳一箇臭死屍命根猶未斷我有七尺紅釘信采下一針看卓拄杖良久召大衆云且道是者婆是盧扁

釋迦老子當年命根不斷被鹿山紅釘一針死猶有餘榮豈圖今朝二月半瑞阜一見主眼卓堅勢不可不治先針罽曇炷香三拜次及鹿山也要一針雖然如是山僧一針作廢生爐

輔之處多鈍鐵良醫之門多病人

此上堂の頌は翰韻古體ぢや佛光の健腕は紙上に躍如して頌る絶唱ぢや今朝二月半罽曇死罪の款狀を自から提供した婆羅雙樹は俱に白と變じて百花紅に爛熳と開き榮えたと此二句は明暗雙々を表したとか云ふか开んな詮議は怎うでも好い涅槃の時の景氣を述べたのぢや其處で一箇の臭死屍はまだ眞實に死に斷ぬと勿體無い大恩世尊を斯の様に蹴倒す様に云ふて罰が該當ぬかまた其上乃公に七尺の眞紅な釘がある耶蘇の十字架に罹りた釘ではないか采に信せて一針に留めを割したを看よと恐怖いぞく佛光の名醫に逢ふたら者婆も盧扁も徒跣で逃る活かすで無くて殺す醫者殿ぢや何んと凄まじいものぢや然しながら斯かる名醫の手に係つたら釋尊も活き上りて來るぢや

### 七百六十三 虛堂中夏上堂

舉虛堂中夏上堂舉馬祖因龐居士問不味本來人請師高著眼馬祖直下覷居士云一種沒絃琴唯師彈得妙馬祖直上覷士禮拜祖歸方丈士隨後云弄巧成拙師拈云是誰弄巧成拙若是馬師弄巧成拙上半夏已過若是居士弄巧成拙猶有四十五日在定當得出免爾聽參



龍老馬師弄得一種沒絃琴。息耕奪來。弄巧成拙。充半夏供養。爭奈美食不中。他人喫瑞草也。有一種沒絃琴。志在高山。則巍巍乎。志在流水。則洋洋乎。不得鍾子期。而自彈自弄。畢竟如何。一曲兩曲。無人會。雨過夜塘。秋水深。

這只是虛堂馬祖。龍老の機縁を拈じ來りて。中夏の上堂とした巧みなる垂示ぢや。龍居士が請ふ師高く著眼と云ふたで。馬祖は直下に戯た。居士は一種の沒絃琴彈じ得て。妙と云ふたで。直上に戯た。此馬祖の働きは。怎うぢや。洒々落々の境界は。巧を弄して。拙と成したと。居士は賞翫ぢやが。虚堂は亦之を拈弄して。面白い。誰か巧を弄して。拙と成したか。馬祖ならば。上半夏已に過ぐ。居士ならば。また後ちに四十五日が在る。如上が徹底承當したらば。備も聽參を免して。遣らうと。馬祖と龍居士の沒絃琴は。遂に虚堂に奪却れて。中夏の上堂の清瓶に供せられた。虚堂和尚は。中々拙で無い。巧みな手段を弄したぞ。

### 七百六十四 息耕謝監收上堂

舉息耕謝監收上堂。刈禾鎌子未露鋒銛。多少祖師乞命。秤尺斗量權衡在。握目機銖兩無差。要知兩處收功。塞斷袈裟腹。塞斷後如何。卓拄杖。臨濟掌黃葉。

出納得宜。豐約適時。不使燕頤虎頭。鳴不平者。監收之力也。蓋林命根繫焉。但要陳平宰肉。其如佛祖乞命。銖兩無差。則且置兩處收功。亦不問袈裟腹如何。塞斷去切。息耕監收を謝する。上堂ぢやが。禾を刈る鎌子。未だ鋒銛を露はさずとは。怎うぢや。斯ういふ處で。氣を著けて。看よ。佛祖如何に。窺ふとも。其尾巴を見ること。能さぬで無ければ。袈裟で無い。多少の祖師も。命を乞ふぢや。秤尺斗量權衡。皆手の中に在り。目機銖兩少しも。差はぬ。此の兩處に。功を收むるを。知うとならば。袈裟に。空腹の不足を。云はせぬが。肝腎ぢや。袈裟の布袋腹を。膨脹させた後は。如何。卓拄杖。臨濟。黃葉を。掌す。あ。好い。能く。利いた。山僧ならば。樊噲鴻門を。踏むと。道ふ處ぢや。それより。も。百千倍勝れて。ある。虚堂和尚ぢや。

### 七百六十五 鹿山結夏小參

舉鹿山結夏小參。僧問。記得臨濟訪德山。作瞌睡勢。意在於何。師云。作賊。謹關進云。濟鼓繩牀。一下。又作麼生。師云。客是主人。相師進云。山云。作甚麼。意作麼生。師云。一釣便上。進云。濟云。和尚且瞌睡。又且如何。師云。雖得一場笑。則却一雙足。僧禮拜。

德山臨濟商量。鹿山纒語。其一半而未悉。全豹殊不知。臨濟賊是小人。智過君子。雖然臨濟。



也争奈德山野聲如雷。

鹿山結夏小參に僧問、臨濟德山を訪ふ、山瞌睡の勢を作す、物見て主眼卓堅するちや、臨濟如き曲者が来たどて狸寝をした、如何なる理ぞ、師云く、それは盜賊根性ある者は、手前も亦用心をして、賊を防ぐ、進んで云く、濟細牀を敲くこと、一下の意如何、師云く、客次第で亭主の様子が知れる、進んで云く、山云く、甚麼を作すの意如何、師云く、果然德山は臨濟の一鉤に掛つた、進んで云く、濟云く、和尚且つ瞌睡し去れの意如何、師云く、臨濟便宜を得たど、思ふたが兩脚共に別却してしまふた、師の峻機電發は洵に面白い、此機緣臨濟録には這の老漢寐語して什麼を作す、山便ち打す、師細牀を掀倒す、山便ち休すに作る、此録に記する所と、多少の違あり。

### 七百六十六 圓覺結夏上堂

舉圓覺結夏上堂清淨彌滿中不容他、良久云、老來無伎倆、石上種蓮華、卓拄杖下座。

圓覺伎倆石上種蓮也、較些子、若不然、則只是清淨彌滿、佛光如來。

佛光また脱空が出た清淨彌滿中に、他を容れず掃き切つた場合ひちや、此座布が直に清淨彌滿ちや、釋迦彌陀でも寄せ付けぬ、良久して云く、老來伎倆なし、石上に蓮華を種ゆ、卓拄杖下座、嗚呼面白、是れでこそ佛光國師ちや、然れども、此意味を解するもの幾許ある、鍛練功を積た者でなくては、此鹽梅手に入らぬぞ。

### 七百六十七 圓覺上堂江月照松風吹

舉圓覺上堂江月照松風吹、永夜清宵何所爲、以拂子敲禪床云、莫怪坐來頻勸酒、自從別後見君稀。

相逢兩會家、永嘉拍鼓鹿山起、舞仔細看來、有親有疎、何故依稀、似曲纔堪聽、又被風吹別調中。

這は證道歌の語ちや、佛光も賞翫の餘り、拈じ來たぞ、此晴れ亘つた涼しい景色は、誰が所爲ぞ、拂子を以て禪牀を敲て云く、彼此云はずと、一盃飲み遣れ、今別れて再會するこども稀れで、あらうから、まア充分に飲まれと、面白い、これが斯う出て來ぬちや、佛光の老手前の上堂と、一雙の皎玉ちや。

### 七百六十八 僧參水潦畫一圓相

舉僧參水潦畫一圓相、放潦肩、上潦三撥、復作一圓相、指僧、僧禮拜、潦便打云、這弄虎頭漢、鹿



山拈云、己所不欲、勿施於人、水潦知而故犯、雖然得牛還馬、拋玉引磚、中間奢儉、不同彼此、要知劔手。

水潦之與者、僧彼此探竿影草、垂絲千尺、意在深潭、然雖如是、兩箇老漢、元來聚成招箭、咄。僧水潦和尚に參す、此僧驗主問を將て來た探竿影草、水潦を見んとした、潦も亦圓相を畫して僧を指す、此僧圓太い奴ぢや、此禮拜潦を如何と見る、潦打つて云く、這の弄虛頭漢と、佛光拈して云く、己れが欲せざる所、人に施す勿れ、水潦知りつゝ、詮方なしに犯した、然れども、大に損したは、牛を得て、馬を還し、玉を抛ちて、磚と換へた、其間た兩人とも、放行把住の手段、同じからざれども、互に劔手を見たさの事ぢやと、面白い評ぢや、祖宗門下は、始終此機がなくて、は活きて來ぬぞ。

### 七百六十九 息耕上堂拈松源爲人

舉息耕上堂、松源師祖臨示寂、告衆云、久參兄弟、正路上行者有、只不能用黑豆法、臨濟之道、將泯絕、無聞傷哉、拈云、驚峯老子、大似倚杖騎馬、雖無僮仆之患、未免傍觀者醜。松源示寂、其言也、悲息耕老子、扶衰、則是只是半提、若夫至于黑豆法、則正法眼藏、向瞎驢邊滅却、喝。

松源師祖寂に臨む、示衆に云く、久參の兄弟には、正路上に行く者は無いとは云はぬ、只是れ黑豆の法を用ゆること能はず、黑豆の法とは、什麼播黑豆と云ふことか、否々、是れが松源の毒氣ぢや、臨濟の道も、將に泯絶して、聞くなからんとす、傷しい哉、是れ養子の縁か、什麼ぢや、人の將に死せんとす、其言や好い、丁寧君徳を損するの嫌ありてか、孫弟子の虚堂は、扶けねばならぬで、拈して云く、驚峯松源の塔處、老子丁度、杖に倚て馬に騎る、丁寧に過ぎる僮仆の患は無きも、活眼者から見れば、醜いと、是れ什麼宗旨は、斯う拈弄せねば、面白くない、東山下の風采ぢや。

### 七百七十 虚堂辭衆赴徑山

舉虚堂辭衆赴徑山上堂、秤鎚捻得、汗出、石人喝得、汗流、臨機應變、隨分知羞、乘時推上五峯頭、雖然孤舟共渡、尙有夙因、兩夏一冬、可無攀感、草拄杖、但有路可上、更高人也、行。

息耕臨老龍天推殺、上五峯頭、好將三寸舌、罵倒五湖僧、則不問如何、是辭淨慈、赴徑山底、一句只改舊時相、不改舊時人、咄。

虚堂龍天の推殺に依て、徑山に出世、上堂ぢや、秤鎚を捻得て、汗が出た、石地藏を喝して、汗が流れた、是れ什麼參學に骨を折ると、朝の間の茶の子ぢや、臨機應變、世話を焼いて、



參學の者も進修を知らる様に爲つたが機熟して、今度は上げられて、五峯の巔に推し上げられた天涯の客路孤舟を同ふするも夙因ぢや袖の振り様も多少の縁がある。兩夏一冬、淨慈で共住したが攀感なかるべけんや卓拄杖法の爲めちや路さへ有れば怎んな高い處でも登つて行くぢや徐々參いらうと珠轉じ玉旋る圓陀々地老手でなければ斯うは出ぬぞ。

### 七百七十一 圓覺上堂夜來好風吹

舉圓覺上堂夜來好風吹折門前一枝松有些奇特處露出最高峯卓拄杖下座

圓覺雖偏愛松折露出最高峯瑞阜唯恐茅屋障缺被風吹壞風流溫藉爭似南泉。夜來好風吹門前一枝の松を折る何限の風光添え得たり今より最高峯を坐して見ると南泉の下た圖に佛光が點睛して一層の觀を増した山僧は罅隙を見付て夫れは好いが防風の障屏が除たで屋舎の破壊に堪へられまい恰も是れ一鼎の羹汁に兩個の風翼を點するに似たり二大老怪しむことなかれ空疎なるを。

### 七百七十二 鹿山冬夜小參

舉鹿山冬夜小參舉裴相國一日托尊佛跪膝於黃檗前云請師安名榮召相公云謝師安名師拈云住世界如蓮華清淨過於彼良久云會麼檀那向這裏直下擔荷去便見三十二相圓滿具足。

裴相國尊佛安名鹿山好語何不引盡這話豈不道乎稽首禮無上尊看來鹿山只是雕像而忘點眼矣。

裴相國尊佛の安名を黃檗に請ふ榮相公と召す公云く師の安名を謝す佛光拈じて云く世界に住する蓮華の如し清淨なること彼に過ぎたりと可惜許淨地上に肩を撒す折角安名點眼を了した尊佛を佛光の手で本の木阿彌に還復した山僧這箇の說話古人と相見の分ありや否や直下に擔荷し去らば便ち三十二相圓滿と見ん咄。

### 七百七十三 徑山上堂開端令節

舉徑山上堂開端令節萬事從新普賢磨墨文殊把筆書箇事事大吉從茲常住寬餘掃除通積斗南長見老人星五峯峨倚空碧。

息耕老師瑞世徑山萬事從新箇箇協吉山僧也祝萬福雖然斗南長見老人星五峯峨倚空碧只是可惜許。



虎堂徑山に瑞世して上堂時是れ開端の令節に當る事々吉祥にして文殊は墨を磨し、  
觀音は筆を把り、驪山萬歳の聲は山谷に響き渡る常住も負債を掃除して今春より寛  
餘になる吉祥だらけぢや、其上に壽星も祥を呈し、五峯も空に聳えて芽出度いと然れ  
ども惜い哉者裏に坐在す、兎角年が老ると誰も皆斯うなるぢや。

### 七百七十四 徑山謝知事

舉徑山謝知事上堂楊岐挾紙衾出入庫司三十年か輔慈明用都寺不點常住油買大椀造  
食供養大衆後爲亞世命師叢林標準況此龍峯名滿天下來者即非凡木居者盡是棟材從  
此日日春風挽回國師元氣且股肱得人一句作麼生老僧八十間無數贏得看山復看雲

息耕八十住徑山楊岐之輔慈明用都寺之供養大衆引得激勵知事與其媚於奧寧媚於  
窻吾嘗聞之矣看山看雲也雖好挽回國師元氣則不是何故老須益壯伏波道底

是れは知事の勤苦の狀を謝したる上堂ぢや楊岐は三十年紙衾を挾さみ庫司に出入  
して慈明の化を輔佐した用都寺は常住の油を節儉して食を造つて大衆に供養した  
孰れも後ち亞世の命師叢林の標準と爲つた況して徑山は天下の名區にして四來  
の龍象は棟梁の材と爲るべき爲ぢや開山國一禪師の元氣を挽回し叢林の春風を起

すも爰からぢや第一に股肱に人を得ねばならぬ乃公も八十に爲つたで用には立た  
ぬ日々山を看雲を看て居るばかりぢやと是れは知事を得たら夫れに責任を譲りて  
何事も知事任かせで主人は只游んで居るばかりと云ふ様に見えるが爾うで無い此  
境界の勝れたるを看よ虎堂は中々油断ならぬぞ浮かどすると睡の毛までも抜かれ  
るぞ。

### 七百七十五 息耕上堂鴉作鴉鳴

舉息耕上堂鴉作鴉鳴鴉作鴉噪盡大地人不知孔竅忽有箇漢出來道大唐國裏有人在老  
僧不覺屈膝吐舌何故將謂無人

息耕老未開乎大唐國裏大有人在只如息耕道底人則無若有人則一棒打殺與狗子  
喫却也不爲多也何麼有麼山僧之膝容易不屈也無故而吐舌雖然敢保無者人何故  
龜毛一丈兎角八寸

虎堂の上堂は諸方皆讚歎するは他に勝れて輕妙な手腕あり箇の垂示特に面白い鴉  
は鴉鳴を作し鴉は鴉噪を作す然るに世界中の人は孔竅を知らぬ目鼻が無いとは仰  
山の語ぢや語未だ終らざるに一人出で來りて道ふに魯公は無いと吐舌するが大唐四



百餘州に孔竅を知る人が有りますと、其處で息耕膝を屈して舌を吐くは敬服の貌ぢやなせか乃公は人が無からうと思ふたに有ると聞いたら驚愕仰天ぢやと是れ什麼此剽輕を看よ一寸模擬は能きぬぞ斯ういふ處で息耕の宗旨を手に入れよ。

### 七百七十六 鹿山至節上堂

舉鹿山至節上堂。天悠悠地悠悠。拈拄杖云。前人腰帶後人收。擲下拄杖云。更有收人在後頭。

前人腰帶後人收。更有收人在後頭。天地悠悠無涯際。又隨月色過羅浮。宗旨に練熟する老手と成ると句を拈するも自由ぢや。此上堂を看よ。蓋に拄杖を拈して前句を扱かひ拄杖を擲下して後句を捌く。佛光人の憤鼻揮で角力を取り資本無しで商賈に利得を獲た斯んな和尚には油断ならぬ。腦後に腮を見る共に往來する勿れ。斯んな人に出會すると怎んな目に逢ふも知れぬぞ山悠悠々水悠悠々。

### 七百七十七 圓覺退院上堂

舉圓覺退院上堂。前年臘月住此山。今年臘月離此山。一去一來無定處。碧天雲外不相關。

哲人去住固無拘束。有緣住無緣去。住離二字看國師。此退院上堂は頌中の字句に依れば少しく事あつたと見える。通途の退院に非ざるべし。固より哲人の去住に拘束は無い。一二の句に於て國師に相見せよ。一去一來規定法則はない。因縁の有無に任かせて置く。碧天廣世界に雲外の一身ぢや誰の厄介にもならぬと國師脱洒の境界を見るべし。

### 七百七十八 虛堂拈雲門示衆

舉徑山上堂。舉雲門示衆。三乘十二分教。遠塵西來則不可。後來雪竇大師舉了。隨後唱云。大衆好喝。落在什麼處。若要鼻孔透天。須是辨取者。一喝拈云。二大士承家法。殊不知有滲漏處。徑山則不然。若要鼻孔透天。直須去此一喝。

唯此一喝。雪竇取徑山去。二大老一代龍門。豈下容易斷定哉。瑞阜處此間。令下批判。則將是。是れは虚堂の狼毒肝腸ぢや觸著したら人を殺す實に身毛悚立するは是れぢや。雪竇の鼻孔透天ならんと要せば須らく是れ者の一喝を辨取すべしと道ふは光前絶後ぢや。虚堂其後蹤を躡みて此一喝を去るべしと道取す。氣急に人を殺す。これが見えたら



